
リリカルなのはThe origin 永遠の名を使う者

黒のカリスマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはThe origin 永遠の名を使う者

【Nコード】

N5068X

【作者名】

黒のカリスマ

【あらすじ】

君死んじやったから転生してよ……

んな適当な……

能力は何にする？

じゃあ俺が考えたAtoz

主人公転生ものです

リリカルなのはの世界に転生した大道連夜

彼の目的はその世界のすべてを覆すこと

「俺は破壊者にでもなんでもなつてやる！

この世界は俺がぶつ壊す！」

自分の中でさまざまな解釈で進めて行きます

少々どころかかなりの矛盾点あるかもしれませんが、皆様どうぞ暖かく見守ってやってください

ちなみに主人公はチート野朗です

プロローグ(前書き)

頑張ります

プロローグ

目を開けると、そこは真っ暗だった

？『嘘はいけません・・・真っ暗だったら何も見えないでしょう？』

確かに・・・訂正

目を開けると、そこには何もない空間が広がっていた

？『よろしい・・・では行きますよ？』

その声が聞こえるや否や、俺の目の前に白装束の女性が現れた

俺「あんた誰？ここは何処？俺の記憶が確かなら、ベットで寝てた筈なんだけどな？」

俺は非常に気分が悪い

なぜか？答えは簡単である

人が気持ちよく寝ていたのに起きたら意味のわからない場所に連れられてる

俺はこういうドッキリ系は大嫌いな部類である

？「あの・・・喋って良いですか？」

白装束の女は若干冷や汗を流しながらそういった

俺「どうぞ？ただし、用件は明確に、ハッキリと、わかりやすくでお願いするよ？」

おれがそう言つと、女性はさらに冷や汗を流していたが、構うものか早く家に返してほしかった

？「あの・・・私の名前はアテネと言います

これでも神の端くれでして、今回貴方をこの場にお連れしたのは、貴方が現世で予定していなかった死者になったからです。」

俺「え？俺死んだの？」

何の冗談かと思つたが、直後に俺の真下に移された映像には、確かに天井に潰されて肉塊になった俺だったものが合つた

俺「あらら、これはえげつない・・・なんでこんなことに？」

俺がアテネに説明を求めると、おろおろとしながら答えた

アテネ「あの・・・実は、貴方の住んでいたマンションの屋上で、自爆テロがあつたんです。

しかし、貴方は奇跡的にも生還する筈だつたんです。ですが・・・。」

俺「ですが？」

アテネ「あう・・・その、間違つて私が貴方をそのテロで死亡する死亡者リストに入れちゃつたんです！ごめんあんさい！！！」

アテネはそう言って頭を下げた

俺「なるほどね……つまり死んだのはあんたのせいってわけだ」

アテネ「すいません！あの……よろしかったら転生システムをご提供できますが……」

アテネは涙を目にためながらそういった

何？転生システム？

あの二次元小説でよくやってるアレ？

なに？チートな能力とかもらえちやったりできるわけ？

アテネ「できますよ……」

俺「人の心を読むなアテネ……そか……なら転生してくれほれ、ここに能力とか纏めた紙あるから」

そういつて俺は突然現れた一枚の紙をアテネに渡した

アテネ「何処に持ってたんですか？」

俺「いやな、やっぱそう言う転生とか憧れるじゃん
だからさ、能力とか考えてたのさ……まあ本当に使うときが
くるなんて思いたくなかったけどな」

アテネ「なるほど……へえ〜分かりました

ではこれらの能力 + を付けて、貴方をリリカルなのは世界に転生させます」

アテネがそう言った瞬間、彼女の腕から光があふれ、俺の中に吸い込まれた

瞬間、俺の体は光り輝いた

俺「おお・・・こいつは・・・」

アテネ「じゃ、じゃあ・・・頑張ってください」

俺が沸きあがる力に感動していると、アテネがそう言って俺の足元に穴を開けた

俺「ん？あああああああああああ！！！」

俺はそのまま穴に落下して行き、意識を失った

プロローグ（後書き）

はいども

黒のカリスマです（笑）

これから頑張りますんでよろしくお願いしますOTL

主人公設定（前書き）

大体の設定です

主人公設定

主人公

名前 大道連夜

年齢 19 7歳

身長 130cm

体重 27kg

性格 自堕落で無気力、だが芯は一本通っているようで、時々確信をつく言動をする

一様7歳という年齢なのだから言葉遣いは自重しようと思っているらしいのだが、結局自重できない結果になっている
約束は守るほうで、一度結んだ約束には律儀に従う

生前の記憶があるので、原作ブレイクをしようと奔走はする

能力 Atoz

某半分こライダーに登場したガイアメモリのA〜Zまで全26種類のメモリを使うことができる

実際に主で使うのは「E」のエターナルメモリ、ロストドライバーを使って仮面ライダーエターナルに変身する

しかし、本人がまだエターナルに認められていないため、変身できるのはレッドフレアのみとなっている

魔力量ランク EX

デバイスは持っていないが、防壁程度は発動させることができる

エターナル レッドフレア

身長 180cm

体重 70kg

連夜が永遠の記憶を持つ「E」の記号が記されたエターナルメモリを、自身の腰に装着したロストドライバーを使って変身した姿
レッドフレアはエターナルの基本形態であり、両手には真つ赤な炎を思わせる模様が入っている

しかし、この状態ではエターナルのすべての力をすべて使えるわけではない

連夜の能力であるAtrozはエターナルの真の姿であるブルーフレアでなければ使えないため、この姿はある意味不完全体であるといえる

マキシマムドライブは「エターナルレクイエム」ではなく、紅蓮の炎を拳に纏い相手に攻撃する「永久の終焉を告げる炎（エターナル・エンド・フレア）」である

主人公設定（後書き）

ふう……とりあえずしばらくはレットフレアで戦わせます

というより、なのはの暗黒時代から始める予定です

でわでわ

第一話（前書き）

さあ始まりました第一話

連夜の活躍にごきたいください

第一話

目を開けると、辺りには見たことのない町並みが広がっていた

ふと道路の標識を見ると、「海鳴市」と書かれていた

連夜「まじでリリカルなのはの世界に来ちまったわけか……しかしこの体、えらくちんまりしちまったなあ」

そういつて俺は自分の体を見た

19歳だった俺の体今7歳くらいの体になっていた

着ている格好はなんとというかいたって普通の格好と言ったところである

今気づいたが、俺は覚えのないカバンを背負っている

連夜「あのアテネって女、ちゃんと俺の紙に書いてあったとおりにしたんだろなあ……」

？「ちゃんとやったわよ……ちゃんと」

俺がそう言つと、何処からか声が聞こえた

連夜「ん？うお！」

見ると、俺の肩に大人の手のひらサイズくらいの人形が乗っていた

連夜「ん？リインフォースか？」

ふとかなり先にでるであろうリインフォースに似ていたのでその人形にそんなことを言うとは

アテネ「違います！アテネですよ・・・もう！貴方を転生させた後に他の神様達に貴方を観察しなさいって言われたからこの姿で来たりんですよ

人形みたいなサイズなら何も問題ないでしょう？」

そういつてアテネは頬を膨らませた

連夜「そうだな・・・これくらいのサイズなら可愛いな」

俺はそう言つてアテネの頭を撫でた

アテネ「ん／＼か、可愛いなんて／＼」

アテネがなぜか顔を赤くした

と言つかこいつキャラ変わりすぎだろ（笑）

連夜「で？今この世界はどういう状況なわけ？」

俺が説明を求めると、アテネは答えてくれた

アテネ「今は原作開始から2年前ですね
なのはちゃんの暗黒時代じゃないですか？」

連夜「そうかい、つかなんでリリカルなのはの世界に転生させたん

だよ？」

歩きながら俺は肩に乗っているアテネに聞いた

アテネ「私達神も人間界のアニメなんかはよく見るんですよ
このリリカルの世界はなんか悲しいお話がいっぱい合ったので、
できれば方向修正できたらなああって思ってたんですよねえ」

そういつてアテネはこの世界を転生先に選んだ理由を話した

まあ確かに、リリカルなのはは悲しい話が多いよな

だから二次元小説とかで原作ブレイクしてる話を見るとすげえよか
つたなあって思えたんだよなあ

と、そんなことを思っている・・・

？「はぁ・・・」

ふと近くで女の子のため息が聞こえてきた

と言っかため息が聞こえるってどんだけでかいたため息だよ・・・

アテネ「さっそく会っちゃいましたね連夜さん」

アテネがそう言うってある場所を指差した

そこに居たのは・・・

なのは「はぁ・・・」

そう、未来の魔王、白い悪魔、未来のエースオブエース高町なのは
が一人さびしくブランコに乗っていた
なのはside

なのは「はぁ・・・」

私はもう何度目かも分からないため息を吐いた

寂しい

そんな感情が私の中にいつぱいあった

事故でお父さんが入院し、そのお父さんの看病とお店の手伝いで、
お兄ちゃんもお姉ちゃんもお母さんも、誰も私に構ってくれる余裕
なんてない

私はそんなみんなに迷惑をかけちゃいけないから、いい子にしない
とダメなの

わがまま言っちゃいけないの

だからこうして1人公園に居る

寂しい

そんなときだった

？「君、こんな所で1人で居て、寂しくないのかい？」

そう言つて来た人が居た

私が顔を上げると、其処には私と同じ年くらいの、肩に可愛い人形を乗せた男の子が居ました

side out

連夜「君、こんな所で一人で居て、寂しくないのかい？」

なのは「ふえ？」

そう言つて顔を上げた女の子、それはやはり高町なのはだった

連夜「寂しくないのかい？こんな所に一人で」

俺がそう言つと、なのはは一瞬考えたような表情になつたが、すぐに返答した

なのは「寂しくなんか・・・ないもん」

その顔は思いつきり嘘を言っているのが丸分かりの顔だったが、まあ敢えて今此処ではふれないでいた

連夜「へえ、もう一度聞くけど、寂しくないのかい？」

俺がもう一度同じ質問をした

すると、今度は俯きながら、小さく言つた

なのは「寂しくなんか・・・ないもん

平気だもん・・・」

連夜「へえ〜そうなんだ・・・」

俺はそう言っつて少し間を置いて、なのはのほっぺを思いっきり引っ張った

なのは「ふええ!?!」

なのはは非常に驚いた様子だった

連夜「私寂しいですつて顔してるくせに寂しくないなんて嘘つくのはこの口か？」

ああ？この口か？」

俺はそう言いながらなのはのほっぺを左右に伸び縮みさせた

なのは「ふえええ！ふあなしてよお」

なのはは手を上下に振りながら必死に抗議していた

連夜「今お前の口はぱっくり開いちまってる

今なら本音が出ちまってもしょうがねえ」

なのは「ふおんね？」

なのはが聞き返した

連夜「正直に言え、お前は寂しくないのか？」

俺の言葉に、なのはは少し考えたような表情になった

そして、抵抗を止め、ゆっくりと話した

なのは「ふぁびしいよ……」

その言葉を聞いて、俺は引っ張っていたなのはのほっぺを離した

なのは「あう……んにゃ〜」

なのはは真っ赤になったほっぺをさすっていた

なのは「寂しくないわけないよ……寂しいよ

でも、そんなわがまま言っちゃいけないの

私はいい子じゃなきゃダメなの

だから……」

連夜「馬鹿やろう」

俺はそう言ってなのはに手刀を繰り出し、言葉を止めた

連夜「それはわがままじゃねえ……当たり前的事だ

その当たり前の事を言わないほうがどうかしてる

お前ほどの年齢の女の子が、なにいつちよまえに遠慮してんだ

そんなんはな、もっと大人になってからするもんだ」

なのは「そんなこと無理だもん！

私には友達だつていないもん！

こんな私と、誰も友達になつてくれないもん……」

なのは目に涙を溜めてそう言った

連夜「なら俺がお前の友達になつてやる！

これからはお前の側に俺が居てやる

わがままだつて極力聞いてやるよ」

俺はそう言つてなのは目を見つめた

なのは「ふええ／＼そつそんな／＼友達つて・・・どうやってなつたら／＼」

なのははそう言つて顔を真っ赤にしておろおろしていた

連夜「名前を呼べ・・・俺がお前の名前を呼ぶ

そしたらお前も俺の名前を呼んでくれ

お互いが返事したら、その時点で俺達は友達だ」

俺は笑顔でそう言った

連夜「俺の名前は連夜、大道連夜だ

お前の名前は？」

そう言つて俺は問い掛ける

分かっているとは言つてもあちらは初対面

聞くだけ聞いとかないとな

なのは「なのは・・・高町なのは・・・」

連夜「よろしくな、高町なのは」

俺がそう言ってなのはの名前を呼んだ

すると、なのはの表情が途端に明るくなった

なのは「うん！よろしくね、大道連夜君」

こうして、俺となのはは友達になった

第二話（前書き）

更新です

こんなペースが続けばいいのに・・・

第二話

なのはside

連夜君と友達になつた私はそこからいろいろな話をしました

お互いの家族のこと、自分のこと、連夜君は両親が小さなころに他界して、今は独り暮らしだそうです

なのは「連夜君は寂しくないの？」

私はふとそんなことを聞きました

連夜「寂しいさ。でもな、今はお前って言う友達ができたし寂しくなんかないよ」

そういつて連夜君は私の頭を撫でてきました

なのは「ん／＼／」

ふええ、そんな事言われたら顔がどんどん赤くなつちやうよあ

連夜君は私と同一年らしいのですが、なぜか年上のお兄さんのような感覚がしています

大人つて感じですよ

だから余計に照れちゃうんだよ／＼／

連夜「まあしかし、なのはの親父さんも大変だな
事故とはいえかなりの怪我だったんだろう？」

翠屋「だっけか？そりゃ一家の大黒柱が入院しちまったら、経営も厳
しくなるわなあ」

私の頭を撫でながら、連夜君はそんなことを言っていました

連夜「安心しろよ？これからは俺がいてやる
だから高町、お前は一人じゃないぞ」

そういつて連夜君は私に笑いかけてくれました

そしたらなぜか、嬉しい筈なのに涙がこぼれてきたのです

なのは「あれ？おかしいな？なんで……うれしいのに涙が
あれ、もう止まんないよ……ごめんね連夜君・私、わたし……」

私がそういつて連夜君を見つめたときでした

連夜君が私を抱きしめたのです

なのは「ふえ／＼／れ、連夜君？」

連夜「まったく、ずっと我慢してたんだな

我慢の糸が切れちまったんだよ……高町、お前は今泣いていい
泣いて良いんだぞ」

そういつて連夜君は私をやさしく抱きしめてくれました

連夜「落ち着いたか？」

なのは「うん・・・ありがとう」

連夜の胸の中でそう頷いたなのは、ゆっくりと顔を上げた

目が涙で充血し、酷い顔になっていたが、それでもその表情は先ほどのようなくらい表情ではなかった

連夜「すっかり遅くなっちゃったな

翠屋だっけ？お前んち、そこまで送るよ」

なのは「ええ、良いよ・・・もう暗くなっちゃったし、危ないよ」

なのははそう言って断ろうとしたが、連夜が「気にすんな、これも友達の仕事ってやつだよ」

と言って、なのはの手を握り、すたすたと歩いていった

なのは「ねえ連夜君」

どうして私のことなのはって呼んでくれないの？」

帰り道、なのははそう言っつて連夜の顔を覗き込んだ

連夜「俺は女性の名前を呼ぶのは結婚する人だけって決めてんだよ
だから高町としかよばねえの」

なのは「そっそっなんだ／＼結婚／＼／＼」

なのはの頬が赤くなっているが、今は触れないでおこう

連夜「翠屋、此処か？」

そう言っつて連夜達の前にあったのは、翠屋と書かれた看板が掛けられて
いる喫茶店だった

なのは「うん、此処だよ」

ありがとう連夜君」

そういっつてなのはが礼を言っつた

連夜「気にすんな、じゃ俺は帰るからよ
また明日な」

そう言っつて連夜は帰ろうとしたが

なのは「あ、待っつてよ連夜君」

上がっつてっつて、何かお礼がしたいから」

そう言っただけなのに無理やり家に入れられてしまった

なのは「ただいま」

そう言っただけなのに玄関を開けた、すると

恭也「なのは！？こんな時間までどこに行っただんだ！」

彼女の兄である高町恭也が待っていた

なのは「お兄ちゃん・・・その・・・ごめんな・・・」

連夜「謝る必要なんてねえよなのは・・・」

謝ろうとしたなのはを連夜がとめた

恭也「ん？誰だ君は？これは家の問題だ！口を出さないでもらおうか！？」

連夜「よく言うぜ・・・自分のことに必死でこいつの事なんかまるで見てなかったくせに・・・自分のことは棚に上げて、なのはには説教か？」

恭也「な！君には関係ないだろう！」

連夜「いやあるね・・・俺は今日こいつの友達になった大道連夜だ俺がこいつに会ったとき、こいつは何をしてたか分かるか？必死に孤独に耐えながら独りブランコに乗っていたんだぞ？そうさせたのは誰でもない・・・あんた達家族だ！」

連夜は声を荒げて言った

恭也はその言葉を返すことができなかった

恭也「くっ！君には！」

桃子「そこまでにしなさい恭也・・・」

そう言つて恭也を一声で止めた人がいた

落ち着いた風格で連夜達の前に現れたのは、なのはの母高町桃子であつた

恭也「母さん・・・」

桃子「その子が言っていることは正論よ

私もあなたも決して言い訳することはできないわ」

そう言つて、桃子はなのはの前で膝を折り、屈んだ

なのは「！..！」

なのははまた怒られると思つたのか、目をつぶつた

だが、なのはが次に感じたのは痛みではなかつた

『ギョッ』

なのは「え？」

なのは驚いて目を開けると、桃子がなのはを抱きしめていた

桃子「ごめんなさいなのは……お母さん達、あなたに甘えて一向に構ってあげられなくて……ごめんね」

そう言った桃子は肩が振るえ、泣いているようだった

なのは「お母さん……ふわあああああん」

なのはも一緒になった泣き出してしまった

それを見ていた連夜は、ゆっくりと玄関から出て行った

連夜「やれやれ、とりあえずファーストコンタクトは成功か」

そう言って連夜は肩に乗っているアテネに話しかけた

アテネ「そうですねって言うか！今まで私のこと忘れてたでしょう！寂しかったんですから」

そう言って目に涙を溜めながら、アテネはそう言った

連夜「悪かったよアテネ

ほら、よしよし」

そう言って連夜はアテネの頭を撫でた

アテネ「むう……まあ良いです

さ、早く家に帰りましょう

あなたが背負ってるかばんの中に地図とかお金と入ってますから」

連夜「おお、このかばんそんなもんが入ってたのか……道理で重
いと思っただぜ」

アテネ「早く帰りましょう」

連夜「へいへい」

駄々をこねるアテネをなだめながら、連夜はこの世界での帰路につ
くのだった……

第三話（前書き）

連夜、ついに変身です

第三話

あの後、俺は地図を広げながらゆっくりと帰路に着いていた

連夜「なあ、こん中金も入ってるって言ったが、まさか開けたらガツツリ札束が入ってるとかじゃないよな？」

アテネ「違います。

ちゃんとキャッシュカードと通帳だけです」

アテネはそう言って膨れっ面になった

可愛いなあおい（笑）

和やかに帰路についていた……と言うのに……

『ブウウウン！』

騒がしいエンジンの音を響かせて、俺達の目の前を一台の車が通り過ぎた

アテネ「連夜さん……今のって……」

見てしまったからにはしょうがない

車には明らかに怪しい男組と小さな女の子二人が乗っていた

その二人が問題だった

連夜「なんでアリサとすずかが乗ってんだよ・・・
てかこの時の二人って其処まで仲良くなかったはずだよね？」

俺は気だるそうにアテネに聞いた

アテネ「ですなええ、誘拐犯の気持ちは分からんですなええ」

だからキャラがぶれすぎだアテネ・・・

連夜「じゃあないな

アテネ、追跡できんだろ？神だし
追跡しといて、後追うわ」

アテネ「あれ？助けるんですか？」

アテネは少し驚いたようにそう言った

連夜「俺の力の性能も見ときたいしな

見ちまったら助けるのがこの世界の俺のやり方だ」

アテネ「分かりました

そこをまっすぐ言っつて二番目の曲がり角を右です」

そう言っつてアテネはナビゲートを始めてくれた

連夜「あいよ」

そう言っつて俺もナビに従い、走り出した

アリス side

もう！本当に信じらんない！

習い事から帰ってる途中に連れ去られるなんて

しかもよりによってこいつと一緒にするのがねえ

すずか「うう・・・」

涙目で私を見るこの子は月村・・・何だっけ？

まあともかく、私と同じお金持ちのお嬢様らしい

興味ないけどね

男「ガハハハ、お前らの親父さん達からがっばり金を貰ったら家に返してやるよ

それまで俺達と楽しいことしようぜえ」

そう言っつて私達を連れ去った誘拐犯の男達は気味の悪い笑みを浮かべて私達に近寄ってきた

はつきり言って私だって怖い

横の月村さんは既に泣き出ししている

両手足を縛られて身動きできない

アリサ「はぁ・・・普通の子に生まれたかった

普通の子なら・・・こんな事なくて済むのに・・・」

私は思わず弱音を吐いた

男「ハハハ、てめえらは普通じゃないのさ！

恨むんなら自分達を恨め！」

そう言っつて男達が私達に襲いかかろうとしたときだった

『バン！』

もの凄い音と共に、倉庫の入り口の扉が吹き飛んだ

？「いやいや、恨むことはない

普通だったらこんな貴重な経験は出来ないぞ？

身の代金目当ての誘拐なんてな

お前らが大きくなって自叙伝なんて書いたらしっかりと書けるぞ？

私は小さい頃に身の代金目当てで誘拐されましたってな」

そう言っつて現れたのは、私達と同年くらいの子だった

side out

俺が長々と話しながら倉庫に入ると、其処には男達が六名程

そしてこの倉庫の真ん中に、縄で縛られたアリサとすすかが居た

男「ああ！なんだガキが！

調子のもつてんじゃないぞ」

にしても一撃で鉄の扉蹴破れるって、明らかに七歳の肉体レベルじゃねえだろ・・・

アテネ「そりゃ＋で肉体レベルはチートなんですから

あれくらいは当然ですよ」

連夜「成る程ねえ」

男「無視してんじゃないぞええ！」

そう言つて男の一人が俺達を怒鳴りつけた

連夜「あ、悪い悪い

喋つてんのが聞こえなくてさ

其処にいるアリサとすすかだっけ？

今助けてやるからな」

俺はニコリと笑つてヒラヒラと手を振つた

男「ふざけんじゃねえ！

ガキが！この場所突き止めるたあいつたいなにもんだ！？」

いやあ待つてましたよその言葉

連夜「俺か？俺はなあ・・・」

そう言っつて俺は気付いた

あれ？メモリは？

アテネ「ズボンの後ろポケットの中です」

アテネがそう言っつて教えてくれた

カッコわる（笑）

連夜「よつと・・・」

そう言っつて俺は後ろポケットからUSBメモリーのような長方形の物を出した

違いがあるとすれば、先端が青い金属で塗装されているのと白い外装で真ん中に「E」と言う記号が刻印されていたくらいだった

アテネ「それっつてかなりの違いじゃないですか？」

連夜「自分で思ったよ・・・」

アテネにそう返した俺は、そのまままっすぐ男達を睨み付けた

連夜「話が逸れたな・・・俺は、正義の味方だ」

そう言っつて俺は、自分の手に持った力、ガイアメモリの起動スイッ

チを押しした

『Eternal!』

起動音声が発せられると同時に、俺の腰にこのガイアメモリの力を解放するベルト「ロストドライバー」が巻かれた

連夜「行くぞ・・・」

そう言つて勢いよく、ロストドライバーのメモリスロットにガイアメモリを差し込む

『バシユイン!』

メモリを確認したドライバーが、待機音を発している

連夜「変身!」

そう言つてロストドライバーを右に展開した

『Eternal!』

機械音声が流れると同時に、変身音も流れ、俺の体を白色の粒子が覆った

『バシユイン!』

変身音が終わると共に、俺の体は変貌していた

身長は180cmまで伸び、真っ白な鎧に包まれた体、頭部から伸

びた三本の角、 の記号を連想させる黄色い目、真っ赤な炎が刻まれた腕

俺の体は完全に、仮面ライダーエターナル レッドフレアに変身していた

連夜「はは・・・力がみなぎってくる」

俺は変身した自分の声を聞いて感激した

変身した時の俺は大人になった時の俺なのだ

今の声はあの大道克己の声になっている

つまり、俺の設定した通り俺体は大人になればまんま大道克己になるのだ

連夜「素晴らしい・・・礼を言うぞアテネ」

そう言っただけ俺は変身の瞬間俺の肩から飛び降りたアテネを見た

アテネ「喜んでもらってこっちも嬉しいです

早く助けてあげてくださいね」

連夜「了解した」

俺はそう言っただけ男達に向き直った

男達を含め、アリサやすずかも目を点にしていた

男「なっ！なんだお前は！」

誘拐犯の1人の男がそう言って俺に拳銃を向けた

連夜「俺か？俺の名は大道連夜・・・この姿の名は、エターナルだ！」

そう言って、二つの拳を握り締めた俺は、誘拐犯達に向かって襲い掛かった

男「く、来るな！」

『バン！バン！』

誘拐犯の一人が拳銃を発砲した

だが、俺には傷一つつかなかった

連夜「こんな物で俺を殺せると思うな！」

俺は目の前の男に拳を直撃させた

殴られた男は吹き飛ばされ、泡を吹いて倒れていた

連夜「殺しやしない・・・ただ、二度とこんな気が起きないように徹底的に叩き潰してやる」

そう言った俺は、次の瞬間には別の男を蹴り飛ばし、それが終わったらまた別の男と、ほぼ無双状態で誘拐犯を撃退していった

連夜「拳銃持ってるなら一瞬でも気を抜いたら終わりだ・・・さて、大丈夫か？」

俺はそう言ってアリサとすずかを縛っている縄を引きちぎった

すずか「あ・・・ありがとうございます」

アリサ「礼は言っておくわ・・・ありがと・・・」

二人はそう言いながら立ち上がった

『ファンファンファンファン』

近くでサイレンが聞こえた

連夜「警察が来たか・・・なら、俺はここで失礼するよ」

そう言って俺がその場を去ろうとすると

アリサ「ま、待ちなさいよあんた！名前・・・もっかい教えなさいよ！」

アリサがそう言って呼び止めた

俺は展開したロストドライバーを元に戻し、メモリを抜いた

すると、まるで風に舞う木の葉のように俺の体を覆っていた粒子は消え、体も元の体格に戻っていた

連夜「俺の名は大道連夜・・・またどこかで会おう・・・アテネ」
俺がそう言っつてアテネを呼ぶとアテネは「はいはい」と言っつて俺
の肩に乗った

すずか「人形が・・・動いてる」

連夜「この世界にはお前たちの知らない世界がたくさんあるっつて事
さ。じゃあな」

俺はそのまま倉庫の裏口から、外に出た

第四話

連夜「こいつあまたでかいなあ」

俺は今、自分の部屋に来ている

アリサ達を助けて後、地図を見ながら何とかたどり着いたのは超高層マンションだった

金持ちしか入れないような場所のなんと15階（最上階）の1530番の部屋が俺の部屋となっていた

んで、今中に入って、あまりの広さに呆然としていたのだ

アテネ「凄い広いでしょ？」

やっぱり何でもデカイ方がインパクトあるもの」

そう言つて「エッヘン」と胸を張るアテネ

連夜「いやでかすぎだろ？」

隣の部屋まで浸食してんじゃね？とか思うくらい広いんだけど？」

俺が言つのも最もだと思つ

玄関入って直ぐのリビングは人が10人強入つてもまだ余裕なくらいの広さだし、寝室もなかなか普通の広さだ

いくら金持ちマンションでもこの広さは以上だと思つた

アテネ「だって、此処はディラックの海を使っていますから無限空間なんで指定すればもっと広くなりますよ」

そう言っアテネは俺の肩から飛び降りた

て言っかディラックの海!?

あの 号機飲み込んだ?

なんてもん部屋に適合させてんだよあの神は(泣)

あいつ多分俺よりチートだと思うのは内緒にしておこうと思った

アテネ「さて、此処でなら元に戻れますね」

その瞬間、アテネの体が光り輝いた

そして、光が消えると、其処には金色の髪を腰まで伸ばした絶世の美女が居た

連夜「・・・アテネか?」

アテネ「はい、そうですよ」

そう言っアテネの声は、人形モード(勝手に命名)の時のような子供のような声とは違い、大人の女性のような澄んだ声だった

連夜「変わりすぎだろ・・・」

俺は大人アテネ(これも勝手に命名)を上から下まで見た

服は白いドレスの用な物を着ていた

と言つかめちゃくちゃ可愛いじゃねえかあああああ！

アテネ「あ・・・あの〜」

そう言ったアテネが何かもじもじしていた

何故か顔まで赤い

アテネ「そんなに見ないください・・・その／＼恥ずかしいので
／＼／」

連夜「／＼わ、悪い・・・」

そうやって俺はアテネから視線を逸らした

なんだ今这种感觉

キュンとなったこの感じ

まさか、これが萌えと言う奴なのか！？

アテネ「あの、大丈夫ですか？」

アテネがそう言って心配そうに俺を見ている

連夜「ん？ああ大丈夫だ」

そうやって俺は玄関で靴を脱ぎ、リビングに向かった

連夜「さてと……」

俺はズボンの後ろポケットに手を入れ、其処からエターナルメモリを出した

アテネ「また変身するんですか？」

アテネが不思議そうな顔で此方を見ていた

連夜「ああ……少し確かめたい事もあってな」

そうやって俺は、エターナルメモリの起動スイッチを押した

『カチッ』

『E t e r n a l』

エターナルメモリが起動すると、腰に再びロストドライバーが現れた

連夜「変身！」

そうやってメモリをドライバーに差した俺は、ドライバーを展開し、再び仮面ライダーエターナルに変身した

だが

連夜「ふむ……やはりレッドフレアか」

大道克己ボイスになった俺はそう言いながら自分の体を見た

確かに完全体であるブルーフレアではない

だが、俺が考えた能力はブルーフレアでなければ使えない

連夜「アテネ、これはどういう事だ？」

俺がアテネの方を見ると、アテネは言い難そうにしながら口を開いた

アテネ「力の暴走を抑えるためです・・・」

連夜「力の暴走？」

俺は聞き慣れない言葉に思わず聞き返した

アテネ「はい・・・まったく力を持っていなかった人が、突然強大な力を持つと、その力を制御しきれずに、最悪力に吞まれてしまう場合があるんです

あなたの能力はその・・・その暴走が起こるとこの世界その物が破壊されてしまうので、こう言った処置を取らせてもらいました」

アテネは気まずい空気を醸し出しながらそう言った

それにしても力の暴走か・・・なるほど

確かに転生してその力を善にしか使っていないのなんて二次元の人達だけだもんな

実際の人間は確かにそんな利口な人達ばかりじゃねえな

連夜「理解した・・・それで、具体的に処置とはどのような物を施したのだ？」

因みに、まさかこれの完全体には絶対なれないなんて言うんじゃないだろうか？」

アテネ「それは大丈夫です

条件を満たせばなれます・・・

処置とは、そのエターナルメモリ事態に意志を持たせたんです
自分の意志を」

連夜「意志？つまり、メモリが人を選ぶと言うことか？」

アテネ「はい・・・エターナルメモリがあなたを真の主人として認めれば、真の姿に変身出来るようになっていきます」

連夜「つまり、俺はまだこいつに認められていないって事か・・・」

メモリを抜き、変身を解除しながら俺はそう言った

アテネ「はい・・・そうなります」

アテネはしょぼんとした表情になっていた

連夜「そう落ち込むなよ

お前さんは神様だからな、そう言った対処もしなければいけない
当然の理由だ」

俺は笑顔でそう言った

連夜「俺がこいつに認めてもらえば良いだけだ
これからよろしく頼むぞ？エターナル」

俺は自身の相棒になる存在を見つめながらそう言った

連夜「アテネ、お前もこれからよろしく頼むぞ？」

俺がアテネにそう言うと、アテネは顔を真っ赤にしながらい言った

アテネ「ふ／＼不束者ですが／＼よ／＼よろしくお願いします」

頭を下げたアテネを見て、俺は思わず笑った

連夜「ハハハ、何も嫁に来たわけじゃないんだから……まあよろしく」

アテネ「あう……お嫁だなんて／＼よろしくです」

ますます顔を赤らめたアテネに、俺は首を傾げるしかなかった

連夜「で？今思ったけどなんで寝室が一部屋しかないの？」

俺は寝巻きに着替えて寝室に入ったとき、そのことに気づいた

アテネ「いけませんでしたか？」

そう言つて後ろから現れたのは、花柄の可愛いプリントがされた寝
巻きを着たアテネだった

連夜「いや、お前なんで俺に寝室来てんの？なんでパジャマなの？
今気づいたけど何でダブルベットなの？なんで寝る気!？」

俺は立て続けに突っ込みを浴びせた

アテネ「いえその・・・一緒に寝たいなあ・・・と／＼」

赤らめたそう言ったアテネ

めちやくちや可愛いじゃねえかちくしよおおおお!!

その後？いや勝てるわけないでしょ？

ガッツリ一緒に寝ましたよ

ガッツリ抱き枕にされましたよ

だってしゃあないじゃないですか！

俺だって男っすよ？

身長親子並みに離れてるからもうアテネの胸が……

連夜「耐える……俺……」

俺はそう言っただけで自分と戦いながら眠りについた

第四話（後書き）

はいどうも〜

黒のカリスマです

こちら辺でアテネについても説明しておきます

アテネ「よ／＼よろしくお願いします」

名前 アテネ

身長 20cm（人形モード）

180cm（大人モード）

体格 出るところはしっかり出て、引込む所はしっかり引込んで
いる

とりあえず胸はかなりある

アテネ「／＼」

年齢 神なので年齢はない

体重 自由自在に設定できるため不明

魔力量 E X

連夜を誤って死なせてしまい

転生システムを使ってリリカルなのはの世界に転生させた

ところが、周りの神達から転生させた連夜の動向調査をしると命じられた為、連夜と行動を共にすることに

何故か連夜に恋い焦がれている

転生前から連夜を知っているようである

常時は人形モードで連夜の肩に乗っている

自室でのみ大人モードに戻り、連夜の世話を焼いている（誘惑している）

ドジ&天然と言う見ればハイスペックなスキルを持っている

第五話

あれから、俺はなのはと一緒に遊ぶことが多かった

父親である土郎さんがまだ退院出来ない為、あれからも翠屋は大忙しだそうで、なのはの面倒はまだちゃんと見れていなかった

だがそれでも、あの時俺が恭也さんに唸ったのがきっかけで、手が開けば恭也さんはなのはを気にかけるようになったらしい

この前なのはに連れられて家まで行ったら

「君のおかげで色々考える事が出来た
ありがとう」

と言って頭を下げられた

さすがにこれには面食らった

「いえ、ただの子供が出過ぎた真似をしたと思っています
頭をあげて下さい」

俺は慌てて恭也さんにそう言っていた

「ねえ連夜君？連夜君は何処に住んでるの？」

ある日なのはと遊んでいると、そんな事を言われた

「そう遠くはないよ
と言って近いわけでもないけどな」

俺がそう言つと、なのはは頬を膨らませた

「むう〜連夜君の話し方難しいの
分かり易くいつてなの」

「こつ言つ喋り方なんだよ
簡単に治せない

お前もその語尾に時々なのとか付けるだろ？
それを治せって言われて治せるか？」

なのはは困った顔で「う〜」と言っていた

まあ中身も七歳と中身が十九歳じゃそりゃ勝てないって

「が、頑張つてなおすの……あ！」

「治つてねえじゃん」

俺がニヤリと笑つと、なのはまた頬を膨らまして「う〜」と言っていた

「平和ですね」

俺の肩に乗り認識阻害魔法を使って周りから見えないようにしているアテネがそう言った

「そつだな……」

小さく言ったつもりなのだが、どうやらなのはに聞こえたらしい

「どうしたの？」と聞いてきた

「独り言だよ……気にするな」

そう言っただけなのはの頭を撫でた

「ふわわわ……」

などと言っただけなのは戸惑いながらも頭を撫でられていた

だが、徐々にその表情に影が差してきた

「どうした？高町」

「お父さん……いつになったら退院出来るのかな……」

ぼそりとなのはは呟いた

「高町……」

「お父さん……怪我酷いらしいの

まだ退院は難しいって……」

私許せないの……お父さんを事故にあわせた人が……」

そう言やなのはには土郎さんは事故にあって大怪我したって話して
たんだな、桃子さん達

実際は海外でボディーガードをしての負傷だったか？

何にしても、そりゃ不安になるわな

こんな年頃の子供には、友達よりも、家族の愛が必要なんだよきつと……………

「明日会いに行けば良いじゃないか

高町のお父さんに……………」

「ふえ？」

なのはは目をパチクリさせていた

「お見舞いだよお見舞い

お父さんだって、高町に会いたがってると思うぞ？

会いに行っただげたら？」

俺の言葉に、なのはは少し考えていたが、やはり自分も会いたいと
思っていたのか、「分かった」と言った

俺は少し安心した

しかし、その次の言葉がいただけなかった

「明日連夜君も一緒にお見舞い行くの」

「は？」

思わず目が点になった

「ダメ……………なの？」

涙目&上目遣いを決められた

連夜はライフが0になった

「わあったよ」

そう言うしかなかった

涙は女の武器とはよく言った物だと、この時改めて痛感した

しかし、これがまさかあんな事態を招くとは、俺も、なのはも、誰も思っていないかった

『て言うか私空気ですね』

なのはと分かれて家に帰ると、何故かアテネがふてくされていた

夜抱き枕にされながら一緒に寝たら、機嫌が治っていた

「ううなの」

次の日、俺はなのはと一緒に土郎さんのお見舞いに来ていた

『コンコン』

「はい……」

扉の奥から土郎さんの声が聞こえたのを確認して、なのはは病室の扉を開けた

「お父さ〜ん

なのはなの〜お見舞いに来たの」

そうやってなのはは病室に入っていった

俺はその後をついて行った

「なのは……久しぶりだね

元気にしてたかい」

そうやってなのはに笑いかけた土郎さんはそのままなのはの頭を撫でた

「ふにゃ〜」

なのは頭を撫でられて気持ちよさそうだった

小さなツインテールがピョコピョコと揺れていた

「生きてるんですか？あの髪」

アテネがそう言って俺に囁く

「多分……」

俺は苦笑いしながらそう答えた

その時、土郎さんと目があつた

「なのは………其処にいる子は誰だい？」

「あ、この人は………」

なのはが俺のことを説明しようとしたが、俺がなのはの横に行つて自分から話した

「俺は大道連夜つて言います

………なのはさんの友達ですよ

高町土郎さん」

そう言つて俺は目の前にいる土郎さんに笑いかけた

「そうか………君が………桃子から聞いているよ

君のおかげでなのはが元気になった

本当にありがとう」

土郎さんはそう言つて包帯が巻かれた体で上半身だけ立ち上がり、頭を下げた

「いやいやいや！」

頭を上げてください士郎さん

そんな頭を下げてもらうような人間じゃないんですよ俺は」

俺は慌てて士郎さんに頭を上げさせて、そのままベッドに寝かせた

「いやしかし……君のおかげなのは事実だ

これで、私もゆっくり傷の治療が出来るよ」

「は？」

俺は一瞬自分の耳を疑った

なのはもう少し驚いているようだ

「ん？どうしたんだい？二人とも」

士郎さんは何食わぬ顔だ

この人は、恐らくぱつと口に出ただけなんだろうな

だが、その一言が俺には許せなかった

「高町……少し、部屋の外に出てくれるか？

士郎さんと、お話がある」

「おはなし？」

なのは少し首を傾げたが、俺が「お願いだ」と言うと、「分かっ

たの」と言っ出てくれた

「どうしたんだい？連夜君」

士郎さんはそう言っ俺に聞いてきた

「士郎さん……今言っ言葉は本当ですか？」

「何がだい？」

士郎さんは再びゆっくり上半身を起こし、俺に聞いてきた

「たかが七歳の子供が失礼な言い方をするかもしれませんが先に謝っっておきます

士郎さん……貴男は本当にあの子の事を大事に思ってるんですか？」

「どっいう意味だい？」

士郎さんはまだ言葉は優しく言った

だが、体からはとても怪我人とは思えないほどの威圧感を放っていた

「士郎さん……確かに貴男が負った怪我は貴男が意図して付けた傷ではないでしょう

ボディーガード中のテロによっ負った傷……だが貴男はその傷で生死の境をさまよっただ

貴男は自分の家族に、家族の一人が死ぬかもしれないと言っ恐怖を味合わせただ……無論あの子にも！」

「君は……どうしてその事を！」

士郎さんは自身の本当の役職を俺が知っていたことに驚いていたよ
うだった

「士郎さん、家族が死ぬつてのは、まるで自分の身を引き裂かれた
ような痛みがあるんだよ

貴方はあの子にもそんな思いを味あわせようとしたんだ！

士郎さん、あなた何か勘違いしてる……あの子に今必要なのは俺み
たいな友達じゃない

家族だよ……家族が揃って、家族の愛を感じる

今のあの子には一番それが幸せな時間なんだよ！

それを奪ったのは誰でもない……士郎さん貴方だ！！」

「！！」

「貴方が大怪我をしたことで、翠屋の経営に桃子さんや恭也さん、
美由希さんは大忙しだ

あの子も構ってほしいのを我慢している

俺が会ったとき、あの子が何処にいたか知っていますか？

一人公園のブランコで寂しそうに遊んでいたんですよ！？」

士郎さん、あの子を、なのはを大切に思っているなら、死ぬ気で怪
我を治してください！！

あの子のことを思うなら、それが一番……！！」

俺が最後まで言い切る前に、俺の耳に乾いた音が響いた

直後に頬に痛みを感じたことから、誰かに叩かれたんだと分かった

そして目の前には、俺を叩いたと思われる、瞳に涙を貯めてこちら
を睨み付けているのが居た

士郎 said

私は、甘えていたのかもしれない

家族に、すべてに……甘えていたのかもしれない

「士郎さん、あの子を、なのはを大切に思っているなら、死ぬ気で怪我を治してください!!」

目の前の少年、連夜君にそれを言われて、初めてそれに気がついた私は甘えていたのだと

だが次の瞬間、突如私の前になのはが現れ、連夜君の頬を思いつきり叩いたのだ

「なっ!!」

「お父さんに酷いこと言わないで! そんな事言う連夜君なんて、もう友達じゃない!! 部屋から出て行って! 連夜君なんか……だいつ嫌い!!」

なのははそう言って、一番口にはいけないことを口に出してしまった

連夜君は驚いたような表情をしていたが、すぐに冷静な顔つきになった

「……わあっただよ」

連夜君は沈んだ声でそう言った

「土郎さん……こんな子供が、分かったような口をきいてすみませんでした

でも、自分の言ったことは間違っていないと思います……それじゃ」

そう言っただけは一度私に頭を下げると、そのまま一度も振り向かず、病室を出て行った

なのははずっと彼の後ろ姿を見ていた

s a i d o u t

第六話（前書き）

いつの間にかPVが4000を超え、ユニークも1000を越えていました

皆様ありがとうございました

これからも頑張ります

第六話

「嫌われちゃいましたね……………」

肩に乗るアテネがそう呟いた

「そつだな……………」

まだ少し叩かれた頬が痛む中、俺はそう返した

「良いんですか？」

「なにが？」

俺は小さく聞き返した

「彼女に嫌われて良かったんですか？」

仲良くしたかったんじゃないんですか？」

アテネは俺にそう言ってきた

「変わらねえよ……………」

「え？」

俺の答えに、アテネは意味が分からないようだった

「アテネ…………お前俺をこの世界に転生させたのは、この世界で悲しい出来事が多かった。」

それを変えてやりたいから……だったよな？」

「……そうですよ？」

アテネはそう答えた

「だからよ、俺はお前のその願いを叶えるよ
高町に嫌われようがなかるうが関係ない……俺はこれから起こるす
べての事からあいつらを守り、この世界の決まった未来を破壊する
そう……世界の破壊者だよ……」

「それは、見る人から見れば偽善とも言えませんか？」

アテネは俺の前に浮遊しながら移動し、そう言った

「偽善……だろうな

更には自分勝手と来た……だがよ……俺はもう取りこぼしたくね
えんだよ

前の世界で生きてたときは、俺は取りこぼしちまった

だが、今は力がある……大事なもん守るだけの力がある

だから俺は迷い無く力を使う……このエターナルの力をな……例え不
完全だったとしても……」

俺はそう言ってズボンの後ろポケットから出したエターナルメモリ
を空に掲げた

「なら私もそれに同行します

あなたを見守るのが私の役目ですからね」

アテネはそう言って俺に笑いかけた

「おう……宜しくな」

その笑顔を俺は無性に可愛いと感じてしまった

「はい……とりあえず、今日の晩御飯のおかずでも買いに行きましようか」

「おう」

そう言って、俺達はそのまま家の近くのスーパーまで食材を買いに行った

「ぶん！せい！」

俺は今、アテネが用意してくれた家にあるトレーニングルームで汗を流していた

と言っても、ディラックの海で作られたこの空間は、無限の広さだった

「ぶっさて、今度は……こいつか」

俺は汗を拭いながら、エターナルメモリを手にとった

『E t e r n a l ！』

メモリが起動し、俺の腰にはロストドライバーが巻かれた

『ガシユン！』

メモリを指し、一気にメモリスロットを右に倒し、ドライバーを展開した

「変身！」

『E t e r n a l ！』

俺の声と共に、機械音声が流れ、白い粒子が体を包む

一秒と待たぬ内に、俺の体は仮面ライダーエターナルレッドフレアとなった

「あれから何度も変身しているが、相変わらず俺はこの姿のままか……」

そう言っただ俺はドライバーに刺さったメモリに手を置いた

「なあエターナル……いつになったらお前は俺を認めてくれんだ？」

大道克己とエターナルはお互い会った時に運命的な繋がりを感じた

お互いがお互いを認め合った

「なら俺はどうすりゃ良いんだよ……」

言ってて思わず苦笑いした

「連夜さん……ご飯出来てますよ」

そう言って部屋の扉を開け、大人アテネが顔を出した

「……あいよ」

そう言って俺は右に倒したメモリスロットを立たせ、メモリを抜いて変身を解除した

「今日なのはさん、アリサさんと喧嘩したみたいですよ？
最終的にすずかさんが止めたみたいですけど……
お友達フラグは立ちましたね」

食事をしている最中、アテネがそう言って報告してくれた

あれから数ヶ月

俺はなのはは愚か外部との接触を一切断ち、今自分が持っている力の確認と、力を向上させるためのトレーニングをずっと行っていた
外の情報は認識阻害を使ったアテネが時々出歩いて仕入れてくれる

なのはの情報も俺の耳に届いていた

あれからまたなのは暗い性格に戻ってしまったらしい

何回か俺が謝ってでも会いに行こうかと考えたのだが、今日の件を聞いて安心した

「アリサとすずかが……良かった」

俺は心の底から安堵した声を出した

これでなのはに関しては大丈夫だろう

もともと原作でもあの二人のおかげでなのはは元気な性格になった

俺は言わばイレギュラー

これで問題はないだろう

「土郎さんも貴男の一件から死に物狂いで怪我を治し、リハビリをして退院したようです」

「そうか……まあ良かったよ

これで原作開始まで事は穏便に進みそうだ」

俺はそう言っただけで夕食を口に運んだ

「原作が開始したら、やはり彼女の前には姿を現すんですか？」

「一様エターナルの姿で出るさ……」

アースラが来たら、正体を明かそうかと思ってる」

「そうですか……………」

アテネは俺の答えにそう言つと、夕食を食べ終わり、食器を炊事場に運び始めた

「連夜さん………… 原作開始まで時間すつ飛ばしましょうか？」

「ぶっ！！」

はあ！？んなことが出来んのかよ？」

アテネが不意に言ったことに思わず俺は飲み物を吹いてしまった

「出来ますよ？」

あのトレーニングルームは私の指示で時間の速度を調節出来ますので今からですと約1年半ですから、トレーニングルームで1日半入ればそのように時間が経つように調整します」

アテネは笑顔でそう言ったのだが、普通に考えればそんな事出来るわけがない

やはりこの女は俺よりチートだと改めて再確認にした

「じゃあそうしよう

お前も中に入るのか？」

「もちろんです

私だけ外で1年近く待ってないといけないなんて嫌ですから久しぶりに私も体を動かしたいですし」

俺が運んだ食器を受け取りながら、アテネはそう言った

「じゃ、今から一日半か」

俺は目の前に居るアテネを見ながらそう言った

既にトレーニングルームには入っており、体はエターナルレッドフレアに変身していた

「はい……そう言えばこうやって模擬戦とは言え連夜さんと戦うなんて初めてですね」

アテネが笑顔でそう言った

「そう言えばそうだな
まあ、一日半お互いしっかりやるうぜ」

そう言って俺はアテネに対して構えた

「分かりました
宜しく願いますね」

そう言ってアテネの手に何処からか現れた剣が握られた

だが、その剣は普通の剣ではなかった

「おいアテネ……その剣はなんだ？」

「あ、これですか？確か聖王ファルシオスの剣ですよ？人間サイズに作った模造刀ですけど……」

「ああそうかってええ！！
聖王ファルシオスの剣！？」

あの白騎士物語で太陽王を斬ったとされる伝説の剣じゃねえかあああ
ああ！

「なんでお前がそんな物を！？」

だが、俺の問いにアテネは笑って答えた

「だって私これでも神ですから……
ああ安心してください
模造刀なんて威力は四分の一しか出ませんから」

そう言っアテネはニコリと笑ったが、いやニコリじゃねえよ！

どの場合の四分の一？

どっちにしても死ぬわ！！

「待アテネ…落ち着け……」

「行きますよ？聖剣解放！ファルシオスの……」

そう言っアテネが黄金のオーラを纏ったファルシオスの剣を振りかぶる

つて聖剣解放!?

死んじゃう死んじゃう!

「待て!待て!」

「剣ー!!!」

俺の静止を聞かず、アテネはファルシオスの剣を振り下ろした

黄金の斬激が俺に向かって迫ってくる

「ギヤアアアアアア!」

そして俺は、一切の抵抗も虚しく体ごと黄金の光に包まれた

「つたく!殺す気が!!!」

「ごめんなさい」

あれから俺はファルシオスの一撃で意識を失い、気がついたら既に1日半が過ぎており、アテネが心配そうに俺を見ていた

俺が意識を取り戻した事に喜んだアテネはそのまま俺に抱きついてきたが、全身ボロボロとなっていた俺にはそれが激痛で、アテネに怒りの鉄槌を食らわせた

それから傷を治してもらい、慌ててトレーニングルームから出て来たのだ

「にしても本当にこっちは1年半経ったんだろっな？」

「それは大丈夫です

ちゃんと経ってますよ」

アテネが涙目でそう言った

殴られた頭が痛いのか、まだ頭を押さえていた

「本当かよ……これで経ってなかったら……」

そう言って俺の言葉は途切れた

俺の前には窓が合った

そして、その窓からはつきり見えたのだ

未だ暗い海鳴の空に、数多くの流星が降り注いでいた

「アテネ……」

「間違いありません……あれはジュエルシードです」

アテネの言葉が終わると共に、一つの流星が近くに落ちた

どうやら公園に落ちたようだった

「出掛けるぞアテネ」

「はい」

アテネは大人モードから手のひらサイズの人形モードになり、俺の肩に乗った

今やっと、リリカルなのはの世界は始まった

第六話（後書き）

というわけで、ようやく無印編が始まります

時間のすっ飛ばし方はまあ書けることもなかったのでもうごうしました

orz

ではこれからも連夜の活躍にご期待ください

第七話

「ここら辺か……魔力を感じる……間違いはなさそうだな」

公園に着いた俺達は、本来なら感じるはずのない膨大な魔力反応に確信を持ちながら、周辺を調査していた

「間違いなくジュエルシードの一個はここに落ちています……！」

アテネがそう言った直後、公園の奥の茂みで光が溢れた

「がはっ！」

茂みから突如金髪の少年が吹っ飛んできた

手には杖のようなものが握られていた

「おい！しっかりしろ！おい！」

俺は慌ててその少年を抱き起こす

「うっうっ……」

その少年の顔を見たとき、初めてこの少年が誰かと言ったのが分かった

ユーノ・スクライアその人だったのだ

「うっ……あなたは……」

ユーノが震えた声でそう言った

「つか本当に女みたいな顔だなあ

「説明は後だ……怪我してるじゃねえか
何があつたんだ？」

知ってるが敢えて聞いておこう

「う…此処に居たら危険です…早く…逃げて」

ユーノがそう言った瞬間、茂みの奥から狛犬のような怪物が現れた

『危険です！危険です！』

ユーノが持っていた杖の先端にある宝石が光り、言葉を発した

「早く……逃げてください……此処は僕が…ぐっ！」

ユーノは見て取れるほどに限界寸前だった

魔力もこの世界に来たときに大半を失ったのだろう

ユーノの魔力は殆ど残っていなかった

「グルルル」

狛犬の化け物は歯をギラつかせながらこちらを威嚇している

大方近くにも居た犬にジュエルシールドが反応して発動したんだろう

「んなボロボロの体でなに言ってるんだよ！
此処は任せろ……」

そう言っただけ俺はユーノを座らせた

「なら、このレイジングハートを……」

そう言っただけユーノがレイジングハートを渡そうとしてきたが、俺はそれを拒否した

「アテネ……お前も戦うてるのはできないのか？」

「すみません……貴方と戦ったりすることは可能なんですが、神が物語りの本質に関わってはいけません」

アテネはそう言っただけ申し訳なさそうにそう言った

「かまわんさ……周囲に結界を張って置いてくれ。
後、離れてるよ？」

「分かりました」

アテネはそう言っただけ俺から飛び降りると、この公園といったいに結界を張った

「結界が張られた？君はいつたい……」

後ろにいるユーノが驚いた声を出している

「悪いな…ちょっと普通じゃないんだよ……俺は特にな」

そう言っつて俺は、取り出したエターナルメモリを起動させた

『E t e r n a l』

「変身！」

『E t e r n a l！』

腰に巻かれたロストドライバーにメモリを挿し込み、俺は仮面ライダーエターナルレッドフレアに変身した

「さあ！地獄を……」

言いかけて俺は言葉を止めた

この言葉はブルーフレアになったエターナルだからこそその台詞だ
なら……

「さあ！地獄に叩き落してやる！」

そう言っつて俺は化け物を指差した

「ガアアアアアア！」

化け物が雄たけびを上げて俺に突進してきた

「むん！」

俺はその突進を受け止めた

「ふん！でえいや！」

そのまま化け物の顔をいったん上に向け、よろめいた顔に蹴りをかましてやった

「ギャアア！グルルル！」

化け物は一旦倒れたが、すぐに起き上がってこちらを威嚇した

「もとは犬なんだ……あまり痛い思いはさせたくないから……即効で決めるぞ！」

俺はそう言ってエターナルメモリのメモリスロットから抜き、ベルトの右側につけられたもうひとつのメモリスロット、マキシマムスロットにメモリを挿し込んだ

『E t e r n a l ! ! 』

機械音声が鳴ると共にそのマキシマムスロットのボタンを押す

『E t e r n a l ! M a x i m u m D r i v e ! ! 』

すると、エターナルメモリのマキシマムドライブが発動し、俺の両手に真っ赤な炎が灯った

「食らえ！永久の終焉を告げる炎！！（エターナル・エンド・フレア）」

そう叫びながら、俺は燃え盛る左拳を化け物に叩きつけた

「ギヤアアアアアアアア！」

もろに食らった化け物は、茂みの奥に吹き飛んでいった

殴りつけた俺の手には、青く輝く宝石が握られていた

「これが、ジュエルシード……美しいな」

そう言いながら俺はそのジュエルシードの握る力を強くした

その瞬間、ジュエルシードから光が消え、ただの宝石のような状態になった

「デバイスもなしでジュエルシードを封印するなんて……本当に君はいつたい何者なんだ？」

少し回復したのか、ユーノが立ち上がりながらそう言った

「言つたる？普通じゃないんだよ俺は……」

そう言ってマキシマムスロットからメモリを抜いた

すると、俺の変身は解除された

「普通じゃなぞ過ぎるよ……君は……」

そう言ってユーノもレイジングハートを待機モードに戻した

杖だったレイジングハートは、宝石の珠のような形態になった

「あれ？ジュエルシールドは？」

ユーノがそう言って初めて握っていたはずのジュエルシールドが無い事に気づいた

「あれ？どこいった…？」

そのとき、俺は身に覚えがないブレスレットを左腕にしているのに気がついた

そこには三つの金属の枠組みがあり、そのうちの一個にはすでに青い宝石がはめ込まれていた

「まさか、それって……」

ユーノも気がついたのかそれを指差そうとすると

「はい、ジュエルシールドですよ」

俺の肩に乗ったアテネがそう答えた

「それは……生きているのかい？」

ユーノが驚いた様子でそう言った

「生きてますよ！こちらで本当の姿になると世界に悪影響があるから小さくなってるんです！」

アテネが頬を膨らませて怒ったようにそう言った

「ああ、ごめんなさい！」

ユーノはアテネの気迫に押されて、謝った

「むう…分ければ良いんです」

そう言ったアテネは満足げな表情を浮かべていた

「とりあえず家に帰ろう、お前も来い

その怪我一人じゃ難しいだろ？俺のことも説明するから……」

「分かりました……」

ユーノも取り合えず俺の家に来ることになった

そして、ちゃんと結界を解除して家に帰った俺達は、ユーノに事情説明をしてもらった

「僕の名はユーノ・スクライア……遺跡発掘を生業とするスクライア一族の一人です

僕が発見したロストログア、ジュエルシードを移送中にミスでこの世界に散らばってしまったんです

だから、僕は責任を感じて一人でそれを回収しよう……」

そう言ってユーノの表情はどんどん沈んでいった

アテネは大人モードになってユーノの傷を回復魔法によって回復さ

せていた

「んで一人あの化け物に戦いを挑んで失敗し、拳句の果てにそんなボロボロの状態になっちまったってわけか……」

「はい……」

ユーノはそう言って下を向いてしまった

「しかし立派なことだと思いますよ？自分でその責任を取ろうとするなんて、なかなかできることじゃありませんよ？」

「だが同時に人それを無謀って言うんだよ……お前俺が気づかなかつたら死んでたぞ？今頃……」

アテネのフォローに表情を明るくしたユーノだが、俺の言葉にまた表情を暗くした

「まあしかし、なんでジュエルシールドはこんな風になったんだ？」

そう言つて俺は左腕のアクセサリーにはめ込まれている小さくなつたジュエルシールドを見た

「僕もそれは気になつてたんだ…君は何者なんだい？デバイスもないのにジュエルシールドは封印するし、見たことないバリアジャケットを身にまとうし……」

「ああ、あれはバリアジャケットじゃないぞ？このメモリの力を使つて特殊な鎧が俺の体に装着されてるんだ」

ユーノの問いにそう答えた俺は、エターナルメモリを出し、ユーノに見せた

「へえ、見たことない物だね……」

そう言ってユーノは物珍しそうにメモリを見ていた

「そうだ、俺の名前を言うの忘れてな…俺の名は大道連夜だ」

「私はアテネと言います」

俺達はそう言って忘れていた自分たちの自己紹介をした

「ジュエルシードの件は私が答えますね

取り合えずあのままにロストロギアをしておくのは危険だと思いましたが、私のレアスキル、改造を使ってジュエルシードをアクセサリー状にしました

今後は連夜さんがジュエルシードを封印すれば、あと2つまで自動的にそのブレスレットの中に封印できます」

ユーノの治療を終えたアテネは、そう言って俺の横に座った

「改造って、ロストロギアを改造したんですか!？」

アテネがとんでもないことを言ったもんだからユーノが興奮してそう言った

「といっても改造したのは形だけですよ？」

実際のジュエルシードの能力自体はそのままですよ」

アテネがそう言つと、ユーノは「それでも凄いですよ!」と言つていた

アテネもほめられてまんざらでもないような表情をしていた

「で?ユーノお前これからどうすんだ?」

俺がそろそろ本題を切り出そうとユーノにそう聞いた

「できれば君達にも協力してもらいたい……君の言ったとおり、僕だけではこの件は手に負えない状態になってしまった
だから、お願いできるかい?」

俺は即答しなかった

ここで俺が協力すると言えば、なのはが魔道士にならない

そこで俺はこんな案を出した

「俺はお前とは別の方法でジュエルシードを探す……できればお前の
ほうも手伝つが、無理な場合がある……
そこで、もう一人協力者を作るんだ」

だが、この案はユーノが反対した

「これ以上無関係な人間を巻き込むわけにはいかないよ!それに、
こんな事を引き受けてくれる人なんていないよ!」

「いるさ……丁度適役ば人物がな……」

俺はそう言ってなのはの話を話した

ユーノも渋っていたが、協力者はやはり必要だと言うことで折れてくれた

「早速明日から活動を始めろ。

今日はもう遅い…お前もゆっくり寝るといい…辛い部屋は余るほどあるからな」

「分かったよ…本当にありがとう…連夜」

そう言ってユーノはアテネにつれられて、部屋まで向かった

「俺が高町を魔法の世界に呼び込んだ張本人……か………すまん、高町」

誰も居なくなった部屋で、俺は一人そうつぶやいた

第八話

あれからまる1日経った

俺はあるビルの上で、これから起こる事を見守っていた

「やはり心配ですか？」

肩に乗るアテネがそう言っただけに俺に聞いてくる

「心配じゃないなんて嘘は吐けないさ

俺が巻き込まれたんだ

この世界ではな……俺にはそれを見守る責任がある」

そう言った時、近くの場所で桃色の光が空に向かって伸びた

「始まったか」

その光の中心には、真の主を得たレイジングハートと、その真の主となった人物

まるで天使をイメージしたようなバリアジャケットを纏った女の子

高町なのはが居た

「生で見ると、改めて美しいと思いますね

あの年齢で凄い魔力量です」

魔法少女として自身の眠っていた力を解放したなのはを見て、アテ

ネはそんな感想を言った

「ああ……確かに美しい
ユーノもうまくやったようだな」

「ええ……後は彼女がジュエルシールドを封印するのを見届けて、今日
は終わりですね」

俺がアテネとそんな会話をしていると、なのはの前にガス状の体をした化け物が現れた

「さて、未来のエースオブエースの実力を拝見しようか……」

俺が手を組んでそう言った

なのはside

私の前に居るお化けのようもの

『なのは、そいつはジュエルシールドによって作られた化け物だ
魔法で倒してジュエルシールドを封印して!』

私にレイジングハートを渡してくれたフェロットのユーノ君からそんな指示が入りました

「分かったのユーノ君……
行くよ?レイジングハート」

『了解ですマスター!』

そう言って私がレイジングハートを握り締めた瞬間、怪物は私に襲いかかってきました

「きゃー！」

『 protection 』

攻撃が当たりそうになった瞬間、私の前に壁が現れて、私を護ってくれました

『 大丈夫ですか？マスター 』

レイジングハートがそう言って私を心配してくれました

「うん、ありがとうレイジングハート」

『 おやすいご用です 』

レイジングハートの言葉に、私は小さく笑いました

「ガアアアアア！」

そんな事をしていると、怪物はまた私に襲いかかってきました

「くっっ！」

今度はギリギリでそれを回避した私

でも怪物からの攻撃は収まりません

『なのは！攻撃するんだ！
でないと奴を倒せないよ』

「そんな事言っても、どうやって攻撃すれば……きゃ！」

ユーノ君との会話中に来た攻撃に巻き込まれ、私の体は後ろに飛ば
されてしまいました

『大丈夫ですか？マスター』

「にははは…大丈夫だよレイジングハート
まだいける！」

レイジングハートにそう言って、私は怪物を見る

攻撃……なんかこうギュウンとやってズバーンみたいな攻撃を……

「ギャアアアアアア！」

「くっ！」

怪物は考える隙を与えてくれません

『マスター……難しく考えず、マスターの思うようにやっては如何
ですか？

私が助力します』

レイジングハートがそう言ってくれた

「うん！分かったの」

「ガアアアアアアア！」

光線が直撃した怪物は悲鳴を上げた

「お願い……倒れて！」

私は願いも込めてレイジングハートを握った

正直光線の威力が強くて立っているのがやっとだからだ

「ガアアアアアアア！……ギャアア！」

怪物は倒れた……そう思ったのに……怪物は光線を打ち消してしま
った

「あ、ああ……」

私はその事に驚くしかありませんでした

それと同時に、全身の力が一気に抜けるような感覚に襲われました

『マスター！しっかりしてくださいマスター！』

地面にへたり込んでしまった私にレイジングハートは必死に呼びか
けてくれますが、私は立ち上がる力が出ません

『なのは！』

ユーノ君が私に向かって走ってきます

「ギヤアアアアアアアア！」

怪物が腕を振りかぶって私に向かって攻撃しようとしています

私はそのときに死ぬんだと思いました

「ごめんなさい……お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん……」

『……………!!』

レイジングハートやユーノ君が必死に何か言っていますがもう何も聞こえませんでした

私にはまだやらなきゃいけないことがあったのに……

私は救ってもらったのに……私は傷つけた

私の最初の友達

「ごめんね……連夜君」

そう言っただけ私は目を閉じた

でも、一向に私は痛みを感じませんでした

「大丈夫か？白き魔道士よ……」

「ふえ？」

突然知らない男の人の声が聞こえてきたので、私は驚いて目を開けました

するとそこには、怪物の腕を片手で受け止めている、真っ白のバリアジャケットを纏った人がいました

side out

ビルでなのはの戦いを見ていた俺は、怪物に翻弄されているなのはに少しばかりの不安を覚えていた

そして、次の瞬間驚愕した

「おい！この魔力量……」

「ええ、不完全ですが、スターライトブレイカークラスの砲撃ですね」

俺の問いにアテネが答えた

「まだやつは魔法という存在を知ったばかりだぞ！？
そんなやつがなんであんな技を……」

ある意味それはなのはの天性の才能だったと言えるばそれまでだった
だが、少し様子が違ったのだ

「拙いですね……やはり魔力の収縮が上手くいっていません」

「ああ…あんなもん撃つたら、今のあいつじゃ魔力全部持っていけるぞ！」

だが俺達のそんな心配を他所に、なのはは不完全なスターライトブレイカーを撃つたのだ

確かにスターライトブレイカーは直撃した

だが、化け物はそれを己の力で打ち消したのだ

「なっ！いくら不完全とは言えスターライトブレイカーを打ち消したと！？」

直後、なのはは地面にへたり込んでしまった

化け物はゆっくり腕を振り上げ、それをなのはに振り下ろそうとしていた

「ちっ！あんの馬鹿野郎が！」

俺はそう言っでビルから飛び降りた

「連夜さん！？」

肩に乗っていたアテネは浮遊しながら俺の横に来た

「アテネ、俺を転移させろ！あいつの目の前にだ！」

そう言いながら、俺は取り出したエターナルメモリを起動させた

『E t e r n a l』

瞬時に腰に現れたロストドライバーにメモリを突き刺し、展開した

「変身！」

「転移します！」

『E t e r n a l』

アテネがそう言って転移を始めた瞬間に、俺の体は変身を開始していた

「ギヤアアアアアアアア！」

転移が終わった瞬間、俺の真横に化け物の手が迫ってきていた

『ズン！』

俺は片手でそれを受け止めると、ゆっくり目の前で俯いていた少女に言った

「大丈夫か？白き魔道士よ」

「ふえ？」

そうやってなのはは顔を上げた

『連夜！』

ユーノが秘匿回線で俺に念話をしてきた

『ユーノ、しばらくなのはに俺のことは黙っておいてくれ…頼むな』
そう言っただけ俺は一方的に念話を切った

「あの、あなたは……」

「通り過ぎの正義の味方だ

アテネ、この子傷と魔力を回復させてやってくれ

あとデバイスも少し損傷しているそれもできれば直してやってくれ」

「了解です」

アテネがそう言っただけで浮遊しながらなのはの前に現れた

「ふええ！人形が喋ってる！」

「人形じゃありません！そのフェレット君のように、ちゃんと生きてますよ」

そんな会話をしている二人を置いていて、俺は止めていた化け物の手を弾き飛ばした

「ガアアアアアア！」

化け物は新たに現れた俺という敵に対して威嚇を行った

「悪いがそんなのは子犬の威嚇レベルだな……
本当の威嚇するのは、こうするんだ」

そう言つて、俺は今までずっと抑えていた自分の魔力のすべてを解放した

「ガッ！」

化け物だけでなく、なのはやユーノも驚いた様子だった

「白い魔導師よ………よく見ておくと良い
収束系魔法とは、こつするものだ」

そう言つと俺は左手をゆっくりと上に掲げた

その瞬間、膨大な量の魔力が俺の掲げた手のひらに集まってきた

「白い魔導師よ、君も大気から魔力を収束出来るレアスキルを持っている

君なら必ずものに出来るさ」

「は………はい」

なのははポカンとしながらそう言った

圧倒的な力の差に唾然としているのだろうか？

「ギャ………ギャアアアアア！」

化け物はたじろぎながらも必死に威嚇する

もはや意味のないものと知りながら

「そろそろ良いか
消し飛ばせ……破壊と創世よ！」

そう言っただ俺は直径50cmくらいの球体になっていた魔力の塊を、
10cm程に圧縮し、握り締めた

「アポカリユプス………」

技の名前を言いながら、俺は空高く飛び上がり、化け物の眼下に収めた

「ブレイカー!!」

そう叫んだ俺は左手に圧縮した魔力の塊を化け物に向けて叩きつけた
直後、真っ白な魔力の奔流となったそれは、一瞬で化け物を呑み込んだ

「ギユアアアアアア！」

断末魔のような雄叫びを残して、化け物は消滅した

化け物が居た場所に残っていたのは、光を失ったジュエルシードと、
何か巨大な物によって抉られたような跡だった

「ふむ、いささかやりすぎたか………
エターナルの力も乗せていたから余計か」

そう言っただ俺はジュエルシードを拾った

「ほらよ」

そのまま拾ったジュエルシードをなのはに向かって投げた

「わっ！ニヤニヤニヤ！」

そうやってなのははワタワタしながらジュエルシードをキャッチした

「治療の方は終わったのか？アテネ」

「はい、デバイスも修復出来ました
大丈夫ですよ」

そう言ってアテネが俺の肩に乗った

「あの……あなたは……」

「そんな事よりそれを封印するんだろ？
早くしたまえ」

そう言って俺はなのはの言葉を遮った

「あ、そっか…えっとユーノ君
確か自分の頭に浮かんだフレーズを言うんだよね？」

『そっだよ』

なのはとユーノがそう言って会話していた

俺はアテネに念話で「転移してくれ」と伝えた

「リリカル・マジカル！

ジュエルシード、封印！」

背中越しに聞こえるなのは声を聞きながら、俺達は自分の家に転移した

こうして、無事魔法少女高町なのはは誕生したのであった

第九話

なのはが魔法少女として覚醒したあの夜から一夜明けた朝

テレビを点けると、どこのチャンネルも昨日の晩突然出来た謎の破壊跡を報道していた

爆弾テロ、外国からの威嚇、宇宙人の襲来等様々な憶測話で盛り上がっていた

「みんなその話で持ちきりですね」

アテネが朝食を食べながらそう言った

「だな」

俺はテレビを見ながらそう答えた

「まさか、あれをやったのがこんな子供なんて夢にも思わないでしょうね」

「……………だな」

アテネに痛いところをつかれた俺は、そう答えるしかなかった

「どうしたんですか連夜さん？」

いつもの貴男ならこんな事くらい笑って流す筈でしょう？」

アテネが不思議そうに言った

「まあな……昨日の一件で、お前の言ってた事を自分でも体験したからちよっとな……」

「私の言っていたこと？」

アテネはそう言っつて首を傾げた

「強い力を突然持つてしまった奴は、その力に溺れちまうつてやっだよ

昨日の俺は、力に溺れた訳じゃないが……力の加減をミスっちゃまった下手すりゃ大災害だ」

「戦うのが恐くなりましたか？」

俺の言ったことに、アテネはそう問いかけた

「いや、恐くはねえよ

ただ、改めて自分の力つてのは考えて使わないといけないなっつて思っただけだよ」

「そうですか……なら大丈夫ですよ

貴男なら、一度やっつた失敗はしませんよ」

アテネは笑顔でそう言っつた

「ハハハ、お前俺の何を知つてんだよ」

そう言っつて俺は笑いながら朝食を口に運んだ

「知ってますよ……ずっと見てたんですから……」

アテネが小さくそう言った言葉は、俺には聞こえなかった

「そう言えば、そろそろですね」

朝食の食器を洗いながら、アテネがそう言った

「そろそろってなにがだよ？」

俺はソファアに座りながらそう聞いた

「フェイトが海鳴に来るのですよ」

下手したらもう来てるかも知れませんか？」

その言葉で俺は初めてその事を思い出した

「そついやそつか……すっかり忘れてたぜ」

そう言ったアテネと話している時だった

『ピンポーン』

部屋全体にインターホンの音が鳴り響いた

「あれ？お客様ですかね？」

アテネが首を傾げてそう言った

「分からん……なんかを頼んだ覚えもないが、まあ出てくるよ」

そう言つて俺は玄関に向かい「は〜い」と言いながら扉を開けた
すると其処にいたのは

「あの……今日隣に越してきました
フェイト・テストロツサです」

「あたしはアルフだ、よろしくな」

なんと、たった今さっき噂をしていた金髪の魔導師、フェイトが目の前に立っていたのだ

「あの……これつまらない物ですけど……」

そう言つてフェイトは包みに入つた何かを渡した
引越して来たからお隣さんへの挨拶つてわけね

「ありがとう」

それにしてもフェイトつて変わった名前だね？
外国の人？そつちのアルフつて人も」

「え？ああまあ、そんな所かな？
君お父さんかお母さん居ないかな？
出来れば挨拶がしたいんだけど……」

おずおずと答えながらも、フェイトはそう言つて俺の後ろを覗き込む

「ああ、悪いな、親は二人とも俺が小さいときに死んでしまった…
…此処に住んでるのは俺だけだ」

俺がそう言つと、フェイトやアルフの表情に影が差した

「ご、ごめんなさい！私にも知らなくて……その……」

フェイトはそう言つて何回も頭を下げている

困った俺はフェイトを落ち着かせようとフェイトの頭をなでた

「え？」

「気にするな、いろんな人にこれ言つてたから、慣れてるよ
そんな謝る必要ねえ……」

戸惑つフェイトに俺はそう言つた

「ごめんなさい……」

「だから謝らなつて」

俺は苦笑いしながらフェイトの頭を撫で続けていた

「ごう……ごめんなさい」

「あのなあ」

俺は「ハハ」と苦笑いするしかできなかった

「いつまで頭撫でてんだい？」

「おっとこりゃ失礼」

アルフの指摘に俺は慌てて手を離れた

「あっ……」

フェイトは少し残念そうな顔をしていた

まさか……なあ？

「フェイトもフェイトだよ！すぐに相手に気を許しちゃだめだよ！」

「あう……ごめんアルフ……」

アルフの指摘にフェイトはたじたじになっていた

主人と使い魔と言う関係を知らない者が見れば、まるで仲のよい姉妹に見えただろうな

「あんたもだよ！」

アルフがそう言って俺を指差した

「え？俺？」

一様念のために確認をしておく

「あんた以外に誰がいるってんだい！
あたしの目が黒いうちは、フェイトはそう簡単に嫁がせたりしない
からね！」

「アッアルフ！」

アルフの言葉に、フェイトが顔を真っ赤にしながら抗議していた

「まあなんにせよお隣さんのよしみだ

困ったことがあったら何でも言ってくれ、相談でもなんでものるぜ？
これから宜しくな、テストロツサ、アルフ」

俺はそう言って二人に手を振った

「うっうん！あ、君名前は？」

フェイトに言われて初めて気がついた

俺名前言つの忘れる癖でもあるかねえ？

「悪い悪い、俺は大道連夜だ」

「連夜：変わった名前だね

よろしくね、連夜」

「フン！まあよろしくって言っといてあげるよ……連夜」

フェイトは笑顔で、アルフはそっぽを向きながらそう言った

そのまま二人は自分の部屋へ戻っていった

「まさかですねえ」

部屋に戻った俺に、アテネはそう言った

「まったくだよ…しかもお隣さんってどんなご都合主義だよ」

俺はそう軽くツツコミを入れておいた

「そつだ、この際ですしエンカウントを増やしておいたらどうですか？」

「どついう意味だ？」

アテネの言ったことが理解できなかった俺はそう聞き返した

「最後の闇の書の主、真なる夜天の書の主に会いに行つては？と言つているのです」

その言葉を聞いて、俺は初めてその意味が分かった

「はやくに会いにいけてか！？」

「はい、この頃ならまだヴォルケンリッターは居ませんし、図書館にいるでしょう」

原作ならずかさんがお友達になってましたが、この際あなたも友達になつておいたほうが後々のことを考えると良いのでは？」

アテネの言葉にも確かに一理ある

後々はやてが闇の書の主となり、ヴォルケンリッターが出現すること
も確定事項だろう

彼女たちの行動に助力する意味でも、はやてを守るためにも、何か
しらの関係になっておいて損はない

「よし、会いに行くか

アテネ、一緒に来い、高町に会いそうになった場合認識阻害をかけ
て逃げるから」

「良いですよ。

ちよつど洗い物も終わりましたし」

そう言った瞬間、アテネは人形モードになり、俺の肩に乗った

「じゃあ、行くか」

そう言って俺は家を出て、図書館まで向かった

「此処か…さてはてそう都合よく会えるかな」と

そう言いながら俺は図書館の中へと入って行った

幸いにもマンションから此処までの道中でなのはに会うことはなか
った

「ん！もうちょい！ん〜！」

「そう都合よく会えたよ」

『ですね……』

念話でアテネも同意していた

今俺の前には、車椅子を支えに必死に本とろうとしている八神はやてがいたのだ

「おいおい、無茶だよ

取ってやるからどの本か言ってくれ」

そう言っただけははやてに近づいた

「大丈夫、もうチョイで取れるさかいに、大丈夫やから……わわ！
だが、はやての支えにしていた車椅子がバランスを崩し、危うくはやてごと転倒しそうになった

「おっと！」

俺はとっさにはやてを抱き上げ、車椅子を足で支えた

とっさだったとは言え、なんでお姫様抱っこしたんだろう俺……

「うわぁ……私男の人にお姫様抱っこされとる……」

はやてはそう言いながらどんどん顔が赤くなってきている

「ほら、全然大丈夫じゃねえじゃねえか」

そう言っただ俺ははやてを立て直した車椅子に座らせた

「人の善意はありがたく受け取っとけ…で？どの本なんだ？」

「堪忍な…ほなお言葉に甘えるわ

アレとアレとアレやねんけど……」

はやては本当に申し訳なさそうにしながら指示を出した

「お安い御用だ」

そう言っただ俺は指定された本をパパッと取っただ

「ほれ、ついでに受け付けまで一緒に行くよ」

「そんなん悪いわ、本まで取っただもろたのに」

はやては遠慮からかそう言っただ断ろうとした

「お前な、俺と同じ年くらいだろ？」

そんな年齢のやつが遠慮なんてしてんじゃねえよ」

そう言っただ俺は車椅子を押して行っただ

「ほんま、堪忍な」

はやては車椅子を押す俺に申し訳なさそうに手を合わせた

「気にすんなよ

俺も暇なんぞな」

そう言っつて俺達は受付で本を借りた

そして結局、はやての家まで送っつていくことになったのだ

「何から何まで堪忍な

あ、そう言えば名前聞いてなかったわ
名前教えてえな

うちは八神はやてや」

またしても言われるまで気がつかなかった俺：

「俺は連夜、大道連夜だ

よろしくな八神」

「はやてでええよ

よろしくな、連夜君」

はやてはそう言っつて俺に笑いかけた

「俺は女の人は嫁になる人意外名前で呼ばないっつて決めてんの
だから八神だ」

「そ、そうなんか……えらい変わった考えやな」

そう言いながら何故か顔を赤らめるはやて

ちよっと待て、今までの何処にフラグを立てる場所があった？

『連夜さんは女泣かせですねぇ』

『うるせえやい！』

肩に乗るアテネが念話でそう言ってきたので俺はやけくそ気味に言い返した

「あ、ここや

ほんまありがとうな連夜君」

そう言っではやてに言われて初めてはやての家の外観を見た

ほんとにデカイ家だった

「おう、じゃあ俺帰るわ

また会おうぜ八神」

そう言っで俺が帰路に着こうとしたときだった

「……………何してる？」

俺はそう言っで後ろを振り返った

其処には、弱々しく俺の袖を引っ張るはやてが居たのだ

「あかん…こんなワガママあかんって分かってんのに……………」

ほんまは分かってんのに……………」

行ってほしゅうない……………連夜君に帰ってほしゅうないんよ」

はやて今にも泣きそうな声でそう言った

『良いんじゃないですか？今日くらい家に帰らなくても私は大丈夫ですよ』

アテネが念話でそう言った

『そうか……まあ、こいつはヴォルケンスが来るまでずっと1人だったもんな
まあ良いか』

「つたく、わあつたよ

今日は八神ん家に世話になるよ」

俺がそう言つと、はやては顔を上げて途端に表情を明るくした

「ほんまに！？嘘やないん？」

「こんな状況でウソ言つてどうする」

俺がそう言つと、はやては満面の笑顔で「やった〜！」と言つていた

第十話

はやてside

「ほなまあ、何も無い所やけどゆっくりしてってえな」

「はいよ〜」

そう言っつて連夜君は居間にゆっくりと座った

て言っつか何してんの私！

「ど、どないしよ

今日初めて会った人を家にいれてもうた

しかも男の人を……

いやでも、連夜君は優しい人やし、悪い人ではない言っつか……

寂しかったんは事実やけどなんか遠くに言っつてしまっしそやっつた言
うか…… ああもう何言っつてんのうち！」

自分でも訳が分からんかった

こんな気持ち初めてやし、なんやお姫様抱っこされたし……

結構カッコエエなあと思っつたし……

「どうした八神？大丈夫か？」

そう言っつてうちの顔を連夜君がのぞき込んできた

「い、いや、何でもあらへんよ!？
何も連夜君の事なんて考えてないで!」

て何言うてんにやうちいいいい!

「いや、そこまでは聞いてないが……なんか顔も赤いぞ？
熱でもあんのか？」

そう言つて連夜君がうちの額に自分の額を引つ付けてきた

冷たくて気持ちええわあ……いやそうやのうて!!

顔!顔近い!!

「れ、連夜君……あの……」

「まあ熱自体はないみたいだな
顔の赤みは増してるが……

大丈夫か八神？」

そう言うて連夜君はうちを見てる

うちは一向に顔に行った血が戻つて来おへんかった

胸もなんや苦しい

連夜君を真つ直ぐ見れへん

「ん、ちよつち我慢しろよ?八神」

「へ？」

うちがは気付いた頃には、体が宙に浮いてて、またお姫様抱っこされとった

「れ、連夜君！？」

また顔が近い！！うちの息とか掛かってんのちゃうやろか？

「八神、お前寝室は？」

連夜君が突然そんなことを聞いてきた

「へ？寝室はあつたやけど？」

うちはおずおずと自分の寝室を指さす

連夜君は「そうか」って言うて私をお姫様抱っこしたまま寝室まで向かっていく

って、なんでうち寝室に連れて行かれてんの！？

はっ！まさか大人の関係にはベッドの上で組んず解れつするって本で読んだことがある

まさか連夜君はうちとそれをする気なんか！？

あかんで連夜君！うちらまだ子供やで

そんなんするにはまだ早い

そりゃうちかて嫌やあらへんけど…まだ心の準備が……

「あ、あうあう……」

うちはこんだけ心だけは喋りまくってんのに、実際の口は全然動いてくれへんかった

「よつと……」

気付けばこちらは寢室に着いとして、連夜君はうちをベットに寝かせてくれた

てことは今から始まるんか!?

あかんあかん!あかんて連夜君!

でも、うちが内心期待しとったような事は起きひんかった

「へ?」

連夜君は黙ってうちに布団を被せて、うちの横で腰を降ろしてるだけやった

「疲れが出てんのかも知れねえ
ずっと1人だったもんな……」

今は俺が側に居てやるから、ゆっくり寝てろ」

連夜君はうちの頭を撫でながら優しく笑ってくれた

「えっあ、その……うん
ありがとな…連夜君」

うちは少しだけ、少しだけがっかりしながらも、そんな連夜君を見て安心しながら、ゆっくりと眠ってもうた

side out

「おやすみ……八神」

俺の横ですやすやと眠るはやての寝顔は、思わず写真を撮りたくなるほどに可愛いものだった

『連夜さん、ユーノさんから念話が入っていますよ?』

アテネがそう報告した

なぜアテネが報告しているのかと言うと、この家をアテネの強力な結界で覆っているため、外部からの魔力伝達が一切入ってこないのだけれど、しかし内側からは魔力を感じたりも出来るので、感覚としてはマジックミラーのようなものだった

『繋いでくれ』

『はい』

はやてを起こさないようにお互い念話を使って会話した

直ぐにユーノの念話は繋がった

『連夜かい？今近くでジュエルシードの反応があったんだ
出来たら手伝って欲しいんだけど…』

ユーノの念話と同時に遠くの方角から魔力を感じた

左手のブレスレットに埋め込まれているジュエルシードも青々と輝
いていた

『反応していますね』

この魔力は間違いなくジュエルシードでしょう…』

『ああ、ユーノ、直ぐに向かう』

それまで高町を頼んだぞ？』

『分かった！』

俺はユーノからの念話を切ると、一度はやてを見た

『アテネ、しばらくはやてを頼む』

『……分かりました』

そのかわり、早めに帰ってきてくださいね』

『ああ、ついでに晩の食材を買ってくるよ』

『はい』

アテネは俺の肩から降り、俺の顔を見て頷いた

「悪いな八神、直ぐ戻る」

はやての頭を起きない程度に優しく撫で、俺はアテネの転移魔法でユーノの下へと向かった

ユノside

これは拙いな……

「やあああ!!」

「たああああ!!」

なのはと金髪の魔導師の少女が空中で戦いを繰り広げていた

僕は代わりにフェレットの姿だけどジュエルシードによって巨大化した猫の化け物を止めようとしてるんだけど……

「おおりやあああ!!」

「くっ!!」

金髪の魔導師の少女と一緒に現れたもう1人の魔導師の女の人がそれを邪魔した

「邪魔をしないでください!!」

「やだね!ジュエルシードはあたいらが頂くんだよ」

僕が左に避けると、次の瞬間先程までの場所には彼女の鉄拳が振り下ろされていた

「ジュエルシールドは渡さない！」

「じゃあ敵だね！」

再び彼女の拳が飛んでくる

今度は避けられない！

「わわっ！」

なのはも金髪の魔導師の攻撃が迫ってきている

拙い！

「もらったよ！」

僕が目をつぶった時だった

次に僕が感じたのは殴られた痛みの感覚ではなく、何か体に引っ張られるような感覚だった

「？」

次に僕が目を開けた時、僕は誰かに抱えられていて、横にはなのが抱えられていた

「ギリギリだったな」

僕は声の主から僕達を救ったのが誰だか分かった

白い体に真つ赤な炎のエンブレムの入った腕

腰に巻かれたベルト

連夜が僕達を助けてくれたのだ

s i d e o u t

『助かったよ、連夜』

ユーノが念話で礼を言ったので俺は気にするなと言っておいた

「あ、あの、また助けていただいて…ありがとうございます」

なのはも俺に抱えられながら礼を言ってきた

「気にするな…白き魔導師よ

こちらも気分的に助けただけだ」

俺はそれだけ言うと、なのは達を下ろし、フェイト達に向き直った

「な、なんだいあなたは!？」

まさか管理局の魔導師かい!？」

「!?!」

アルフが驚いた様子でそう言った事で、フェイトもこちらの様子を

慎重に見ていた

「悪いが答える義理はない
管理局の魔導師ではないと言っておこうか？」

俺は戦闘準備を整え、一気に自分の中の魔力を解き放った

「!?!」

「なっ！なんてデタラメな魔力だい!!」

そりゃE×クラスですから……

「さあ、俺はさっさと帰りたいんでな…

雷の魔導師とその使い魔よ

悪いがジュエルシードは頂くぞ？」

拳を握り締めて構えをとる俺に、フェイト達も警戒しながら構える

「さあ……地獄に叩き落としてやる!!」

2人を指差した俺は、そのまま突っ込んでいった

A t e n e s i d e

やれやれ、私に彼女を任せて行くなんて、最近私の扱いが酷くなっ
てるような気がします！

これでも私神なんですよ!?

「まったたく……」

ふと目の前で可愛く寝息をたてて眠っているはやてさんを見た

「あなたは良いですね

あの人にあんな風に優しくされて…

でも、まだ色々とは私は貴女に勝つてますから」

彼女は眠っているのですがこの声が聞こえることはないだろう

でも言っておきたかった

やきもちと言う奴なのだろうこれが……

「ん……んん」

すると、はやてさんが目を覚ましそうになっていた

『拙い!拙い!ええと……』

そして慌てている間に……

「あれ?連夜君?」

彼女が目を覚ましてしまった

『あちや〜』

私は頭を横に振った

幸いまだ私には気付いていないようだが、連夜さんが居ないのは気付いたようですね

「まさか……今まで全部夢やったんか？」

彼女は今にも泣きそうですと言った表情だった

『はあ〜連夜さん……これは貸しですよ』

「夢なんかじゃありませんよ？
むしろ、今の状況が夢ですよ」

「え？」

聞き覚えのない声を聞き、驚きながら彼女は私の方を見た

「初めましてはやてさん

私は貴女の夢が作り出した夢の住人です」

私はぺこりとお辞儀をした

彼女は驚いた表情をしていた

『まあ当然ですね』

自分で自虐的に笑っていた

「人形が…喋つとる……ほんまに夢なんか？」

彼女は私に顔を近づけながらそう言った

「はい、私はアテネと言います」

私の言葉を聞きながら、彼女は自分の頬をつねった

『ヤバッ!』

私はとつさに彼女の痛覚を麻痺させた

「ほんまや……痛い

ほんまに夢なんか……」

彼女はそう言ってどこか安堵したような表情を浮かべた

「ほな……連夜君に会ったんは夢やないんやね」

「はい……今でも貴女を見つめていますよ？

ですからほら、早く夢から醒めるように……」

目をつぶってください」

私は適当に考えた内容を繋ぎ合わせながらそう言った

「せやなあ……ありがとなアテネちゃん

また夢で会ったら今度はゆっくり遊ぼな」

彼女はそう言って再びベッドに横になった

「その日が来るのを楽しみにしていますね

はやてさん……」

私は優しく彼女の頭を撫でた

「うん……うちも楽しみに……してる……わ……」

彼女はゆっくりと眠りについて行った

『早く帰ってきてあげてくださいよ
連夜さん……』

彼女の頭を撫でながら、私は天井を見上げていた

s i d e o u t

「ハアハアハアハア……」

「っ！なんて奴だい……一発も当てられないなんて！」

肩で息をしているアルフとフェイト

至って余裕の俺

まあこの結果は大方目に見えていた事だがな

同時に相手をしていた猫の化け物もだいぶ弱っていた

「そろそろ止めといくか……」

俺はエターナルメモリを前のメモリスロットから抜き、横のマキシマムスロットにメモリを挿し、マキシマムドライブを発動させた

『Eternal Maximum Drive!』

機械音声が鳴り響き、俺の両腕が燃え上がる

「!!!」

2人は驚きながらも防御魔法を張ろうとした

しかし、俺はその間を通り抜け、直接猫の化け物に拳を振り下ろした

「もとは普通の猫なんだ

ちよっと痛いけど我慢しろよ!」

「ニヤアアアアア!」

化け物が悲鳴を上げながら、みるみるその体を縮めていく

「しまった!」

「あいらを素通りした!？」

2人は慌てて俺の邪魔をしようとは向かってくる

アルフは拳を振り上げ、フェイトはバルディッシュで切りかかろうとした

しかし

「ジュエルシード……封印!」

次の瞬間、俺の周囲から強烈な光が放たれた

「きゃ!」

「うわっ!」

俺の近くまで寄っていたフェイトとアルフはもろにその光で目をやられてしまった

「眩しい!」

『凄い光だ!』

離れて戦いを見ていたユーノとなのはもその光を見ていた

そして、光が治まると、俺の手にはもとの体に戻った猫が居た

「にゃうん……」

「心配するな……お前はなにも悪くない」

重力に引かれて地上に降りた俺は、ゆっくりと猫を解放した

「ジュエルシード!?!」

「何処にやっただんだい!?!」

フェイトとアルフがこちらに迫ってくる

「此処だ……こうなったら解放は俺にしか出来ない
悪いが今回のやつは諦めるんだな」

俺はフェイト達に左手のブレスレットを見せた

其処には、青い宝石が2つはめ込まれていた

「くっ！くっ！」

襲いかかろうとしたアルフを、フェイトが制した

「アルフ…今は退こう」

ジュエルシールドが無いなら、此処にいてもしょうがない」

フェイトは俺を見ながら、アルフの肩を掴んだ

「待って！」

すると、フェイトの後ろからなのはが飛んできた

「もう私の前に現れないで

次は、手加減出来ないから」

そう言ってフェイトとアルフは転移魔法を使ってその場から離脱した

「なら、俺も行くか……」

さらばだ…ユーノ

さらばだ…白き魔導士…」

『アテネ…』

『了解です』

念話でアテネに連絡をとると、俺の体を光が包み、転移が始まった

「待って！まだあなたの名前を聞いてない

私は高町なのはだよ！」

転移を始めているというのに話しかけるとは、相変わらずだなあいつは…

「俺はエターナル

今はそれしか言えない

さらばだ……」

そう言い残し、俺は転移した

転移が終わった先は、再びひやての部屋の前だった

『遅いですよ！』

頬を膨らませ、アテネが怒ってた

『すまんすまん』

アテネの前で手を合わせた俺は、そのままはやての寝ているベットに腰を下ろした

「ん……連夜……君？」

はやてが重い瞼をこすりなが目を覚ました

「おう……気持ちよさそうに寝てたな
おはやよう……八神」

優しく頭を撫でて、俺ははやてに挨拶した

第十話（後書き）

中途半端な所で終わってしまいました

戦闘フェイト達の扱いが雑だったような……

次回頑張ります

第十一話(前書き)

更新遅れてすみません

長々と続きます

第十一話

あれから数時間後、俺ははやてと一緒に晩飯を食べていた

「ごめんな連夜君、なんや夕食まで作ってもらて」

「気にすんな、俺も家に帰れば一人だからよ。」

それに、やっぱ晩飯ってのは何人かで食ったほうがうまいからな」

夕食を口に運びながら俺とはやてはそんな会話をしていた

え？俺が家事出来たのかって？

いちよう人並みには出来るんだよ？

ちゃんとアテネと交代で料理とかしてんだぞ？

『まあ連夜さんが料理できるってかなりのギャップですから』

『ほっとけ』

アテネに突っ込みを入れながら、俺は食事を口に運ぶ

「連夜君……変なこと聞いたらごめんな

連夜君、ご両親は？」

突然、はやてが箸を止め、真剣な面持ちでそう言った

「ん？どした？突然……」

俺もまた不意にそんなことを聞かれた為に、ちゃんと答えが返せなかった

「いやな…さつき連夜君家に帰ったら一人って言ったやん？
やから、ご両親はお仕事かなんかで帰ってきやはるんが遅いんかな
って」

なるほどな…俺の発言が発端か

「いや、両親はいないんだよ

俺が5歳の頃に事故で死んだよ」

「…！ごめんやで連夜君！うち何も知らんと聞いてもつて、ほんまに…ほんまにごめん！」

はやては俺の言葉を聞くなり顔を真っ青にして謝ってきた

「気にすんな…両親居ないのはお前も一緒だろ？

似たもの同士なんだよ俺達は…だから気にすんな

俺もこの説明いろんな人にしてるから慣れてるしよ」

ポンポンと頭を叩いてそう言うと、はやては瞳を潤ませて俺を見ていた

「ほんまに？怒ってへん？うちのこと、嫌いになつたらん？」

「友達を嫌いになるかよ…もつと信頼してくれていいんだぞ？俺のこと…」

頭を撫でながら、はやてを優しく抱き寄せた俺はそのまま……

『はふ…美味しいです』

アテネに飯を食わせていた

いや、正確にはアテネが食事しているのをはやてから隠している

「れ、連夜君？」

はやてが驚いて顔を動かそうとするのを、俺はさらに強引に抱き寄せてそれを阻止した

『まだか？』

『もうちょいです…』

念話越しに会話をしながら、アテネのほうを向くと、確かにもう少しで俺の夕食を食い終わろうとしていた

「れ、連夜君…ちょ、そんな激しく…」

はやてを見ると、顔が真っ赤になっていた

『まだか!?!』

『ご馳走様です!』

アテネは念話と共に俺の肩に乗った

『了解!』

念話を切り、俺ははやてを解放した

「ふわわわ……連夜君が…連夜君がぎゅって…」

はやては目をくるくるさせながら顔を赤くしていた

「はやて?」

「連夜君にぎゅって…連夜君にぎゅって…」

はやては俺の言葉が聞こえていないのか、ずっと同じ言葉をつぶやいていた

「……………」

ふと時計に目をやる

既に時間は晩の八時を回っている

『帰るに帰れませんね……………』

『そつだな……………』

俺は深いため息を吐きながらどうすべきかを考えていた

すると

『トーン……………』

「ん？」

肩に重たい感触が乗ったので、ふとその正体を見た

すると……

「連夜……君……」

正体は眠ってしまって俺の肩に頭を預けたはやてだった

『アテネ…毛布持ってきてくれ』

『はいはい』

アテネがふわふわと浮きながら、はやての寝室から毛布を持ってきてくれた

『おまえも来い……三人で寝るぞ？』

『もとよりそのつもりです』

アテネがはやてとは逆側の肩に乗って俺の頬に頭を傾けた

『おやすみ……』

『おやすみなさあ〜い』

アテネのその念話を最後に、俺の意識は消えていった

はやてside

朝日がうちの視界を優しく照らしてくれる

「んみゅ……………もうちょい寝たいわぁ」

やけど、お日様は私に起き！言ったはるみたいに照らしてきやはる

「まだ眠たいんよぉ…もうちょいだけ寝かせて…」

うちはそのまま抱き枕を強く抱き締めた

ほんま心地ええでこの抱き枕

ごつつ安心できる…

ん？抱き枕？

うちの頭ん中が急速に冴えていくんが分かった

うちん家に抱き枕は無かったはずや

そもそもうち昨日ベッドで寝たっけ？

うちは恐る恐るやけど目を開けてみることにした

「……………！」

んで、うちはめっちゃくちゃ驚いた

うちが抱き枕や思て抱き締めとったんは、連夜君の腕やった

んで、うちの目の前に、連夜君の顔があった

『ちょ！なんでこんな事になっとるん！？

なんでうちが連夜君に寄り添うみたいな感じで……』

そう言うてる間に、うちの記憶がどんどん鮮明になってきた

そうや、昨日連夜君にムチャクチャ抱き締められて、んでホワァン
ってなっただうちはそのまま眠たなって……

まさにあいたたたる展開やと自分でも思った

でもこれはある意味チャンスかもしれん

連夜君はまだ寝てるし……邪魔も入らん

うちは連夜君を起こさんようにゆっくり連夜君の唇に自分の唇を近
付けようとした

でも、神様はそんなうちに甘なかった

「んっ！んんっ」

連夜君が目を覚ましたんや

side out

俺が目を開けた瞬間、はやてが「ウヒヤア！」と言っていた
いったい何をしようとしたんだが……

『ナニをしようとしたのかも知れませんよ?』

『起きてたのかよ』

俺はアテネの発言はスルーし、起きていた事に驚いていた

『この時間帯にはいつも起きてますよ
それより、あることを思い出しました』

『なんだ?』

横に居るはやては顔が真っ赤でじっとしている

視線ははやてに固定し、アテネと念話に集中した

『今日はなのはさんとフェイトさんの温泉フラグです』

『マジで?』

『はい』

俺は至って普通の表情を保っている

保っているが、内心は「orz」状態だった

『どうします?』

『何かしら考える』

とりあえずはやてに相談してみるよ』

『相談？何のそ…』

俺は強制的に念話を切り、はやてに話しかけた

「八神…今日良かったら温泉行かねえか？」

「へ？」

今はやての頭の中にはいっぱい「？」が浮かんでいるだろう

「いやな、実は懸賞で温泉旅行のタダ券が二枚あるんだよ

しかも一泊二食付き

でも前言ったみたいに俺一人暮らしでさ…

1人で行ってもアレだから行かないでおこうと思ったんだけど…

いやまあ、お前が嫌なら無理には…」

「行くで!!..!」

はやては俺の言葉を最後まで聞かず、目を輝かせてそう言った

つか即答って…

「もちろん行くで！」

連夜君と二人旅やもん…

いつ行くん？」

はやては何やらかなりウキウキしていた

「今日だよ

準備が出来たら直ぐにでも……」

「分かった！」

はやては「ウキウキ」と口で良いながら動こうとした

あれ？でもはやてって足麻痺してるんじゃない？

俺のそんな心配は杞憂に終わった

はやては器用に体を動かし、スイスイと押し入れの前に来ていた

「連夜君も準備して来いな

うちちゃんと待ってるし！」

はやては笑顔で俺に言った

「分かった

じゃ準備できたらまた来るわ」

「はいはい」

俺ははやてが最後に手を振ったのを確認して、はやての家を出た

「いちよう超強力な結界でも張っとくか」

俺ははやてに後々起こることを考えて、おれ以外には到底破れない

であろう強力な結界を展開しておいた

「少なからずシャマルの結界よりはマシだろう」

俺はそう言っただけで自分の家に帰って行った

「勝手にあんな事言っただけで…どうするつもりですか？」

家に帰って即行大人モードになったアテネは頬を膨らませそう言った

どうやらかなりの無理難題にご立腹らしい

「すまんとは思ってる

だがよ、どちらにしてもあの状況ではやての家を出るにはこの方法が一番よかったじゃないか」

「問題はそこじゃありません！

チケットも移動するための用意も、どうやって準備するつもりですか？」

アテネの反論に俺は黙るしかなかった

勢いで言ったものの、つまりはそういう事なのだ

バイクや車は子供の俺には論外だし、かといってバスでの移動は時間がかかりすぎる

「はあ、なら使いますか？ジュエルシード」

そうだよな、使っしかないよなジュエルシード……ん？

「ジュエルシードを使う？」

聞き返した俺は何の間違いもしていないはずだ

「はい。連夜さんの腕につけたそのブレスレットはジュエルシードを三つまで封印できるアイテムであると共に、連夜さんの体に流れる魔力を封印したジュエルシードに吸収させる能力もあるんです」

と胸を張っていうアテネだがいや待て待て

「ジュエルシードは封印してるんだろ？
なんでそれが使えるようになるんだ？」

「原作でもプレシアさんはジュエルシードを使っていたでしょう？
つまり、ジュエルシードは封印したといってもデバイスなどに収納されるだけで、使うことはできるんですよ
ただ、なのはさんの場合は使う理由がない。フェイトさんの場合は母であるプレシアさんに献上する物なので使う理由がないんですよ」

アテネはやれやれと首を振ってそう答えた

「ちなみにジュエルシードは願いを叶えるロストロギアですから、
その願いを叶える為にはジュエルシードに魔力を吸わせなければいけません」

プレシアさんは自身のSクラスもある魔力を吸わせました
だから次元震が起こるほどの力が生まれたんですよ」

「つまり俺の場合は魔力量EXだから、その魔力を吸ったジュエルシールドは……」

アテネの判り易い解説のおかげで、俺は簡単に結論にいたることができた

そう、つまりそういう事なのだ

「お考えの通り、かなり物理法則を無視した願いでも叶えられますよ？」

ド　ールのように死者蘇生とまではいきませんが……」

「心配するな……んな事はわかってる

エターナルが完全なものになればそれは解決できる」

アテネはそれを聞くと「そうですか」と言って部屋の奥に行った

「なあアテネ、ジュエルシールド一個につき叶えられる能力は一個なのか？」

「そうですよ」

部屋の奥からそんな声が聞こえてきた

「さて、ならどうやって願いを使うか……」

俺は自身の左腕に付けているブレスレット、それにまるで宝石のようにはめ込まれている二つのジュエルシールドを見た

叶える願いは二つ……一つはまず問題のチケットで……もう一つは移動

手段…

「アテネくお前確か外では大人モードにはなれないんだよね？」

奥まで聞こえるようにと叫んだのだが、アテネは「はいはい」と言
いながらこちらに戻ってきたのだ

リュックを持って

「行く気なんかい…まあいいや
で？どうなんだ？」

「まあ、この家のように魔力がかなり満ちてるような場所なら問題
ないんですが…この世界は思ったより空気中の魔力量が少ないので
…少しの間しか耐えられません」

アテネは申し訳なさそうに手を顔の前で合わせた

「いや、分かった

ならこれで叶える願いは決まったし」

「へ？」

アテネがキョトンとした表情をしているのを見ながら、俺はジュエ
ルシールドに願いを伝えた

「ジュエルシールドよ…我が願いを叶えよ…」

その瞬間、二つのジュエルシールドが青々と輝きだし、部屋全体に膨
大な量の魔力が溢れた

「まずひとつ、高町なのは達が今日行くはずの温泉旅館の無料チケットを二枚出せ……で二つ目だが、二つ目はこの温泉旅館からこの家に帰ってくるまでの間、アテネに俺の魔力を供給させる」

「なっ!?!」

アテネは驚いた表情を見せるよりも早く、二つのジュエルシードは願いを叶えるべく部屋全体を包み込むほど強力な光を発した

「うまく行ったか?」

光が、収まり、部屋を見渡した俺はゆっくりとあたりを見渡した

すると、ヒラヒラと天井から二枚に紙が降ってきた

「これは、チケットか」

その二枚の紙にはしっかりと目的の旅館の無料宿泊券という名目が書いてあった

「発行元も書いてある……まあオールマイティパスと思えば良いか」

一人内容を見ながら呟いていたが、アテネの姿が見当たらない

「あれ?アテネ?」

「どこです……」

ふと頭の上からアテネの声が聞こえた

なにやら上に乗っている感覚もある

俺は頭を下ろした

すると、人形モードのアテネが落ちてきた

「何やってんだ？」

俺が呆れながらそう言つと、「あなたが私に魔力を供給するからです！」といわれた

「どゆこと？」

「つまり、今の私とあなたは使い魔と主の関係になつたんです！あの大人モードはここであるには力が強すぎるのでこの姿になつたんです！

心配しなくても外ではなれますよ…大人モードに」

なにはともあれ、アテネの方も無事にできたようだ

俺のブレスレットを見ると、ジュエルシールドは輝きを失い、封印した当初のように只の石のようになってしまっていた

「よし、じゃあアテネ、お前が俺とはやてを連れて行く移動係だよろしく頼むぞ」

「そんなことだと思ひましたよ……分かりましたその代わり、帰ったら抱き枕になってくださいよ？」

アテネがなかなかの要求をしてきたが、目的の為にもやむなしと、俺がそれを了承した

こうして、俺ははやくと共に温泉旅館に行くことになるのだった

第十二話（前書き）

遅くなりました

温泉編です

物語がなかなか進みません（泣）

頑張ります

第十二話

「うは、おつきいとこやなあ」

眼前に広がる旅館を見上げ、はやてが驚きの声を出した

俺はそんなはやての表情を見て、連れてきて良かったと思えた

「はやて様、こちらに……お荷物を御降ろし致しますので……」

はやてが「おおきに」と言ったのを確認しながら車椅子を押しは
やてを移動させた大人アテネ

きっちりとしたスーツ姿はどこか凜とした印象を与えた

アテネはそのまま車のトランクに積んでいた荷物を降ろしていく

はやてはまだ旅館の外観を見て楽しんでいる

「そんなに嬉しそうな顔をされると連れて来たかいがあるよ」

「ほんまありがとうな連夜君、感謝してるで」

はやては俺の方向を見ながら暖かい笑みを見せてくれた

「それとえつと、あの人の名前はなんて言っん？」

「ああ、あの人はアテ……」

そこで俺は言葉を止めた

いや、少し遅かった

アテまで出てしまったのだ

「あて？」

案の定はやては俺に聞き返してきた

ふと本人であるアテネもこちらを見ている

『アテネはやめて下さい！』

『わかってる！』

念話でそんな会話がされているとも知らず、はやては可愛い顔で俺を見ている

こうなったら自分のネーミングセンスを頼るしかないと思い、俺はとっさに出た名前を口に出していた

「あ、宛無アテナシさんだ」

思わずアテネがずっこけるのが見えた

はやても目を丸くしている

やはり宛無なんて名前は不自然すぎたか……

「へえ〜宛無さん言うんですか…変わった名前ですねえ」

今度は俺がずっこけた

はやては「どないしたん？」ときよとんとした顔で言っていたが、いやはやはやての天然に助けられたと今は思っておこう

「そ、そんなんですよ〜、いろんなお客様から言われます。変わった名前ですねえ〜って」

そう言つてアテネが一瞬こちらを睨んだ

「なんなんですか宛無って!?!」

「………すまん」

はやてはくすくすとアテネが言っていたことに笑っていたが、俺たちは「ハハハ」と渴いた笑いしかできなかった

あれからすぐに中に入った俺たちは、外観とまた違う内装の美しさに驚いた

なるほど、これならばあれほど外観を立派にしてもつりあうと言つものである

受付でチケットを渡す際に少しばかりヒヤツとしたが、そこはやはり魔力で作ри出した物、あっさりと二つの部屋を用意してくれた

ひとつは俺とはやての部屋、もうひとつは宛無の部屋と言う名目で取られた部屋なのだが、本人であるアテネが『認識阻害かけて一緒に寝ます!』と言ったので、実質この部屋はただの空室になりそうだがアテネには俺達の運搬係としての役と、もうひとつ役職を与えていたそれがはやての補助係である

はやてはどこに移動する際にも車椅子だ

トイレや少々の移動なら問題ないだろうが、温泉などに入るとなると話は違ってくる

せつかく温泉旅館に来たのだから温泉にはやても入りたいたはずだから俺はアテネにそれを頼んだ

そうすることで、はやての注意を一時的に俺から外す事ができる今回の一件も本来はなのはとフェイトの邪魔をするためだ

少しでも自由に動けたほうが色々都合がいい

二人が既にここに来ているのはこの旅館内に漂う魔力の気配で探知できる

ユーノにも連絡を取ったので、来ていることは間違いなのだ

「でもほんま夢のようやで

うち絶対こんな綺麗な旅館で温泉入れるなんて思てんかったもん

ほんまありがとな連夜君、宛無さん」

部屋に行くまでの道中、はやては目を輝かせながらそう言っていた
やはり連れて来て良かったと思う反面、自分の目的の為に同行させた
たような気がして少し罪悪感にも駆られた

『まあ、八神が喜んでいるなら良いか』

そう自分に言い聞かせることで、少しばかり自分の罪悪感が軽くなる
ような気がした

「そんなに喜んでくれちゃちょっと照れるな

俺も行く相手がいなかったんだ、礼を言うのはこっちだよ、八神」

そう言っただけでなく、笑顔で笑いかけたらはやての顔が赤くなった

あれ？またフラグ立てた？俺……

決して俺は無自覚ではない……だが、惚れられるようなことを何もし
てない為に、俺はちんぷんかんぷんだ

『人それを無自覚って言うんですよ？』

『マジでか!?!』

アテネに突っ込まれて思わずガチツッコミを入れてしまった

『まあ、しかし、一時は倒産寸前までなっていたのに……こうして店
の売り上げで家族を温泉旅館にまで連れて行けるようになったとは

…』

『アリスさんやすずかさんは自腹らしいですよ?』

『とうぜんだろ? 奴等あくまで付いて来たみたいなのりだしな』

『なるほど』

そつだ、あいつら二人には金は捨てるほどある

だが、なのは達の家計は一時は間違いなく火の車だった

だが今は……そう思えば、あいつに嫌われてでも土郎さんに唸ったのは間違いじゃなかったな

ある意味自分の中での逃げのような気もするが、まあそれで良いだろう

今なのはは少なからず幸せだ……

「ほなまた後でな連夜君」

「こちらはお任せください」

宛無……アテネはぺこりと頭を下げると、はやての乗る車椅子を押しして温泉浴場まで向かっていった

「やっど……」

俺の片手には風呂の用意が一式入っている

俺も今から温泉に向かうわけなのだが……

「さあ、行こうよユーノ君」

「キユーキユーキユー！」

やはりここで待ってれば来ると思った

俺は物陰に隠れ、その声が近づくのを待った

「ちよつとなのは！あんた歩くの早いつて！」

「そんなに急がなくても、温泉は逃げませんよなのはちゃん」

「むう〜だってユーノ君が逃げようとするんだもん〜」

そんな事を言いながら俺の前を横切る三人組みが居た

三人は俺の事など意に介さないように素通りしていった

と言っても、俺は隠れているので意に介す介さないは無いのだが……

やはり、ユーノが女湯に連れて行かれようとしていた

此処はやはり奴を助けておこう

久しぶりにゆっくり会話もしたいしな

『ユーノ、俺の声が聞こえるな?』

『連夜!?!今どこに居るの?お願い助けてよ!』

『落ち着け、とりあえず無理やりにもその場から逃げ出してすぐの角を曲がれ』

『分かった!』

直後、遠くから「キューキュキュー!」と小動物の音が聞こえてきた

そして、それから数秒後くらいにイタチのような小動物が俺の前に現れた

『急いで、なのは達が来る!』

ドタドタと音が此方に近づいてくる

今下手にあいつらと鉢合わせは不味いし……

ふと前を見るとほぼ目と鼻の先が男湯だ

だったら……

「ユーノ……あれ?」

彼女達が来たときは既にその場に俺の姿は無かった

いや、正確にはまさに男子風呂の暖簾を潜ろうとしている俺の後姿

を見たつてところだろう

「あの！」

と、声を掛けられたのは予想外だった

顔を見せたくないの、少しだけあいつらに顔を向ける

「ここら辺で……へ？」

なのはの様子がおかしかった

少しばかり驚いた顔をしていた

まさか気づかれたか！？

『ガララララ』

「あっ！」

俺はなのはの言葉を聞かず、そのまま男湯の入り口に入って行った

『危なかったね……』

『いろいろとな……』

風呂の用意の中に隠れていたユーノがひょっこりと顔を出した

お互い疲れた顔だった

ともかくこのままイタチ…フェレットを温泉に入れるのは如何な物かと思つた俺は、とりあえずそのままトイレの個室に向かつた

『どうしたんだい？連夜』

「とりあえず、お前の姿を一時的だが元に戻すちよつと待つてろよ」

俺はユーノを片手に、もう片方の手を上に掲げた

「吸魔の印……」

白騎士物語の魔法吸魔の印を使った

その瞬間、俺の掲げた手には多くの魔力が集まつて行つた

『凄い魔力量だ！それに、見たこと無い魔法だ…』

ユーノは純粹に今起きている事に驚いていた

「吸魔の印…魔力を吸い取つて自分か他者の魔力を回復させる印さ…ほら、これくらいあれば少しは人間態になれるだろ？」

俺は印の解説をしながら、大気から吸収した魔力をユーノに与えた瞬間、ユーノの体が光り輝き、その体が人の体形をとつた

「凄い…まさかこつちの世界で戻れるなんて…本当に君は凄いな連夜」

「いやなに、良いつて事よ…ちなみに言つとくと、お前自分のその正体高町に教えてないだろ？だから女湯に連れて行かれるんだぞ？」

俺は言うだけ言つて返答を待たず外に出た

子供とは言えトイレの個室に二人つきりはまずい

「え？でも確か…ああ！」

直後、後ろにはやってしまったと言つた顔をしたユーノが居た

「ふいゝ極楽極楽」

「はは、なんだかおじさんみたいだよ連夜」

そんな事を言いながら俺達二人は温泉に入っていた

しかも今は露天風呂

景色も美しく、気温、湯加減共に最高だった

「いやゝやっぱ風呂は気持ち良いな」

「本当だね、僕は最近はずっとフェレットの姿だったから、人の姿になるのも久しぶりだよ」

まあ実質ユーノの人型を見たのも、俺と始めて会ったあの日以来だったしな……やっぱ女みたいな顔してるな

「連夜今失礼なこと考えたでしょう？」

ユーノが暗い目で俺を見ていた

なんでこの世界の奴らは読唇術に優れているのやら……

「気のせいだろ？んな事思ってたねえよ」

本当はバリバリ思いましたけどね

「まあ良いけど……たぶんこの僕の顔の事だと思っし……」

中々するどいと賞賛するよユーノ

なんやかんや言いながら俺達は露天風呂を楽しんでいた

そんな時だった

「父さん、やっぱり綺麗な景色ですよ」

「気温もそれほど寒くない…確かにいい露天風呂だな」

高町家族の唯一の男組

高町士郎さんと恭也さんが露天風呂に入ってきたのだ

「君は！」

「……」

そして、俺が何の行動を起こすよりも早く、俺は土郎さんと恭也さんに発見されてしまった

「…………お久しぶりですね…土郎さん、恭也さん」

俺はまあこの二人には会っても構わないと思ったために、下手なことせずその場に残ることにした

はたしてこれが吉と出るか凶と出るか……

「確か…………」

「大道連夜です…土郎さん
横に居るこいつは俺の友人のスクライアです」

「え？あ…スクライアです…はじめまして」

ユーノが遠慮気味に頭を下げる

と言ってもユーノに関しては初対面ではないのだから、なんともおかしな状況だとは思うのだが……

土郎さんも恭也さんも、俺との突然の再会に少し戸惑っているようだった

今まで何をしていたのか？そんなことを聞かれるのかと思っていたが……

「君には、我々はいくら謝っても許してもらえないだろう」

それだけの事を我々は君にしてしまった」

「本当にすまない……我が家の間違いも、なのはの事も、君が救ってくれたのに……俺たちは君に何もしてやれなかった……」

心痛な面持ちでそう言った土郎さんと恭也さん

はつきり言っただけは俺は言われている言葉の意味を分かっていたいなかっただからこそ言葉が返せなかった

「……高町の事を言っているなら、別にお二人が謝ることじゃありませんよ

土郎さんも恭也さんも、何も悪いことをしていたわけではありませんんから……」

時々あいつの姿を見かけますが、新しい友人も出来たみたいで、幸せそうじゃないですか……」

俺はあくまでイレギュラーな存在だったんです
ですから、別にお二人が気に病む必要はありません」

そう、この言葉は自分にも言い聞かせているような言葉だった

俺の存在はイレギュラーな存在なのだ

あいつには今友達が居る……俺は必要ない

「それは違うぞ連夜君……あの子は……なのはは君にしてしまったことを心から悔やんでいる

確かに今のあの子は幸せそうな表情を浮かべている
だが、時々見せるのだよ……とても悲痛で辛そうな表情を……」

「以前母さんがなのはにその理由を聞いたんだ
すると、はつきりと口にはしなかったが、あの子に会い、あの子に
助けられたのに、自分がしたのはあの子を傷つける事だった
自分は謝らなければいけない……許してくれなくても、罵られても、
自分をあの子に謝らなければいけないと……
なのは君の事を決して忘れてなどいない……俺達が君に偉そうに
何かを言えた義理じゃないのは百も承知だ
だが、なのはが君の事を思っている……それだけは忘れないでくれ……
……」

恭也さんも、士郎さんも、小さくだが俺に頭を下げた

俺はすぐに答えを出すことが出来なかった

なんとかしてようやくだした答えが「自分の気持ちの整理がついたら、俺からまた高町に会いに行きます
だから、それまではこの場で俺に会った事は、内緒にしてください
さい」

二人はそれを了承してくれた

俺はその場に居ずらくなったので、ユーノを連れて風呂から出た

第十二話（後書き）

次回はようやく戦いです（泣）

第十三話（前書き）

ひじょうに遅くなってしまいました

本当にすみません

温泉編中盤です

第十三話

温泉からあがった俺とユーノ…しかし、そんな二人の間に少しばかりの気まずさがあった

「君だったんだね？なのはが言っていた傷つけた人って言うのは…」

「ユーノ…すまん

今は何も言わないでくれ……」

俺は目の前の出来事から目を背けようとしていた

なのはがそんなことを思っていたなんて、考えたこともなかった

アリサとすずかの存在で安心していたのもあるだろうが……どこかでなのはに後ろめたい気持ちを持っていたのかもしれないな

それに気づいたところで俺は何も実行しない

やっと面と向かって会うのはあの日だと心に決めてある……なんて適当な理由をつけて俺は逃げてるだけなんだよな…きつと

「うん…わかったよ

でも、その気になったらいつでも僕に言ってよ
いつでも僕は連夜に協力するから……友達だろ？」

そのユーノの笑顔が何よりも眩しかった

無駄に輝いて見えた

「ありがとな…ユーノ」

言葉と共に二人の拳を『コツン』と付き合わせる

お互いには何も言わず、その場を去っていった

ユーノは出た瞬間フェレットの姿に戻っていた

「さて……」

気を締めなおそう…どだい奴にはすぐに会うことになる

今の格好は旅館が用意してくれた青い浴衣を着ている

エターナルメモリを懐に入れ、俺は旅館の庭に向かった

フエイトside

「ふう…」

アルフと分かれた私は、旅館の庭にあった大きな木に腰掛けて空を見上げていた

綺麗な月だった

まるで穢れをしないような、それでいてどこか神秘的な感覚を感じ

させる……そんな時だった

「おやおや…今日は月が綺麗だと思って外に出たら……かぐや姫もびっくりの美人さんに会えるとはな……」

後ろからそんな声が聞こえた

私はあわてて振り返ると、そこに居たつい最近知り合ったばかりの男の子が居た

「連夜？」

なぜここに居るのか？と言う問いよりも先にそんな言葉が出たしまった

「お、名前覚えてくれてたんだ…嬉しいぞ…テストロッサ」

彼は笑顔でそう言っていた

なぜかその笑顔に胸が締め付けられる

顔も熱くなるし、どうしちゃったんだる私…

「こんなところで会ったあ奇遇だな…テストロッサは家族で来たのか？」

一人考え事をしていたら連夜がそんなことを言ってきた

「へ？あ、ああそうだよ…連夜は？」

「俺は最近仲良くなった友達とだよ俺に両親は居ないからさ……」

「ご、ごめんなさい！私また……」

またやってしまった

彼の両親は居ないと分かっていたのに、また彼を傷つけるような事を言ってしまった

でも、彼は怒ってなかった

それどころか、笑って私の頭を撫でてくれた

「気にすんなって言ったろ？俺は気にしてないから、大丈夫だよ」

彼の手はとても暖かく、そして優しくかった

もう少しこのままで……なんて事を思っている間に、彼の手は私から離れてしまった

「話は変わるが、ここに来る前に変な石を見つけたぞ？」

「えっ！」

自分で言っただけで慌ててその口を手で押さえ込む

「？」

なんだ？お前の大事なもんだっただけか？

変に青色に光ってたからよ……不気味に思っただけのままにしてたん

だが……」

幸い彼は気づいていないみたいだった

「そ、そうなんだ……ここに来る前に落としちゃって……どこにあったの？」

彼が「アッチ」といって場所を指差す

私は「ありがとう」と言っつてその場を後にした

彼が見つけたのは、間違いなくジュエルシードだ……

side out

「やれやれ……少しあからさま過ぎたか……」

フェイトが行った先を見ながら、一人そんなことを言っていた

しかしなあフェイト……あの驚き方は嘘ついてるって丸分かりだつて……

んな事を気にする余裕もなかったかい？

まあなんにしてもだ

これで三つ目のジュエルシードが揃う

俺の腕に輝く二つのジュエルシードも仲間を欲しているかのように光っている

近くで強大な魔力反応を感じた

其処に小さな魔力反応が四つ

間違いないクフェイトやなのは、アルフとユーノだと判断した

『アテネ……聞こえるか?』

と言つか聞こえてくれなければ色々と困るのだが…

『はいはい』

どうしましたか?連夜さん』

どうやら心配は無用だったらしい

『今からジュエルシードを回収しに行く

一ドンパチあるだろうから結界とはやての護衛を頼んだぞ?』

『はいはい、了解です

あと30分程で晩御飯ですから、それまでには帰ってきてください
ね』

お前はお母さんか!?!と思わず突っ込みを入れたくなったがそこは
我慢我慢

『了解した…』

それだけ言って念話を強制的に切った

自分で通信しておきながら…と内心想っていたが、気にしたら負け
と思いきえるのをやめた

「さあ…行くか……」

浴衣の懐から『E』の刻印の入ったメモリを取り出す

『E t e r n a l』

機動スイッチは夜の闇夜に静かに響き、腰にはロストドライバーが
巻かれた

「変身！」

『E t e r n a l！』

勢い良くメモリをスロットに突き刺し、展開する

純白の粒子が体を包み、体を変えていく

次の瞬間、俺の変身は完了していた

「さあ…行くか」

勢い良く地面を蹴り、俺は戦いの場へ赴くのだった……

ユノside

『なのは！』

「デイベインシューター……」

彼女の声に導かれるように、その周囲に四つの桃色の球体が現れる
それは彼女の周囲を周り、次の指示を待っているようだった

「余所見してる余裕があるのかい？」

聞き慣れない女性の声と共に、僕は小さな体で横に飛んだ

「ちっ！」

僕が先程まで居た場所は彼女が振り下ろした拳の威力で小さなシューターが出来ていた

思わず背筋に悪寒が走る

「シューター！」

なのはの声に待ってましたと言わんばかりに球体達は金髪の魔導師
に向かっていく

しかし、まだ単調な動きしか出来ないそれは、彼女には止まって見
えるようで、まるで当然のことのようにそれを回避した

「っ！」

まだ追尾性能を持たせていないため、シューターはそのまま彼女を
通り過ぎ、爆発した

「やあああああ！」

敵はなのはに休息を与えなかった

先程まで杖のようになっていた彼女のデバイスは鎌のような姿になつており、なのはに切りかかった

「くっ！」

『プロテクション』

なのはが前に手を置き、そこを中心に彼女を守る魔法の障壁が生まれる

敵はそんな事はお構いなしと言わんばかりにデバイスを振り下ろした

『バチイイイ！』

なのはの張った盾と、敵の鎌が衝突し、火花を散らす

「余裕じゃないか！」

「なっ！」

戦いを見ていた僕に、もうひとりの敵（彼女は使い魔って言ったっけ）が僕に拳を振り下ろした

『くっ！チェーンバインド！』

「なっ！しまった！」

僕の手から伸びた鎖が彼女を拘束する

なのはと戦っている敵の方にも出来れば使いたかったけど、そこまでの余裕が僕にはなかった

『悪いけど…じっとしていて!』

「きいいいい! イタチのクセに偉そうに!」

『なっ! この姿はフェレットだよ!』

自分で言ってるそんな事を言ってる場合じゃないと想った

なのはの方は、敵と一旦距離をとり、大きな魔法陣を前に展開させていた

『なのは…あれを使うんだね』

僕と必死になって練習した新しい技を…

「きいいいい! 邪魔くさいね!」

そんな思いに敵は浸らせてくれないらしい…

チェーンバインド自身に罅が入り始めていた

気を抜くと本当に壊される

「お願い当たって……ディバインバスター!」

魔法陣から一筋の太い桃色の光線が放たれる

それはあの金髪の魔導師に向かって一直線に飛んできた

だがダメだ…スピードが遅かった

「っ！当たるわけにはいかない！」

敵は上に上がって光の光線を回避した

なのも驚いていた

いや違った

彼女は不敵に笑っていた

このときを待っていたかのように

「今だ！レイジングハート！」

『オーライマスター！』

彼女の言葉と共に、レイジングハートの姿が変わる

『あの姿は…！』

「しまった！バルディッシュ！」

『了解マスター！』

敵の彼女もなのはやるうとしていることに気付いたのか、自身の
デバイスを再び変形させる

そして、二人が次の行動を起こすのはほぼ同時だった

「リリカルマジカル…」

「ジュエルシード…」

「封印！」

二人の声が一つに重なり、お互いのデバイスから一筋の光が放たれる

光の速度はややなのはの方が早い

『やった！』

僕はなのはがジュエルシードを手に出れると確信した

だが…

「ところがギッチョン！」

夜空にそんな声を響かせながら、ジュエルシードに向かっていた二
つの光を何者かが打ち消した

その人物は僕の良く知る人物で…僕のもう1人の協力者だった

side out

『バチン!』

片手でジュエルシードに向かってきた二筋の光を打ち消した

なのはもフェイトも驚いた表情をしている

いや、フェイトはやや安堵しているようだ

当然か：俺が来なければ今頃なのはに奪われてただろうからな

「あ、あんたは!!!」

驚いている二人に変わり、ユーノのチェーンバインドに拘束されたアルフがそう言った

「悪いがこのジュエルシードは俺が頂く」

「ご丁寧に自分の目的を言ってやった

途端に空気は臨戦態勢の状態になる

あれほどの實力を見せつけられてはまだフェイトもなのはも俺と戦おうとしているらしい

馬鹿を通り越して滑稽だった

思わず笑ってしまう

「ジュエルシードは渡さない!

フォトンランサー！」

フェイトが切り込み隊長だった

雷の矢が俺に向かって飛んでくる

「マナシールド…」

俺に被弾しそうになった雷の矢は、突如俺の前に現れた障壁にかき消されてしまった

マナシールド…白騎士物語に登場する神聖魔法の一つ

本来の能力は魔法攻撃を緩和させる魔法だが、俺の魔力で張られたこれは、そこそこの魔法攻撃なら完全に防いでしまう代物になっていた

「！」

フェイトは自身の攻撃が防がれた事に驚いた様子だった

上には上がいるっての…

「俺は無駄な戦いはしたくない…
この俺を今見逃せば…もう俺はジュエルシードを集める必要がなくなるんだぞ？」

「

俺の言った言葉の意味はどうかやら上手く伝わらなかったようだ

「意味が分からんか？
俺のジュエルシードを封印しているこれは、ジュエルシードを三つ
までしか封印出来ない」

俺の腕に装着されたブレスレットを指差し、それを見せた

「今封じられているジュエルシードは全部で二つ
つまりこのジュエルシードを封印すれば、俺はジュエルシードを封
印するすべを失い、このジュエルシード争奪戦からリタイアすると
言うことになるわけだ」

「「!!」」

ようやく二人は俺がどれほどの事を言っているか理解出来たらしい

「どうだ？君達にとって得しかないだろ？
私の力を君達は充分理解しているはずだ
私と言う存在がいなければ、あとの敵はそこにいる君達自身だ
どうだ？見逃した方が得だろう？」

最後に「まあ邪魔はするかもしれないが」と付け加えて、俺はジュ
エルシードに手を伸ばす

視線はなのは達の方に固定

手だけをジュエルシードに伸ばした

「まっ……」

フェイトが一瞬こちらに向かってこようとした……が、既に俺の手

はジュエルシードのコアを掴んでいた

「一步遅かったな……ジュエルシード……封印！」

瞬間、俺も含めて、あたり一面が眩い光に包まれた

「わわっ！」

「うわっ！」

二人の魔導師…正確には三人の魔導師と使い魔一匹が光に呑み込まれる際そんな声を出していた

一瞬目の前が真っ白になるかのような眩い光は徐々に終息していき、次第に視界が回復してきた

俺は手元のブレスレットを見る

其処には、三つに光り輝いた青色の宝石があった

「封印…完了」

自分で自分の顔は分からないが、恐らく俺は嫌な笑みを浮かべているだろう

「ああ……」

フェイトが心底落胆したような声を漏らしていた

「礼を言おう…これで私はジュエルシードの争奪戦からは脱退する

私と言う脅威は消えたわけだ
完全ではないがな……」

さて…と付け加えて俺は辺りを見渡す

幸いアテネが張ってくれた結界のおかげで実際の世界に支障はなさ
そうだった

むしろいくら暴れても問題は無かろう

フェイトもなのはも構えは解いている

これから俺が出す提案にどのように応じるのやら…

「俺と言う脅威が薄れた今…残った脅威は其処にいるお互いだけだ
さて、そこで俺は今日ここでそのもう1人も脱退させる方法を掲示
してやるう」

二人が途端に表情を変える

いったい何を言い出す気なのか興味津々と言った所のようだ

ユートは……何か気付いているのかじつところちらを見ている

アルフはいつの間にかチェーンバインドから抜け出し、フェイトに
「そんな奴の言うことに耳を貸しちゃダメだ」と訴えかけている

まあ実質俺の提案を受け入れても結果は変わらないのだが、少しは
物語に沿わせないと……

「ここで互いに持っているジュエルシードを一個ずつ賭けて勝負をすればいい」

少なからず勝てばどちらかにジュエルシードが手に入る

それに、圧倒的な実力の差を見せられれば、負けた相手はこんな戦いから身を退くかもしれない

どうだ？お互いに悪い話ではないと思うが？」

俺の長々しい説明に、いの一番で返答したのはフェイトだった

アルフが驚いている

「でも此処で勝てば、あの子には諦めてもらえるかもしれない」

それがフェイトの言い分だった

なのはも遅れて参加の意を示した

ユーノは止めない

ただなのはを激励し、俺を見つめていた

恐らく、ここでなのはが勝てば後顧の憂いも絶てると思うものだ

だが、本心は恐らく、俺が何故なのはを危険な目に合わせるのかという真理を確かめているのだろう

「ではお互いに同意と言うことだな？」

最後通告にも二人は黙って頷くのみだ

「フェイトが負けるはずないよ！」

アルフが彼女の後ろからそんな声援を送っていた

『なのは…頑張っつて』

フェレットの姿の為にその表情は分からないが、恐らく彼はなのはに笑いかけているのだらうと思う

「では……始め！」

言うが早いか動いたのはフェイトだ

バルディッシュをザンバーフォームに変形させ、一気になのはに切りかかる

なのはもまたそれをレイジングハートで受け止める

直後、フェイトの背後に桃色の魔法陣が二個展開される

「シュート！」

ディバインシューターが背後からフェイトを狙う

なのは自体はレイジングハートでバルディッシュを上にはじき、後方に距離をとっていた

体勢を崩されたフェイトはそのままシューターの餌食かと思われたが、いまだ制御が曖昧なシューターが当たるはずもなく、直線的な軌道故に避けられてしまった

「っ！」

なのはがバインドに捕まっていた

恐らく回避したフェイトがやった物だろう

両手足を拘束されて空中で金縛りにあったような状態にされていた

「フォトンランサー！」

数本の雷の矢がなのはに飛ぶ

『プロテクション』

レイジングハートが直ぐに障壁を張った

が、一本ならまだしも、数本一気に降り注いだ雷の矢を防ぐ強度を、この障壁はまだ持ち合わせていなかった

「キヤアアア！」

障壁が破壊され、バインドも解けて地上に落下するなのは

彼女が立ち上がろうとした時には、その喉元にバルディッシュの切っ先が向けられていた

俺の予想していたとおり、なのはの完敗だった

『リリース………』

直後、レイジングハートから一つのジュエルシールドが排出された

「レイジングハート!?!」

相棒の思わぬ行動になのはは驚いた

「きつと、主人思いのいい子なんだよ」

フェイトはバルディッシュにそのジュエルシールドを回収させながら、そんな事を言っていた

「これに懲りたらもう私達に関わらないで……」

冷たく、悲しそうにフェイトはそう呟く

その表情には間違いなく謝罪の念が込められていた

「諦めない……私、諦めないよ！
まだちゃんとお話してないもん！
だから私諦めない!」

なのはは気丈にそう言う

「私の名前は高町なのは！
あなたの名前は？」

ゆっくりと離れていくフェイトに、なのはは名を告げる

「フェイト……フェイト・テストロッサ……」

顔を向けることなく、彼女もまた名を告げた

その顔はなぜか俺に向いていた

「次は……あなたのジュエルシールドを貰います！」

バルディッシュを再びザンバーフォームにし、フェイトは俺を睨み付けた

「おいおい…君は馬鹿か？」

思わず本音を口にした

俺の実力を決して知らないわけではないだろうに……なぜこの気に及んで俺に向かってこようとするのか？

「私が君と戦ったのはジュエルシールドを得るためだ
そうでなければ君のような者と戦う気はない」

「それなら、私には貴男と戦う理由があります！」

バルディッシュを構えるフェイト

どうやら本気らしい

アルフもなぜかこう言うときはフェイトの意見を尊重する

主に逆らえない使い魔の定めか…なんというか

それが間違った判断だといつ気づくのか…

考えるだけで頭が痛くなりそうだった

「なら……今一度分かせてあげよう

お前と俺の圧倒的な差を……」

「ハア!!」

俺が構えをとると共にフェイトは突っ込んできた

単調な攻撃だ

よくこれで勝てると思ったものだ

上から振り下ろされたバルディッシュを右手で去なし、左手でフェイトの首を掴んだ

「ぐう!あぐつ!」

苦しみの顔を上げながら、フェイトは足をばたつかせ、片手で俺の手から逃れようとしていた

が、そんな事をさせる俺ではなかった

「ソウルゲイン……」

俺は白騎士物語に登場する精霊魔法ソウルゲインを使った

「あああああああ!」

直後、フェイトの体に電撃が走る

そして、フェイトの体から白い球体が次々と現れ、俺の中に入っていった

そう…俺はフェイトの体力を吸っているのだ

「あああああああああああああああああ！」

苦痛に悲鳴を上げるフェイト

アルフが駆け寄ろうと走り出す

「ファイヤーボール…」

俺は余っている右手をアルフに向け、彼女の足下に炎の球を打ち出した

「あ……あ……あ……」

フェイトは遂にバルディッシュを落とし、両手をだらんと下げた

体力の吸引もそこで終わった

まだ息はしている

何も死ぬまで体力を吸ったわけではないからだ

しかし、フェイトは既にムシの息も同然だった

「ほらよ」

そのままフェイトをアルフに投げる

「フェイト！……………お前……………よくも……………」

怒りに震えるアルフが今にもこちらに襲い掛かってきそうな状態だった

「貴様よく考えて行動しろよ？」

貴様が俺に戦いを挑むのは勝手だが、結果は見えてる
貴様の主と同じ結末を辿るだけだ

もし貴様がそうなった場合、貴様はどうやって主を介抱するつもりだ？」

俺の指摘にアルフは表情を歪める

正論だからこそ反論出来ない

また、アルフはこんな状態のフェイトをほって戦うほど愚かでないのも分かっていた

「くそ！くそ！くそ！」

アルフは悔しそうにそう言いながら、その場から転移していった

「どつして……………」

なのはが俯きながらそんな事を言った

「貴様もやる気か？」

白き魔導師……」

「どうしてあんな酷いことが出来るの!？」

どうしてあんな……」

「言いたいことはそれだけか……」

俺は彼女の前に手をかざし、魔力をその手に集めた

「スリープ……」

水色の霧のような魔力が俺の手から放たれ、彼女の顔を包んだ

「あっ……うう」

そのまま彼女は崩れ落ち、眠ってしまった

支える物が何も無かった為、俺が支える羽目になったが……

「ユーノ……高町を頼む」

『……分かったよ

連夜……』

なのはをそこら辺にあった気にもたれさせ、俺はユーノに後を託した

「忘れられちゃったな……」

俺はフェイトが落とし、忘れていったバルディッシュを拾った

『何をされても……私はあなたに降ることはない』

「心配するな……何もせずにテストロッサに返してやるよ」

俺はメモリを抜き、変身を解除しながらバルディッシュに言った

『あなたは……Mr・連夜』

バルディッシュはエターナルの正体が俺だった事に驚いているようだった

「俺は約束を守る

必ずテストロッサの下に返してやる

その代わり、時が来るまでは、俺のことはテストロッサには内緒にしておいてくれ」

『了解……』

バルディッシュは冷たくそう告げて自分から待機モードに戻った

そうして俺は、ようやくはやての待つ部屋に帰るのだった

第十三話（後書き）

いやはや、バルディッシュをどうやって返そうか……

今回は少しばかりバルディッシュとはやてとお話して、温泉編を終わらせます

第十四話（前書き）

旅館編終了です

今回は超短いですが、お楽しみください

第十四話

「悪い……遅くなっちゃった」

部屋に入って一番最初にまずそう言った

「遅いで連夜君！うちらで先食べようか思たわ」

はやてが悪戯な笑みを浮かべながら俺を見ていた

その表情に少しばかり安堵しながら、俺はゆっくりと夕食が置いてあるテーブルの前に座った

目の前ではぐつぐつと音を立てている鍋と、皿に盛られた肉と野菜があった

どうやら、今日の夕食はすき焼きらしい

「そつだ、八神

アテ……宛無さんは優しいか？」

まあ会話のネタが無く思わず言ってしまった事だが……もう少しなにかネタを考えるべきだったと思った

「うん！めっちゃ優しいしてもらたで」

はやては笑顔でそう言った

その笑顔が見ただけでも、俺はアテネに感謝しても足りないくらいだった

『礼を言うぞ…アテネ…』

『いえいえ』

念話でそう言い、アテネは笑顔を俺に向けた

「ほな食べよ！

せつかくのすき焼きやねんさかい

はよ食べな罰当たるで」

はやてがまず野菜を鍋に入れ、その後に肉を入れる

すぐに部屋を、食欲をそそる匂いが満たした

すぐにも箸を持って食べたい衝動に駆られたが、そこは我慢

はやてがせつせと準備をしてきている

アテネもそこにいろいろ手伝いをしていた

なんだか仲の良い姉妹のように見えてしまう俺を誰れも責めることはできない筈だ

そんなこんなで夕食のすき焼きはとても美味しいものとなった

十分すぎるほど空腹を満たせたので、はやても俺もアテネもご満悦と言った様子だった

そして時間と言つやつはあつという間に過ぎていくもので、気づけばよい子はもう寝る時間となっていた

二人分の布団のはずが、なぜか一人分しか敷かれていないこの状況
「一緒に寝よ？」と涙目＋上目使いで言われたら断れるはずがない
むしろ男として断ってはだめだ

いつの間にかアテネも人形モードになっていたし、まあ逃げられない状況ってやつで……

ともかくはやてを布団に運び、やさしく寝かす

その横に俺が寝転び、アテネがその俺の横に入る

板ばさみのような状態になりながら、俺達は就寝となった

しかし、はつきり言おう

全然寝れる気がしない

はやてはめちやくちやがつしり俺の手掴んでるし、アテネは本来の定位置である俺の肩付近で寝てやがる

幸い片手は動かせたので、もぞもぞと懐から物を取り出す

そう、待機モードになっていたバルディッシュだ

とりあえず認識障害をかけて、はやてには俺が普通に寝てるように見せておく、これで間違っても起きる事はない

まあ、話し声も聞こえないようにはしといたし大丈夫だろう

「よお、起きてるか?」

話しかけてみたが反応がない

ただの屍のようだ……

『起きてますよ失礼な……』

どうやら起きていたらしい

しかしまあ知ってはいたがあまり感情の感じられない声だな

『私はデバイスですから……』

「いちいち人の心を読むな……」

顔に出てしまったか?と思いつつも、俺は別に気にしなかった

『なぜですか?』

「ん?」

唐突にバルディッシュがそんなことを言い出した

なぜ? Why? 何のことだ?

『あなたはなぜマスターにあんな事を……マスターは酷く体力を消耗していました』

あなたもそれは判っていたはずですが、
なのになぜマスターにあんな事を……』

あんな事……と言うのは恐らくソウルゲインのことだろうな

「戦いを終わらせるにはああするしかなかった」

『あなたがあの場に現れなければもっと簡単に決着はついていました』

俺はこの瞬間、バルディッシュの今の状況を把握した

彼は怒っていたのだ

自分の主人を痛めつけたこの俺に人と同じように怒りを感じていたのだ

「確かにそうかも知れん……だがな、高町とテストロツサが放ったあの光がもしジュエルシールドに当たっていた場合、どうなったか分かっているのか？」

『……………』

無言は肯定ととるべきか無視ととるべきか……面倒な奴だ

「そのまま光を当てていれば、ジュエルシールドが暴走し、巨大な魔力が暴走していただろう……そうなっていた場合、被害を受けたの

は誰でもないお前たちデバイスだ」

『!?!』

驚いた…と言った様子だった

と言つことはあの無言は否定…または肯定ととるべきか……

「まあ特に被害が出ていたのはお前だろうなバルディッシュ……コアまではいかないものの、確実に外装は深刻なダメージを追っているただろうさ

そうなれば、テストロツサは自分を責めるだろうな…自責の念に駆られ、自分を責め続ける

俺はそれから救ってやったんだぞ？」

『しかしそれはあくまでIFの事柄であって結果論ではない…あなたがマスターにしたことをそれで許せと言つのですか？』

バルディッシュの怒りはもつともなことだ

無論俺も許してもらおうとは思っていない

だから答えは「NOだ」と言っておいた

「明日無事に家に帰ったら、テストロツサにちゃんと返してやるただし、俺のことはまだ秘密だ……近いうちに正体を晒すとは思わかな…」

『私がああなたの約束を守っているんですか？』

「思ってるよ……なんせお前はあいつの秘密も誰にも言っていないだろ？」

アリシアの事もな……」

『あなたがなぜそれを！！』

「いずれ時の庭園にも行くさ……テストロッサもアリシアも、もちろんプレシアも……助けてやらんとな」

『……あなたはいつたい何者なのですか？

マスターの事といい、私にデータベース状にはあなたが使うような魔法もバリアジャケットも存在しません

あなたはいつたい……』

「俺は大道連夜だよ……そして世界を破壊する力……エターナルを持つものだ」

俺はバルディッシュにむかって得意げに笑って見せた

ああそうさ……かならず俺が全部救ってやる

もう取りこぼさない……俺の手の届く範囲……俺の大切な人達だけは……俺の手で必ず守る

『Mr・連夜……』

「お、連夜って呼んだな？」

『あなたを信用しておきます……今は……』

「結構だ……さて、寝るか」

俺はバルディッシュを懐に入れなおし、認識障害も解除した

「ん〜」

はやてがぎゅっと俺の手を掴む

「お前も俺の大事な人だ……絶対に守ってやるからな」

頭を撫でながらそんなことを言った

アテネも俺の髪にしがみついている

俺もまたゆっくりと目を閉じながら、次第に広がっていく闇に意識を落としていった…

第十五話（前書き）

少し話をすつ飛ばした感があるかもしれませんが、第十五話です

お楽しみください

第十五話

時間は……恐らく朝だろう

理由は多々あるが、一番の理由は暖かな日差しだ

目をつぶっているから確実ではないが、本来は目の前が真っ暗な筈なのに今は真っ白だ

眩しいと言う表現が一番あっているだろう

容易に窓から日差しが部屋を照らす様を想像することが出来る

まあそんな事を考えているなら早く目を開けるとしよう

「……………」

目を開けるとそこにはまだ寝息をたてているはやてがいた

「スー、スー、スー」

規則正しい寝息をたてているはやてだが

ふと時計に目をやると朝の八時だ

じきに朝飯の時間だろう

アテネを見ると、その姿は既になかった

「ふう〜良い湯でした」

襖を開けてタオルで頭を拭きながら、浴衣姿のアテネが入ってきた

「朝風呂か？」

布団から起き、少しまだ重いまぶたを擦りながら、アテネを見る

「あら、起きてたんですか？」

「なんとも魅力的な姿ですよ？連夜さん」

少し妖艶な笑みを見せるアテネ

半分寝ているために理性も半々な状態なので少し危なかったが、なんとか抑制する事に成功した

「連れないですねえ〜連夜さん」

いい加減キャラを確立しろとツッコミたくなつたが、はやてを起さないといけないと言つ事を忘れていたため、はやてを起すことにした

「おい、起きろ八神」

「ん〜」

はやてを揺すって起こそうとしたが、はやては起きなかった

「八神〜」

「あと五分〜」

はやては眠たそうな、つらそうな複雑な表情をしていた

「八神……………起きねえと……………もう抱っこしねえぞ？」

「起きる！」

瞬間、今まで寝ていた事が嘘のようにはやては布団から飛び起きた

そんなに嫌か？抱っこされないのが……………

「ありがとうな、連夜君

温泉連れてつてもろて……………」

家に着いたはやてはぺこりと頭を下げた

「気にすんなよ八神、俺もお前と行けて楽しかったよ
またどっか行こうな、約束だ」

「うん！約束」

俺とはやては小指同士を絡みあわせ、指切りをした

このまま分かれるのも少しばかり惜しまれたが、いろいろと用も残
ってるので帰ることにした

「じゃあな！八神」

手を振る俺の姿が見えなくなるまで、はやては俺に向かって手を振っていた

まあいちようはやての家の周りには強力な結界が張ってあるから誰も手出しできないし、はやてに触ろうとしたやつが少しでも邪な心があつたら俺に反応が来るようにしてあるから大丈夫だろう……

『さて、転移転移』

家まで一気に空間転移し、俺は久しぶりの我が家に帰ってきたのだ
った

「お帰りなさい」

普段着の白いドレスのような服に着替えたアテネが俺を出迎えた

「魔力は無事切れたか？」

ジュエルシールドの力を使って一時的にアテネと俺は魔力を繋げているのでそれが切れているか確認した

自分ではこれがわからないのだ、困ったことに……

「ええ、切れてますよ大丈夫です」

「そうか、お前にも負担を掛けたな」

アテネの頭を撫でながら俺は彼女を労った

何やかんやで一番働いてくれたのは彼女だからだ

「まあ、あなたの頼みですから……私にできることでしたしね」

アテネは少し頬を赤らめながらもそう言った

なんだか可愛いなあおい

「っと、大事な事を忘れてた
テストロッサにこいつを返さねえとな」

そう言っただけから待機モードのバルディッシュを取り出す

「あら、フェイトちゃんならさつき出かけましたよ？」

空間転移だったんでちよつとおかしいなとは思ってたんですけど……」

そう言いながら徐々にアテネの表情が深刻なものへと変わっていく

俺も彼女の言葉を聞いて徐々に血の気が引いてきた

「まさか……違うよな？」

「解析できました……間違いなく、庭園に向かったかと……」

できれば間違っていてほしいと思った予想が外れていた

というよりもこのイベントはもっと先だと思っていただけに、突然
すぎて驚いた

庭園……てことは、プレシアのDVを食らいに行ったわけかよ……

まだまだ色々足りねえが……行くしかないか

「アテネ、準備だ…時の庭園に行くぞ……」

「了解です」

アテネも俺の真剣な様子を感じ取ったのか、いつものようなフワフワした様子ではなく、きびきびとした様子で準備をした

「いつでもどうぞ」

そう言うアテネを前に、俺は自室から出て着替えてきた

黒いカーゴパンツにベルトを巻き、腰にはダガーナイフが鞘にはまった状態で装備されている

上には背中と左胸の部分に、林檎を突き刺さした剣、それを取り囲む四匹の蛇のエンブレムが描かれた黒いライダージャケットを羽織った

中には白いTシャツを一枚着ているだけだった

その姿はまさにNEVERの衣装そのもの

迫力こそまだ俺が小さな子供の為にあまり無いが、形は本物だった

「さて、行くか…アテネ

バルディッシュ…すぐに主人のところに届けてやる」

「では……行きます！」

アテネの手を握り、バルディッシュを首からら下げた俺は、途端にアテネとともに光に包まれた

光が晴れたときには、俺は時の庭園、その入り口に立っていた

辺りを見渡すが、ほんとうに何も無い所だと思ったのが第一印象だった

「座標ポイント、876C44193312D6993583D1460779F3125…間違いありません」

ふとアテネの姿を見ると、彼女の姿は大人モードのままだった

なぜか聞いてみると「ここは空気中の魔力量が多いので、この姿でも大丈夫なんです

海鳴では魔力量が少なすぎてこの姿を普通にやると私が酸欠のような状態になってしまっ…」とのことだ

前には住居がある

豪華な家だと思えるが、中で行われている事を考えるとそこまでの住居だとも思えない

なんにしても……フェイトを助けに行かねばな…

「アテネ、お前は此処に居てくれ…後でテストロッサ達をこっちによこす

そしたら海鳴の彼女の自宅に転移してやってくれ」

アテネは「了解です」と笑顔で言ってくれた

俺はその笑顔に少し緊張をほぐしながら、時の庭園の中を歩いていった

そしてすぐに、膝を抱えてうずくまっているアルフを見つけた

体は小刻みに震え、少し涙も見えていた

「やっぱり此処に居たか……」

俺の言葉にアルフは非常に驚いた顔をして俺をみた

「あ、あんた……あんたがどうして此処に……」

だが、そう言った直後に、アルフはまた顔を埋めて震えていた

その後ろには、大きな扉が見えた

この中にフェイトが居る

だが、その前に……

「なっ！」

俺はアルフを抱きしめた

ほって置けなかったのもあるし、いくら使い魔と言えど人の姿をしている以上、それは立派な人だ

だからほっとけなかった

抱きしめたのは気分的にだ

「隠していたが、俺は実は魔道士でな…お前達の正体もすぐに気がついた

今日はほら、こいつを届けに来たんだ」

俺は首に掛かっているバルディッシュユを見せる

「そ、そいつは、バルディッシュユ！」

驚くアルフを見ながら、俺は話を進めた

「この奥にテストロッサが居るんだな？」

「っ！頼む…お願いだ…フェイトを…フェイトを救ってやってくれよ！」

アルフは俺にしがみついて嘆願してきた

俺はまたそつとアルフを抱きしめて耳元で言った

「心配するな…お前もテストロッサも、俺が守ってやる」

なぜかアルフの顔が真っ赤になっていたが今はそんな時じゃない

俺は扉の前に手をかざし、魔力を集中させた

「貫け炎弓……フレイムランス！」

直後、俺の手から炎を纏った弓矢が扉に向かって飛んでいった

矢は扉び直撃し、その扉を強引に開けた

「!」

驚きの声を出してこちらを睨み付ける女が居た

プレシア・テストロッサ…フェイトの母だった

その娘であるフェイトが、彼女の横で傷だらけになりながら倒れていた

プレシアの手には魔力で生成されたと思われる鞭、明らかな虐待行為の現場だった

「フェイト!」

悲鳴のような声を上げて彼女のもとまで飛び出し、抱きかかえたのはアルフだった

プレシアはずっと俺を睨み付けている

「うっ…ア…ル…フ」

弱弱しい、今にも折れてしまうのではないかと思えるような細い腕で、アルフを撫でるフェイト

そして、その虚ろな瞳はゆっくりと俺の姿を捉えた

「あ……連……夜……どう……して」

「お前の忘れ物を届けに来たんだよ……ほら」

俺は首から提げていたバルディッシュをフェイトの首に掛けてやった

「バルディッシュ……」

震える指で待機モードのバルディッシュをなぞるフェイト

それを見ながら、俺は沸々と怒りを滾らせていた

「邪魔しないでくれる？今お説教中なの……」

プレシアはイライラいた様子で後ろに立った

「アルフ……テストロッサを連れてこの場所を出る

この建物を出て直ぐの所に一人の女性が立ってる筈だ……

その女性に海鳴まで転移させてもらえ……俺の仲間だ」

「何を勝手に話を進めてるの？邪魔しないでもらえるかしら！」

プレシアは怒りに燃える目で俺達に鞭を振り下ろした

「マナシールド」

俺は振り下ろされた鞭に向かって手をかざす

鞭は俺の手から展開された障壁に阻まれ、俺達に当たらなかった

「あなた…いつたい何者？」

怪訝な表情を見せながら、戦闘態勢をとるプレシア

「俺か？俺の名は大道連夜…こいつのお隣さんだよ…
そして……」

俺は一気に自分の魔力を解放する

さすがもとS級魔道士のプレシアでも、EXランクの俺の力には驚いたようだった

そして、その魔力を感じてフェイトやアルフは俺の正体に気がつき始めたようだった

「この世界のすべてを破壊するもの……エターナルの力を持つものだ！」

『E t e r n a l』

懐から取り出したメモリを起動させ、現れたドライバーにメモリを差し込む

「変身！」

『E t e r n a l！』

変身音と共に、俺の姿はエターナルレッドフレアへと変身した

「連夜！あんたが……」

「早く行け！ぐずぐずするな！」

いつまでもその場に居るアルフに渴を飛ばした

アルフは何度もこちらを振り向いていたが、フェイトを抱えながらアテネのもとへ向かっていった

「待ちなさい！！」

プレシアが魔力を紫色の雷に変え、アルフ達に向かってそれを放った

「マナシールド！」

俺は障壁を展開してそれを阻んだ

しかし、やはりもとS級魔導士の攻撃は凄まじいもので、あれほど堅固な障壁だったマナシールドが、攻撃を受け止めきれなくなっていた

「くっぬううう！」

両手にしてもそれ変わらない

むしろプレシアは雷の威力を上げていた

だが負けるわけにはいかない

奴の雷を防げなければ、アルフ達に攻撃が当たる

それだけは阻止しなければならなかった

「この……このヤロオオオオオオ！」

突如、俺の腕に描かれた真っ赤な炎のエンブレムが燃え上がりだした

その炎は徐々に勢いを増していき、次第に展開しているマナシールドにまで燃え移りだした

「こっこれは！」

驚いたのは俺だった

こんな現象は初めてだったからだ

「なに？あなたのその炎？」

驚いているのは俺も同じなのだが……

だがその炎はマナシールドを強化しているようにも見えた

炎はマナシールドを包み、遂にはプレシアが放っていた雷を弾き返したのだ

「なっ！」

プレシアはその一撃をもろにくらい、後ろへ飛ばされた

「ぐぶっ！」

呻き声をあげるプレシア

俺はまるで力が吸い取られたかのような虚脱感に襲われていた

「くっ！んな病弱な体で無理してんじゃねえプレシア！」

息も絶え絶えになりながら、毒づいて見せた

「ゴホッ！どうして……この体のことを……」

フラフラと杖を支えに立ち上がるプレシア

口からは少々の吐血が見られた

「私の邪魔はさせない……絶対に！」

再びプレシアは紫の雷を放った

「んー！」

再びマナシールドを展開して雷を防ぐ

今度は最初から腕の炎がシールドに纏われていた

『だが……このままじゃ埒が開かねえ

あいつを説得するためにも……なんかしねえと』

と言いながらも、プレシアは更に雷の力を上げたのか、炎纏っていてもやっとの状態だった

シールドの強度にも限界が来る

自分のフルパワーを使うことが出来ない枷が、ここで現れた

魔力を解放は出来ても使えない

宝の持ち腐れとはこのことだと思った

そんなとき……

『誰か……誰か聞こえる?』

俺の頭に響く声があった

フェイトによく似た声だったけどどこか違う

だがフェイトは既にアテネによって転移されている

と言うことは、残った答えは一つだった

「アリシアか!」

一つの名案が浮かんだ俺は、とにかく力任せに雷を振り払い、プレシアの後ろにある扉の前まで飛んだ

「なっ!」

「ファイヤーボール」

プレシアが驚いて反撃に出る前に、彼女の足下に炎の球を打ち出した
それがめくらましになっている間に、その扉を開け、奥へと進んで
いった

「なっ！待ちなさい！！」

待てと言われて待つ奴が何処にいるのやら……

俺はそのまま奥へ奥へと進んでいった

道中数多くの扉を開け、おそらく二桁目であろう扉を開けた

「……………ここは」

そこは一つの実験室のような所で、色々な機材や薬品のような物が
置かれていた

そして、その最奥部分となる所に、巨大な試験管のような物体が置
かれていた

その中は半透明な液体で満たしてあり、そして、1人の少女が中で
浮いていた

その少女は、まるでフェイトそっくりだった

いや、正確にはフェイトがそっくりなのか……

「この子が……………アリシア……………テストロッサ……………」

直後、勢いよく開け放たれた扉の音を響かせて、プレシアが入って
きた

第十五話（後書き）

今回は連夜が説教モードになります

そして、彼の歴史も少しばかり語る予定です

次回お楽しみください

第十六話（前書き）

説教回です

色んなところから言葉を拝借させてもらってます

少し会話の繋ぎ方が下手です

どうぞお楽しみください

第十六話

プレシアは肩で息をしながらこちらを睨みつけていた

間違いなく殺意のこもった目

それが俺に向けられていた

「ハア…ハア…ハア…見たわね…」

殺意と狂気の入り混ざった目

俺の表情は仮面で隠れているため相手には分からないだろうが、自分でもどんな表情をしているのか分からなかった

「確か…プレシア・テストロッサには一人娘が居た名をアリシア・テストロッサ…」

プレシアはその名前が出た瞬間ピクリと眉を動かした

「だが、彼女はお前の実験ミスによって死亡したとされている…そしてその後、お前は行方をくらまし、学会からも追放となった…」

「ずいぶん調べたものね…」
見たところまだ一桁の年齢の子供に思えたのに…」

プレシアは怪訝な表情を隠すこともなく俺にそう言ってきた

まあ体は九歳だが、中身は十九……もう二十歳超えてるからな……

知識のほうもアニメであらかた得た知識だし、間違っちゃいないかな

「知らないことはない……」

その後、アリシアが亡くなってからお前に第二子が生まれたと言う情報は無い

なのに、アリシアそっくりで尚且つテストロッサを名乗っている女の子が居るって事は……あの子は……」

「そう……あの子は……フェイトは人じゃないわ……」

私がアリシアそっくりに造り、生み出した……」

「人造魔導士……」

プレシアの言葉を奪ってその単語を言った俺に、プレシアはまた目を丸くした

「使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究……プロジェクト

トF・A・T・E……通称F計画

フェイトって名前はそのプロジェクトの開発コードだろ？」

プレシアの言うはずだった全てを言ってやったので、プレシアは本当に驚いた様子だった

「どうしてそこまで知っているの？」

あなた、本当に何者なの？」

俺に対して少しばかり不気味な感情も出てきたのだろう

先程までのプレシアとは少し気迫が弱まっていた

いや、正確には病に体を侵されているために、体力が単純に衰えていると言っ事かも知れないが……

なんにしても、ここでならプレシアも大火力の魔法は使うことができなはずだ

話をする為にもここでやるか……

「お前があの子にジュエルシードを集めさせているのは……このアリシアを蘇らせるため……か
だが、娘ならあの子も居るだろう……なぜ今になってアリシアの蘇生なんて」

「娘？笑わせないで！

あの子は……フェイトは只の失敗作よ……要らない子なの……私のアリシアの為の人形なのよ！」

まあそう来るだろうと答えは分かってたんだが……直に聞くとつらいねやっぱり

「人形……人形ねえ

ならなんでまだあの子に感情を残してる？

なんであの子に衣服を着せている？

人形なんだろう？あの子は……

人形に感情なんて要らなだろう？

無論衣服だって着せる必要はない……

所詮は自分を満たすための愛玩人形だ

使えなくなったら捨てればいい

お前なら、幾らでも新しいフェイトは作り出せるだろう?。」

自分でも、言つて吐き気がするほどのことを言っていると思う

外道、屑野郎の言い分だ

プレシアも俺がこんなことを言うとは思わなかったのか少し目を丸くしていた

「あ、あなたに何が分かるの!？」

冷静さを欠いたプレシアはそう反論するしかなかった

だがなプレシア……あなたの感情は痛いほど理解できんだよ……これがな

「分かるさプレシア……あなたの気持ちはよく分かる

だがあなたはまだ恵まれている…アリシアが死んだのはお前の実験ミスが原因でもあるんだ

だからまだ自分を恨むこともできる」

プレシアの表情が少しばかり変わる

本来ならここで彼女は「何が分かるというの!？」とでも言つつもりだったのだろうが、俺の言葉にそれが言えずにいた

「俺の家族は、親父と御袋、そして一つ下の妹と俺の四人で生活していた…

ある日、俺達は旅行に行った

むろん道中は車で移動していたさ……その時だ
前日酒を飲んで酔っていた車の運転手が操縦を誤り、俺達の乗る車
と正面衝突した」

「!！」

「次に気がついたときには、前に座ってた親父も、御袋も、妹も、
みんな動かなくなっていた……」

俺の体には三人の血がべつとりついてたよ……そして、後に三人
の死亡が確認され、病院の一室で当たった運転手が泣いて俺に謝っ
てきたが……俺は上の空だった」

プレシアは俺の過去の話に驚き、沈痛な面持ちで話を聞いていた

「俺はその男を心底恨んだ

だが、世界は俺からそれさえも奪った!

分かるか?その運転手はそれから二日後に被害者及び遺族の皆様
に謝罪しますと言つ遺書を書いて自殺しやがったんだ!」

プレシアは目を見開いていた

それと同時に、怒りや狂気に染まっていたその瞳から同情のよう
な色が見えた

「世界は俺から恨む相手すら奪いやがった!

だけどな……俺はそれでも世界で生きていくことを選んだ……なぜ
か分かるか?」

プレシアは黙って首を横に振る

つまり答えは「No」と言う事だった

まあ、その理由が分かっていたらこんなことはしないだろうしな

「俺は三人が残してくれた命だからだ！

幸か不幸か俺は三人の屍の上で今生きている……三人の分まで、死んでいった者の分まで生き残ったやつは生きなきゃいけない！

親父が、御袋が、生み、残してくれた命を俺は精一杯使わなきゃいけない！

俺より小さかった妹、あいつが生きてればできたであろう可能性の分まで、俺は生きなきゃいけないんだ！」

言っておくがこれは実話だ

もちろん生前の俺が体験した事だ

今の俺が体験したことじゃない……だが、それでも時々夢にみる

プレシアは足を震わせ下を向いていた

少しばかりは俺の話も効果ありか？

「プレシア！お前は生きているんだろう！

例え病魔に侵されていようと、お前はまだ生きているんだろう！」

「私は……私は……生きて……」

プレシアの声は涙で震えていた

「失った過去はもう戻ってこない……」

過去が戻ってこないなら、俺はせめて明日がほしい！

だから足掻き続けてるんだよ……なあ！

まだ十年も生きてない餓鬼がこんな必死に明日を求めてるって言うのに、その何倍も生きてきたお前がいつまでも明日を見ずに過去に縛られてるってのは……いったいどう言う事だ！！」

俺がその言葉を言った瞬間、プレシアは膝から崩れ落ちた

その目からは大量の涙があふれていた

「私は…私のやってきたことは間違いだったの？

でも……アリシアの居ない未来なんて、私には考えられない！」

声を震わせながら、プレシアは顔を振る

彼女の中にある悲しみなどの負の感情が、ゆっくりと顔を出していた

「その為にあの子が居るんじゃないか……」

「無理よ…あの子はアリシアじゃない…違うもの……」

肩に手を置いた俺にそう答えたプレシア

俺は彼女の肩を両手で持ち、その顔を上げさせた

「当然だプレシア、彼女はアリシア・テストロッサじゃない！フェイト・テストロッサなんだ！

お前の娘なんだよ！」

プレシアは涙に濡れる瞳で俺を見ている

「ダメよ……ダメなのよ……フェイトの事を考えると、頭が怒りで埋め尽くされていく……あの子を愛することができないのよ!」

「ならばもう一度聞くが、なぜ彼女の感情を消さない?なぜいまだに衣服を与えている?答えは簡単だ……お前の中に、しっかりあるんだよ……あの子を、フェイト・テストロッサを愛しいと思う気持ち……」

俺の言葉にプレシアは「ハッ」と何かに気づいたような表情になった

「でも……」

それでもまだ、プレシアの中ではうまく整理ができないようだった

「なあプレシア……親子の絆ってなんだと思う?」

「え?」

突然の問いに、プレシアは答えではなく問いで返した

俺は浅く息を吐くと、プレシアの目を見て話した

「DNAが親子の絆だって言うなら、俺の知り合いにDNA上、血はつながってなくても、実の親子以上の関係で結ばれている家庭もある

ならば、産まれた時に母と子を繋いでいるへその緒がそれか?だが自然の中では、それを産まれて来た子の養分とする為に食べさせる動物も居るらしい

だがその動物はへその緒がなくてもしっかりと子を守り、独り立ち

するまで育て上げる……

ならばいつたい親子の絆とはなんなんだ？」

再び俺はプレシアの問いかけた

今度はプレシアも考えていたようだが、その答えが見つからないでいた

「ありきたりな答えになるかも知れないが、それは愛だ

まったく目に見えない、本当にあるのかどうかと言う不確定な物だが、確かに存在するもの……それが愛だ」

「あい……」

プレシアは俺のほうを見ながら、ぽつりとつぶやいた

「お前は確かにアリシアを愛していたのだろう……それは事実だ
そしてまたあの子の事も、お前は愛しているはずだ……」

「なぜ……そう言い切れるの？」

プレシアも徐々に反論の色が薄くなってきた

つまり、自分の中でのテストロッサへの愛を認めてきていると言っ
証拠なのだ

「ずいぶん昔になるか……アリシアがまだ生きていたころ

彼女はお前にこんなお願いをしたはずだ……妹が欲しいとな」

「……」

プレシアの中の、長い間忘却のかなたへ消えていた記憶が蘇ってきていた

「俺はその時のお前にその記憶があつたかは分からないが、お前がフェイト・テスタロッサをアリシアそっくりに産み出したのは、アリシアのクローンとして産み出そうとしただけじゃない
お前の頭の隅に残っていたそのアリシアとの約束が、彼女を産み出す引き金になったのかもしれない…つまり、彼女はアリシアが欲していた妹そのものだ……」

プレシア…お前は今のまま行けば、アリシアの最後の願いすら自分で壊してしまうことになるんだぞ？」

俺の言葉の途中から、プレシアはわなわなと震えだし、最後にはまた大粒の涙を流していた

「フェイト…フェイト……ごめんなさい……ごめんなさい」

泣きながら、プレシアは何度も何度もフェイトに謝っていた

「いまさら母親面なんて……むしが良すぎるわよね私…きつとあの子は私を憎んでる
いくら謝っても……」

プレシアは今度は後悔の念に襲われていた

しかしまあ、これがこの人の実態なんだ

もっとはやく素直になっていれば……

そんなことを思っていたときだ

『連夜さん？聞こえますか？アテネです』

アテネから念話が入った

『どうした？アテネ』

『なんでも、フェイトさんがどうしてもプレシアさんに渡したものがあつらしいです』

いまからそちらに物を転送するので、渡してもらえませんか？』

それがどう言った物か、俺は分からなかったが、ともかくアテネに『Go』サインを出した

瞬く間にそれは送られてきた

送られてきたのは長方形の箱だった

封を破らないように中身を覗いた俺は……

「ほう」

と声を漏らし、その箱をプレシアに見せた

「その箱は……なに？」

「あの子がどうしてもお前に渡したいと言っていた物だ……今転送されてきた

中身を見てみる」

フェイトからの物だと聞いて少しびくびくしながらも、その箱を開けたプレシア

その箱の中には……

「これは……」

きれいに並べられた三つのケーキが並んでいた

「二つがテストロッサとアルフの分……あと一個余るよな？
それは誰の分だと思う？」

プレシアはゆっくりと震える手で自分を指差した

「わ、私の？」

「御明察だ」

俺が笑いながら答えてやると、プレシアは再び涙を流した

しかし、その表情には今までの涙では無かった、喜びの表情が現れていた

「さてと、じゃあ俺は帰るぞ？」

ベルトからメモリを取り、もとの少年大道連夜の姿へと戻った俺は、そのままゆっくりと転移をしようとした

「まっつて……連夜」

少し照れくさそうに俺の名を呼んだプレシア

その手には、二つ折にされた紙が握られていた

「なんだ？プレシア……」

「これを…フェイトに渡して欲しいの…」

俺はその紙を受け取り、ジャケットの内側のポケットにその紙を入れた

「中身を……確認しないの？」

「前のお前なら確認していたが、今のお前にはそれは必要ないじゃあなプレシア……また会おう」

プレシアは「また」と言っつて手を振った

俺が徐々に転移の光に包まれているときだった

『ありがとう……ママを救ってくれて』

後ろで眠っているはずのアリシアの声が聞こえた

『おやすいごようだよアリシア……お前も必ず救ってやる……もっ少しだけ待ってるよ』

『えっ？』

そのアリシアの声が聞こえると同時に、俺の体は転移した

次の瞬間には、俺は自分の部屋に立っていた

第十六話（後書き）

次はフェイト回ですね

お家に上がり込む予定です

次回お楽しみに

第十七話（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません

第十七話です

お楽しみください

第十七話

「おかえりなさい、連夜さん」

服を着替え、部屋からでた俺を笑顔のアテネが出迎えた

「ただいまアテネ……テストロッサはどうだった？」

「大丈夫です」

そこまで深い傷は無かったので、跡は残らないでしょう
今はゆっくり眠ってますよ

「アフルさんが側についています」

「そう言われてほっと一安心だった」

「まだ小さな体にあれほどの事をやったからな……一生傷なんかにな
つたらそれこそ大変だったろうしな」

「ありがとうアテネ」

「さて、じゃあアルフをつれてショッピングに行ってくるよ」

「はい……つてええ!!」

アテネはわかり易いくらいに驚いた

「テストロッサは完璧に栄養失調だ」

「まあそれにはアルフも責任がある……大方飯の作り方も食材の選び
方もわからねえだろうから俺が教えてやるんだよ」

「アテネには悪いがテストロッサ達の部屋の掃除を頼む」

たぶんろくにしてない筈だからな」

アテネは少し渋い顔をしていたが、俺の説明を聞き、まあそういうことならと納得してくれた

「アテネ、俺はちゃんと覚えてるぞ……」

アテネがその言葉に困った顔をする

何が覚えているのかわからない様子だった

「約束だよ……一週間お前の抱き枕になるって約束…忘れてねえかな」

自分でも少し顔が赤くなりながらそう言ったが、アテネのほうはその約束を思い出して色々考えたのか、トマトのように顔が真っ赤になっていた

「なんであたいが……」

俺と一緒に街中を歩きながら、アルフが愚痴をもらしていた

なかなかこねたもんだから、説得するのにかなり時間をつかっちゃった

テストロツサはまだ寝ていたのでそのままにしてやることにした

何も無理に呼ぶ必要はないからな

プレシアに頼まれていた紙もまだ渡していない

「まだなのかい？そのスーパーってのは……」

「ごたごた言わずに付いて来い……」

テストロツサの為に食材を買いに行ってるんだろっが……」

ブーブーと文句を言うアルフ、彼女の言い分は認識阻害かけて空を飛べば良いだろうにと言う考えなのだ

やれやれこれだから魔法使うやつは……

「なんか言っただかい？」

「何にも……つたく、黙ってりやそこそこ美人なのによ」

アルフが噛み付いてきそうだったのでそう言ってやると、途端に様子がおかしくなった

「べ、別にあんたに言われたって……そんな……嬉しくないね！」

などと頬を赤らめながら言うアルフ

「ほお、今流行のツンデレか？」

「ツ……ツンデレ？ってなんだい？」

なぜか興味深げなアルフ

おいおい、どこに興味を持ってんだ？

とツツコミたくなる衝動を抑えて、ここは丁寧に説明してやった

「ツンデレってのは、好きな人に対してしてみんなの前ではツンケンして冷たい態度をとるくせに、二人つきりになったりすると途端にでれでれするキャラや性格の事だ」

「すっ！べべ、別にあんたのことなんて…すす好きでも何でもないさ！」

顔が真っ赤なアルフ

あれ？俺まさかこいつにまでフラグ立てた？

いつ？どこで？俺なにやらかしてんだ？

と、考えている間に、俺達は目的のスーパーに到着した

「へえ〜人が大勢居るじゃないか」

その様子を見ながらアルフは素直に驚いていた

「ここには食品だけじゃなくて日用品なんかも売ってるからな
ちよつどいい、そこんとも回っていくか」

俺はアルフの手を掴み、そのままスーパーの中へ入っていくのだった

「え〜つと、これとこれとこれ…それと…」

食品売り場に着いた俺達は、早速色々な食材を、手に持っているカゴに入れていった

「あんだ、いっぱい入れてるけど…どれが何だか見てやってるのかい？」

時々俺が食材を物色していた様子を見ていたアルフは、それが気になったのかそんな事を言ってきた

まあ見てるっちゃ見てるんだが……

今後の事も考えていちよう教えておくか

「アルフ、これとこれ持ってみるよ」

そう言っつて彼女に渡したのは同じ値段、同じ形をした二つのキャベツだ

アルフは渡された物を見て、首を傾げていた

「なんだいこれ？」

「キャベツだ」

俺が当たり前のように言っつと、「そんな事は分かってるよ！」と言われてしまった

「あたいが聞いているのはなんでこの二つを渡したのかって事だよ！」

なんだそんな事が……

名前を聞くのはおかしいかと思ったがまあアルフだから知らないかな？と思って聞いてみたのだが……

「あんた、さりげにいま失礼な事考えたね」

「いや、気のせいだ……」

さてアルフ、そのキャベツ何だが……持ってみて何か気付かないか？」

俺はそう言っただけで彼女が両手で持っているキャベツを指差す

彼女は「ん？」とした表情をして考えた

「ん………おっ？」

何かに気がついたのか、アルフは目を開けて二つのキャベツをじっと見つめた

「分かった！こっちのキャベツの方がちょっと重いよ！」

そう言っただけで左手に乗っているキャベツを上げるアルフ

所要時間は約五分か……初めてにしては上出来か

いちよう俺も調べたが、アルフの言った答えと一緒にだったので大丈夫だと判断した

「でもそれが何の意味があるんだい？」

アルフはやや困った顔でそう言った

まあそう言えばそうか

「同じ形なのにどちらかの方が重いつて事は、そっちのほうが中身が詰まってるって事だ

一緒の値段で買うなら絶対そっちのほうが得だろう？

貧乏くさいかもしれないが、ちょっとでも安い値段で量と美味しい物を買う

それが庶民の知恵なんだよ」

俺が自信ありげに力説すると、アルフは「へえ〜」と言って少し感心した様子だった

「さて……テストロッサは起きているか？」

あれから食材、日用品を買った俺達は、ゆっくり自宅に帰ってきたと言っても、テストロッサの家に帰ってきたのだが……

「あらお帰りなさい

フェイトさんならまだ寝てますよ」

帰ってきた俺達をアテネが迎えてくれた

買い物に行っている間かなりの掃除をしてくれたのか、まるで新築

のように綺麗になっていた

「ゴミも大方纏めましたし、後は出せば良いだけですよ」

そう言つて「ふう」と息をついて額を拭うアテネ

いやはやこいつにはかなり世話になりっぱなしだな

「ありがとうアテネ

今から晩飯を作る

ちよつと休んでおいてくれ

おいアルフ、作り方教えるから来い」

「あいよ〜」

俺達はそのまま調理場まで向かった

幸い調理器具は揃っていた

と言つより揃っていなかったら大変なことになっていた……

「で、なにを作るんだい？」

目の前に買ってきた材料を置いたアルフがそう聞いた

因みに置いてある食材は、卵とお米、醤油、塩こしょうだけである

「まあとりあえずお前達は単純な栄養失調だから、今日はたらふく炭水化物を食べる

だから作るのは焼き飯だ」

コンロの上を買ってきた少し大きめの普通のフライパンを置く
焼き飯用ではないのは、単純に使い回し出来るように考えてだ
少々作りにくいかもしれないが、慣れれば簡単だ

「さて、手順を教えながらやってくからちゃんと覚えろよ？
テスタロッサの為だろ？」

「わ、わかったよ」

そうして俺はコンロに火を入れ、実際に焼き飯を作っていた

フエイトside

此処は……どこだろう

確か、お母さんにジュエルシードの報告をしに行ったら……怒られ
て……

そしたらアルフと連夜が助けてくれて……

連夜が………そうだ……

連夜があの人だったんだ

『俺の名は………エターナルだ………』

エターナル……何度も私と戦って……でもあの時は……

あの時は私を助けてくれた……

その後私どうしたんだろう……

アルフに抱えられながら意識が遠くなって……

「んん……」

ゆっくり体を動かしてみようと思ったらちょっと痛かった

あたりを見渡すと此処が自分の部屋だと言っのが分かった

体には綺麗に包帯が巻かれている

「……！」

「……！」

「……！」

扉の向こうから誰かが騒いでる

それに、なんだか少し良い匂いがする

『ガラ』と扉を開ける

するとそこには、並んで料理を作っている

連夜とアルフが居た……

「あとはこれを皿に盛るだけだよ」

「へえ〜案外簡単なんだねえ」

そんな二人の姿を見てると、何故か胸が苦しくなっている自分が居た……

side out

「さて、後はテストロッサをと……」

皿に焼き飯を盛りながらフェイトが寝ている部屋を見る

しかし、その視線の先には頬を膨らませてこっちを見ているフェイトが居た

寝ていると言っていたから姿も見えていなかったが、体に巻かれた包帯が少し痛々しかった

どうやら匂いに釣られて起きてしまったようだった

まあ起こす手間が省けて良かったがな

「ど、どうしたんだいフェイト〜なんか怒ってないかい？」

フェイトの表情におろおろしてるアルフ

それを遠目から見ている俺とアテネ

そんな立ち位置がなぜかとても不思議に思えて、そしてとても面白いことに思えた

「な、なに笑ってんだい連夜！

あんたからも何とか言っておくれよ！」

「連夜って呼んでる……」

さらに「じと〜」とした目でアルフを見るフェイト

さすがに可哀相になってきたので助け舟を出すことにした

「テストロツサ……よく寝たな

アルフとちよつと晩飯を作ってたんだ

準備はもうできてるから食おうぜ」

「え？あ……うん

食べるよ……」

フェイトはゆっくり頷くと、そのままテーブルに向かっていった

「おいしい〜」

「ほんとおいしいよ連夜！あんた凄いねえ〜」

焼き飯を頬張りながらとても嬉しそうな表情を見せるアルフとフェ

イト

そんなに笑顔で言ってもらえると、作ったこちらとしてもなかなか嬉しいものだ

「これから一週間、朝昼晩とご飯の作り方を教えてやる
今日のそれはアルフに教えておいたし、それにメモも作っておいたから、テストタロツサもちゃんと覚えるんだぞ？」

「むぐ……わかったよ連夜」

焼き飯を頬張りながらそう言ったフェイト

食べるの必死といった様子だ

買い物中に聞いた話では、最近の食事と呼べる食事は殆どしておらず、軽く栄養失調気味になっていたらしい

アルフは使い魔の為、食事は形式的なもので、主人から送られる魔力をエネルギーにしているから必要ないのだが、主人であるフェイトは健全な人間の為に、食事をとらないと危険なのだ

実質彼女の腕は初めて会った当初よりも、痩せ細っており、少し頬もやつれているような気がした

急に多量な食事を食べさせてもよくないのだが、ともかく彼女は食事を軽んじている傾向があるのでその考えを改めさせることから始めたのだ

食事を楽しいものだと感じれば、彼女も食事を積極的に行いたいと思うようになるかもしれない

その為にも、こう言う食事と会話というのは貴重なのだ

「そうだ、テストロッサ……お前に渡しておかなきゃいけない物がある」

食事を終え、食器などをアネとアルフが洗っているときに、俺はプレシアから預かっていた物の事を思い出し、それを今フェイトに渡すことにした

俺は胸ポケットから綺麗に折りたたまれた紙を取り出し、それをフェイトに手渡した

「これは？」

戸惑った様子で俺に聞いてきたフェイト

俺は素直に「お前の母さんから渡すように頼まれた」と伝えた

すると、テストロッサはとても驚いた表情を見せ、アルフが俺に詰め寄ってきた

「連夜！あんた……その中身みたのかい？」

「見てない……」

「なんで！」と言おうとしたアルフの口をふさぐ

「以前のプレシアが渡してきた物なら中身は拝見したが、今のあいっなら大丈夫だよ……俺がしっかりO H A N A S H Iしたか

らな……

テスタロツサ……中身見てみる

大丈夫……お前の母さんはもうお前に酷い事なんかしないからさ」

俺が笑顔でそう言ってやると、アルフもゆっくり俺から離れ、フェイトを見守った

フェイトは恐る恐る綺麗に折り畳まれた紙を開けていく

そしてすべてを広げ終わり、その中身を見た瞬間、フェイトの瞳から涙が溢れた

「ど、どうしたんだいフェイト!!」

やっぱり何か嫌なことでも書かれていたのかい!？」

慌てて駆け寄るアルフ、フェイトはゆっくりとその紙を見せた

俺も横からその紙を見る

するとそこには、二行だけ文が書かれていた

『フェイト……ケーキありがとう

美味しかったわ……』

それは、他人から見れば簡潔に書かれた手紙かもしれない

だが、このフェイトと言う少女には、やっともらった母からの形ある愛なのだ

決して褒められたことのない彼女が初めて褒められた

「ぐす……フェイトお……」

使い魔としてフェイトと精神的にリンクしているアルフも、フェイトから伝わる感情に、涙をながしていた

「うう……うう……」

泣き崩れるフェイトを見つめる俺は、その嬉しそうな彼女の表情を見て少しやってよかったと思うのだった

外野 side

あれからフェイトの家を後にし、自分の部屋に戻った連夜達

今はアテネとの約束を実行しており、連夜はアテネの抱き枕となっていた

「良かったですね……フェイトさん、嬉しそうですね」

まだ9歳の体である連夜をぎゅっと抱きしめるアテネ

連夜もそんなアテネの背中に手を回していた

「そうだな……でも、俺は褒められるようなことはしてないよ……」

アテネの胸に顔をうずめながら、連夜はそう洩らした

「褒められる……とは、どういうことですか？」

連夜を見つめて、アテネは不思議そうな表情をした

なぜそんなことをいうのかが少し理解できなかったからだが、第一に連夜がそんなことをいったのが驚いていた

「俺がやったのは確かに良い事なのかも知れない……でもな、俺がやったのは歴史を捻じ曲げるってことだ

この世界にあったはずの歴史の流れを壊してしまった……自分がこんな歴史は嫌だって言って勝手に世界を作り変えようとしている」

アテネはその言葉を聞いて、「ならばもう世界の介入は止めますか？」と聞こうとした

しかし、連夜はアテネの目を見てしっかりとした口調で言った

「でもな……俺は後悔はしない……」

それに、この行動を止めようとは思わない

俺は一度守りたい人達を守れなかった……でも今は守れる力があるだから……俺はこの行動を止めない……自分勝手だとなんだと言われようと、俺はこの世界の決められた運命を破壊する……必ずだ……必ず……」

「ふふ……分かりましたよ

なら、私もあなたを支えます……あなたがたとえ孤独になったとしても、私だけは……あなたの側にいますから……」

抱きしめる力を少し強めたアテネ

連夜はどうかやら眠ってしまったようだ

「スー、スー、スー、スー」

いつもの彼では決して見せないような、そんな安らかな表情だった

「大丈夫……あなたが周りの人達みんなを守るなら、私はあなたを守ります……ずっと側にいるよ……」

……お兄ちゃん」

その声は連夜には聞こえていない

彼女は最後につつすらと瞳から涙をこぼし、連夜にやさしく微笑んで、眠りについた

s
i
d
e

o
u
t

第十七話（後書き）

はい…

え〜…意外な事実発覚っていう

次回は遂に、ハラオンさんが登場します

お楽しみください

第十八話（前書き）

皆様お久しぶりの黒のカリスマです

遂にあの人達が登場です

そして、連夜の正体が……

どうぞお楽しみください

第十八話

あれから数日の時間が流れた

フェイトやアルフに料理を教えたりする日々の中、実ははやてに勉強を教えたりもしている

はやての件に関してはつい最近のことで、週に二〜三回勉強を教え
ている

フェイトやアルフ、はやても飲み込みが早く、教えたことはすぐに
吸収していった

フェイト達も既に和食から洋食、中華など様々な料理のバリエーシ
ョンを持っており、はやても同じ学年の勉強レベルは完璧にマスタ
ーしていた

ジュエルシードの件に関しても、なのはやフェイトは互いに激突し
つつも、互いを高めあい、かなりの数が集まっていた

むろん、俺も戦闘に介入している

フェイトは俺の正体を知っていながら、敢えて俺の名を呼ばないで
いてくれた

「今まで隠してたってことは、他にも知られると困る人がいるんで
しょ？」と気を利かせてくれていているらしい

だが、物語もそろそろ終盤だ

なのはは原作通りにアリサと喧嘩したらしい
アテネにそう教えてもらった

そして、今日はついにあの日を迎えたわけだ……

「ついに来た……と言ったところですかね？」

「ああ…そうだな」

遠くのほうで強力な魔力の反応が感じられた

そして直後に起きた魔力の奔流

原作通り、ジュエルシードは暴走し、巨大な木の化け物となったら
しい

そしてやつが現れたと言う事は……

「そろそろ、管理局の奴等が現れる……か」

遠くで光る桃色の魔力と金色の魔力

その光を見ながら、俺はこれから起こるであろうことを考えた

なのはに正体を明かす

今までずっと逃げてきたこの事から、俺は向き合わなければならな
いところまで来ていたのだ

「連夜さん……大丈夫ですか？」

心配そうに人形型になったアテネが俺の顔を覗き込む

俺は「大丈夫だ」と言っただけをなでた

いつまでも逃げるわけにはいかない

それに、俺はもう決めたんだ……自分の大事な人達は自分で守ると

……

「変身……」

エターナルメモリを起動させ、現れたロストドライバーに挿し込み、メモリスロットを右に倒す

『Eternal!!』

直後、白く輝く粒子が俺の体を包み、変身を完了させる

が、その姿は未だにレッドフレアのままだった

俺は再び彼女達が戦っている場所に目を向ける

右手に着けているブレスレットのジュエルシードが青々と光っている

今回はかりは、その光がどこか不気味に見えた

「アテネ……転移だ。行くぞ！」

「了解です！連夜さん」

転移魔法なんかは距離がどれほど離れていようとすぐに転移は終了する

次に俺の前に現れたのは、こちらに迫る一本の蔓の鞭だった

「チツ！」

舌打ちをしてその場を飛びのく

『バチン』と音を立てて地面を陥没させた鞭は、しなって再び俺に向かってきた

「フレイムランス……」

俺はその鞭に向かって手を翳し、炎の矢を発射する

矢はまっすぐに鞭に直撃し、そのまま焼き切った

『ギヤアアアア！』

木の化け物は苦痛の叫びを上げ、その顔らしきものをこちらに向けた
そのことでどうやらなのは達も俺の存在に気づいたらしい

二箇所から「あなたは！！」と言う声が聞こえた

フェイトは俺と顔を見合わせて小さく頷いて見せるだけだったが、

なのはこんな時にも質問をしてこようとした

「白い魔導士よ……話は後にしよう
今は目の前のこいつを……」

と、最後まで俺が言う前に、俺の体に化け物の鞭が直撃した

「ぐあー！」

地面を削りながら止まった俺の体

ダメージ的な問題は皆無……不意を衝かれたとはいえちゃんとガードはしていたようだった

「やってくれるじゃないか……化け物！」

俺は軽く大地を蹴って化け物に近づき、足下の根っこの部分に手を向けた

「ウインドカッター！」

瞬間、三日月状の風で生成された刃が化け物の根っこの一本を切り裂く

『ギヤアアアアアアアアア！』

化け物は再び悲鳴を上げ、こちらに鞭を放ってくる

「同じ手を二度も食らうか！ロックハンマー！」

拳を握り締め、その周りに岩や土などを集めて凝縮し、ハンマーを作り出した

「フン！」

そのまま向かってくる鞭にハンマーを振り下ろす

ハンマーは衝撃で砕け散ったが、それと同時に鞭も千切れていた

「二人とも……止めを刺すなら今だぞ？」

「了解！」

「わ、分かったなの！」

俺の指示に二人は自分の前に魔法陣を展開し、魔力を収縮させていく

「デイベイン……バスター……！」

「サンダーレイジー……！」

なのはは桃色の光線を、フェイトは雷の光線を放ち、木の化け物は木っ端微塵に弾け飛んだ

何も此処まで高威力の攻撃をしるとは言っていないのだが……

まあ良しとしよう

さて、俺の前には暴走の収まったジュエルシールドがある

そのジュエルシードを挟むようにして互いに睨み合うのはとフェイト

もはや恒例となったこの光景

俺はジュエルシードを掴み、二人の間に立つ

たとえこの次に待っている事を分かっただけでも……

「さあ、このジュエルシードを賭けて戦え……よいい」

二人が臨戦態勢をとって身を屈める

近くには互いに睨み合うアルフとユーノもいる

「始め!!」

俺が戦いの開始を宣言すると同時に、なのはとフェイトは飛び上がり、お互いのデバイスを振りかぶる

まさに激突が始まろうとした時だった

「ストップだ！此処での戦闘は危険すぎる！

時空管理局 執務官のクロノ・ハラオンだ!!」

やはりと言うか何というか、原作通り、二人のデバイスを握り、戦いを止めたクロノが現れた

「!!」

驚く二人にクロノは淡々と告げる

「とりあえず戦いを止めるんだ
話は後で……」

「その必要はない!!」

クロノの背後に周りこんだ俺は、そう言って彼に殺気を放った

「なっ!!」

クロノの注意が一瞬こちらに向く

その隙に、フェイトはバルディッシュをクロノから奪還した

「しまっ……」

「お前の相手はこっちだ!!」

フェイトに向かった意識を再び俺が前に出ることので此方に向けさせる

「どけ!! ステインガーレイ!!」

クロノが高速な光の弾丸を発射した

「ぐっ!!」

直撃を受けた俺はそのまま地上に墜落した

「!!…れっ……」

「早く行け！ぐずぐずするな！」

危うく俺の名前を言ってしまうそうになるフェイトに叫ぶ

「フェイト！早く！」

アルフがフェイトを抱えて転移した

俺はそれを確認し、ゆっくりと構えを解いた

「何のつもりだ？」

目を細め、俺を怪しむように見るクロノ

さっきまで戦う意欲を見せていただけに、俺のこの行動は明らかに不審なものだった

「先程までの無礼を許してくれ……こちらとしてはもう戦う気はない……」

両手を挙げて降伏の意を見せる俺

「ふざけるな！いったい何が目的だ！？」

まあクロノの言葉はもっともなことだが……

『連夜さん……フェイトさん達、無事に転移完了しましたよ』

アテネから念話の秘匿回線が入った

『了解した……お前もこちらに戻ってきてくれ』

『了解です』

改めて肩の荷が降りた俺は、再びクロノに視線を向ける

「俺は自分の友人を守ろうとしただけだ……」

先にこちらに仕掛けてきたのはそちらだし、こちらには十分正当防衛の権利があるはずだ

友人はもう無事に転移したみたいだし、俺としてはもう戦闘の必要はないと判断した……そちらがまだ戦闘を続けるならがそれも構わんが……」

俺はゆっくりと自分の魔力を解放する

とたんに周囲にEXランクの魔力が溢れ出す

クロノも驚愕の表情を浮かべていた

「なっなんてでたらめな魔力だ！」

「俺はあんたよりも遥かに強いぞ？」

それでもやるなら……かかってこいよ？」

最後に手招きをして挑発をする俺

さすがにこれにはクロノも頭にきたのか、デバイスを構えてこちらに向かってこようとした

だが……

「やめなさい……」

突如空中にモニターが映し出され、そのモニターに美しい緑髪の女性が映っていた

「やめなさいクロノ執務官……あなたが戦っても勝てる見込みはゼロよ」

クロノに向かってそう言った女性

厳しい目でそう言ったその女性に、クロノは少し顔を歪めたが、渋々承諾した

「了解です……母さ……艦長」

すこし沈んだ表情でそう言ったクロノは、ゆっくりと地上に降り立った

その直後、俺達の頭上に巨大な戦艦が出現した

「ごめんなさいね……この子も悪気はないのだけれども……」

現れた戦艦とこの女性……戦艦はアースラ、女性の名前はリンディ艦長だというのは直ぐに理解できた

「おやおや、こんな素敵な女性に頼まれたなら、喜んで戦闘を中止するよ」

「あら、口が上手なのね」

冗談っぽくそう言った艦長に、俺はほおと漏らして言葉を続けた

「口を褒められたのは初めてだな……なんせ自堕落な性格なもんでな……」

仮面を付けているため相手には見えないだろうが、俺は皮肉った笑みを浮かべていた

「そちらが良ければこの艦に乗艦してくれると嬉しいのだけれども……貴方達の話も少し聞きたいわ」

リンディ艦長はにこやかな笑みを浮かべてそう言った

俺はゆっくりとなのはに向かって指を指した

「え？」

パチクリと目を丸くするのは

「この白い魔道士が乗艦するならば、俺も一緒に乗艦しよう」

「ふえええええ！？」

直後になのはものすごく驚いた声がその場に響く

「なら、あなたに聞くわね……乗艦してくれるかしら？」

モニターがなのはの方向に向き、リンディ艦長がニコリと微笑みか

ける

「ふえ？えつと……その……」

突然のことに戸惑うなのはに、ユーノが助け舟を出した

『なのは、この人達は管理局の人達だし、大丈夫だよ』

やさしく念話でそう伝えたユーノのに安心してか、なのはは「ユーノ君がそう言うなら」と言っつて乗艦する意向を見せた

すると、リンディ艦長が映るモニターがまた俺の方向を向いた

「さて、あの子は乗艦すると言っつてくれたわ……あなたも乗艦すると言っつ事で良いのかしら？」

その微笑みは崩れることなくこちらに向けられている

だが、俺は知っている

あんたがその笑顔の裏で幾重の策を張り巡らせているのか……だからこそ俺ははつきり言っつた

「それで構わない……」と

クロノがまだ何か言おうとしたが、リンディ艦長がそれを黙らせた

「じゃあ、貴方達を疑っつている訳では無いんだけども、そのバリアジャケットを解除してもらえるかしら？」

乗艦の仕方はクロノが教えてくれるわ

気を悪くしないでね……いちよう規則でそうなってるから……」

遂に来たか……内心そんな事を思う

遂に、あいつに正体を晒すことになる

横目でなのはを見ると、彼女は既にバリアジャケットを解除し、普段の姿に戻っていた

後は俺だけだ……リンディ艦長、クロノ、なのは、ユーノの視線が一点にこちらに集まる

「ふう……」と息をついて空を見上げる

「了解した……」

それだけ言って、俺は右に倒していたメモリスロットを元に戻し、メモリを抜いた

『キュウウウウウウン……』

メモリが抜かれた音が響くとともに、まるで風に吹かれた落ち葉のように、俺の体を包んでいた白い鎧が粒子のようになって消えていく

身長も元に戻り、俺の変身は解除された

前のモニターのリンディ艦長も、クロノもみな驚いた声を出した

だが……

「……………へ？」

誰よりも驚いた声を出した少女がいた

なのはである

「うそ……そんな……なんで……」

目の前の光景が信じられないと言った表情で俺を見ているなのは……

俺は見上げていた空からゆっくりと視線をなのはに移し、静かにこう言った

「よお……一年半ぶりだな……元気そうだなによりだぜ……高町」

「連夜……君」

これが、俺となのはの一年半ぶりの再会だった……

第十八話（後書き）

此処までが長かった……

今回はジュエルシードを最後まで集める所まで書きたいです

御期待ください

第十九話（前書き）

遅くなりました第十九話です

お楽しみください

第十九話

クロノSide

アースラに乗艦した僕は、まずフェレットの姿でいた子に、元の姿に戻るように伝えた

「あ、分かりました」

彼はそう言っただけで直ぐに元の姿に戻る

彼が先ほどまで肩に乗っていた少女は少し驚いた様子を見せたが、心ここにあらずと言った様子で、直ぐに別のところへ視線を向けた

「そう言えば、なのはにはこの姿は初めて見せたっけな……」

そう言っただけで彼は少し頭を掻いた

初めて見たのなら、もう少し大きなアクションをしてもいいものでは？と僕は思う

先程彼女達とはあったばかりだが、少なからず彼女に関してはこの子を人としては見ていなかったはずだ

それが突然人の姿になったなら尚のこと、もっと驚くはずなのだが……彼女の視線はずっと同じ方向に向けられていた

この三人の集団から一線引いた場所で僕達を見ている少年、と言っても僕も少年だが……

彼女はずっとあの少年を見つめている

あの白い仮面の戦士の正体があの少年だった

体格や声はまるっきり別人だ

だが、その体から溢れている魔力は間違いなく破格の量だろう

最低でもSクラスの魔力は常時流れ出している

確か、この船に名前を言っていたか……大道……連夜……

あの少女、なのはとはいったいどう言う関係なのか……

『クロノ君、艦長の準備ができたから、皆さんをこっちに案内して』

『了解だ、エイミー』

オペレーターのエイミーから念話でそんな連絡が入った為、僕は指示通り全員をその場所に案内しようとした

が……一人既にその場所に向かって歩き出そうとしていた人物がいた

大道連夜だ

「待て、いったいどこに行く気だ!？」

彼を呼び止めてそう言った

なのはやフェレットの少年は何事かと驚いているようだった

「エイミーから念話が入ったんだろ？場所の用意が出来たって……だからそこに向かおうとしてるだけさ」

彼は驚くべきことを言っていると理解しているのだろうか？

僕とエイミーの念話を傍受していたのか？個人回線で話していたはずなのに……

「なぜ……」と言う前に向こうから答えが返ってきた

「俺は秘匿回線以外は全部拾えるようになってんだよ……聞かれていいなら構わないが、聞かれてまずいことは全部秘匿で話すんだな……」

まあ、その気になれば秘匿でも傍受できるようにはなるけどな……」

そう言って彼は前に歩いていった

「ええと……その……」

「あちゃ〜」

なのはという少女は困った顔をしており、フェレットの少年は頭を抱えていた

「くっ！……行こう。ついて来てくれ」

早足で歩いて彼を追い抜かし、そのまま前を歩いていく

「……………」

表情を一切変えず、彼は黙ってついて来ていた

Side Out

連夜Side

扉が開き、落ち着いた和室が広がる

盆栽や獅子おどしなどが置かれ、綺麗に畳が引かれた部屋に、なんとも不似合いなティーカップを持って座っている緑髪の女性……………リンディ・ハラオウンがいた

「よく来てくれました……………私はこのアースラの艦長、リンディ・ハラオンです。どうぞよろしく」

そう言つて笑顔を見せながら軽く会釈をするリンディ艦長

「こ、こちらこそ、はじめまして、高町なのはです」

「ユ、ユーノ・スクライアです」

慌てて自己紹介を始めるのはとユーノ

ただただ黙って見ていた俺に、リンディ艦長が優しく微笑んだ

その目には、俺にも自己紹介をしろと訴えかけているように見えた

気乗りはしないがしょうがない……………

「え、大道連夜です……以上」

頭も下げず、傍から見れば明らかに不遜な態度で俺は名乗った

クロノがすごい形相で睨んでいるが気にしない

直後にエイミイが部屋に入ってきた

「エイミイ・リミエッタです。このアースラの管制官をします」

「よろしく」と言っただけで頭を下げたエイミイ……この人は相変わらずテンション高いな……

「さて、じゃあ一通りの自己紹介も済んだし、事のあらましを教えてくださいませんか？」

見たところなのはさんは管理局に登録されている魔導師じやなさそうだし、そんな子がどうして魔法を使っているのかわかるのかをじっくりね？」

そう言っただけでリンディ艦長は事件の説明を求めた

ここは原作どおりにユーノが説明した

自身が遺跡の発掘を生業とするスクライアー族の出身で、自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまったこと

それに責任を感じ、独自にその回収を行っていたこと

こちらの世界でジュエルシードの封印に失敗して重傷を負ったことを俺と出会い、一命を取り留めたこと

その後の俺から紹介されてなのはと出会い、彼女に協力を申し出、「レイジングハート」を託したことなど、すべてを話した

「立派な考えだわ」

話を聞き終わったりリンディ艦長はそう言ってユーノを褒めた

「だが、同時に危険な行為でもある…もし彼がいなければ君は危険な状態になったんだからな…」

クロノはそう言ってユーノを咎めた

まあ、この場合は両者の言い分が正解と言えた

「じゃあ……私をユーノ君に教えたのは…連夜君だったの？」

話を聞き終えたなのはが恐る恐る俺に聞いてきた

先程からなのははなりやらビクビクしている

俺に対してかどつかは知らないが、様子がおかしかった

「そうだ……俺がユーノに高町を推薦した」

俺は淡々とそう告げた

「その理由は何かしら？」

リンディ艦長がこちらを見ながらそう質問してくる

「答える必要がない……」

俺はそう言っただけを却下した

「大道……おまえ……！」

クロノが我慢できないとばかりにこちらに向かおうとしてきたが、リンディ艦長が「やめなさい」とクロノを制した

「これ以降は管理局がこの任を引き継ぎます……ユーノ君はともかく、一般のなのはちゃんや大道君はもうこの件には関わらなくていいわよ」

優しい口調でそう言ったリンディ艦長

なのはは「え？」と驚いた表情をしていた

「一般人である君達を、これ以上危険な目に合わすわけにはいかない……」

もとの普通の生活に戻れるんだ……悪い話じゃない」

クロノが俺達を納得させようとそう言った

なのははうつろたえているが、俺はまだ何も言わない

次の言葉……リンディ艦長の次の言葉を待っていた

「まあ、突然こんなことを言われても気持ちの整理がつかないと思うから、もう一度集会の場を設けましょう……そこで改めて貴方達には……」

俺はこの言葉を待っていた

彼女が最後まで言い切る前に、俺は口を挟んだ

「断る……」

直後、部屋の中に冷たい空気が流れた

「あの……」

リンディ艦長が何かを言おうとしたが、俺はそれを許さない

一気に捲し立てるように言葉を並べた

「俺達をもう無関係な人間にしたいと言うのなら、巻き込みたくないというのならなぜ再度の会合が必要になる？」

この場に関係ないと切り捨ててしまえばいいだけの話だ……それを敢えてなぜだ？」

「ッ!!」

リンディ艦長は痛い所を付かれたと言った顔をした

「答えられないなら俺から言ってやるのか？」

大人しく言ったらどうなんだ？この件に関しては戦力が必要なので俺達にも協力してくださいってな！」

言い切った……言い切ってやった

「誰がそんなことを……」とクロノが噛み付きそうになる

「なら俺の思い過ごしか？リンディ艦長……あんたの言い方は俺にはそう聞こえたがな……間違っていたなら謝るが？」

全員の視線がリンディ艦長に集まる

艦長は今まで能面のように張り付いていた笑顔が消えていた

今までの計画すべてを見透かされたような驚愕の表情を浮かべていた

ここで俺の言葉を違うと言えば、艦長の体面は保たれるだろう……だが、それはリンディ・ハラオンの人としてのプライドが許さなかった

「そう……ね

あなたの言つとおりよ……」

敗北を悟ったような表情でそう告げたリンディ艦長

それにクロノなどのメンバーは驚いていた

「母さん!？」

思わず言葉に出してしまったその言葉、だが、今のリンディ艦長にはそれを咎める気力もなかった

「ごめんなさい……私の立場上、こう言う事は言っではいけないのよ……」

だから、再度の集会を開くことで貴方達に自分から協力を言い出してもらおうと思っていたのよ……」

詫びながらもそう続けたリンディ艦長

「あ、あの……私、協力します！」

そんなこと、頼まれなくても喜んで協力します！」

なのははそう言ってリンディ艦長に頭を下げた

「なのはちゃん……」

艦長は「本当にありがとう」と告げて彼女に頭を下げた

「高町……お前、自分の言っていることを理解しているのか？」

俺はゆっくりとなのはに近づいた

「え？」

とこちらに顔を向けた瞬間、彼女の眼前に手を翳し、ファイヤーボールを生成した

直後に、部屋の空気が緊迫したものに変わる

「大道！」

「動くな……！」

デバイスを持って俺に飛び掛ろうとしていたクロノ達を一喝する

「れ……連夜……君？」

なのはは目の前で生成されたファイヤーボールに驚きながらも、俺と視線を外さない

「高町……お前が今片足突っ込んでる魔法の世界はこう言う世界だ
これが本当の戦いになれば、お前達がやっている非殺傷設定なんて
のは生易しいもんだ

犯罪者などと戦うことになれば、そんな生易しい設定をしてくるやつなんていない……お前を殺す気で来るぞ

お前にできるのか？人を殺さずに戦いを終わらせることが……

お前に持てるのか？人を殺さずに倒す心構えてやつを……

それにな、非殺傷設定と言っても絶対に死なないわけじゃない……
心臓部分に直接攻撃を当てりゃ死ぬ可能性だってあるんだぞ？」

「なあ？」とリンディ艦長達のほうに顔を向けると、艦長は悔しい表情をしながらも首を立てに振った

なのははそれに驚いていた

人を殺す心配がないとずっと思っていたのに人を殺してしまう可能性があると知ってしまったのだ

「お前はなにか勘違いをしているんじゃないか？」

魔法を友達作りのための物だと思ってるのなら、魔導士なんて止めて普通の女の子に戻れ……俺が巻き込んだんだ……だからこれが最後通告だぞ？」

ファイヤーボールを消して、なのはを見つめる俺

言いたいことは言った

これで、なのはの考えが変わらないなら……そのときは俺が全力で彼女を守るっ……

Side Out

なのはSide

どうして？どうしてなの？

どうして貴方は私にそんなことを言うの？

せっかく会えて嬉しかったのに……やっと謝れると思ったのに……どうして？

「どうして？」

「ん？」

気づいてたら声に出ていたみたいでした

でも関係ない……一度出てしまったら、止めようとしても止まりません

もう、止められません

「どうして連夜君はそんなこと言うの!？」

せつかく会えたのに、なんでそんなこと言うの!？」

連夜君はわかってない!私のことなんて何も分かってないんだよ!!
連夜君なんて……連夜君なんて……」

そこから先が出てこなかった

ううん、出せなかった

私の前は涙でゆがんで見えた

でも、確かに見えた

連夜君が、またあのときの顔をしていた

一年半前、私が言った言葉を聞いたときの顔と、今の連夜君の表情はまったく同じだった

悲しそうな、辛そうな、それを全部押し殺して笑っている

そんな表情だった

そして気づいちゃった

ああ、また私は傷つけてしまったんだと……

でも、連夜君が次に言った言葉は、そんな私には信じられないような言葉でした

「友達……だからだよ……」

連夜君が私に言った言葉を、私は最初理解できませんでした……

「え？」

だから聞き返しちゃった

そしたら、連夜君は一度間を置いて、またはっきり言ってくれました

「友達だからだよ……」

お前が俺をどう思ってるかわからないが、俺は、高町と会ったあの日からずっとお前の友達だ……」

連夜君はまっすぐ私の目を見てそう言ってくれました……

私は、なんて言ったら良いのか分からない感情に襲われました

「それに、俺は約束したろ？」

お前の側を離れないって、お前をずっと守るってな……

前者のほうは無理になったが、それでも、俺はお前を守りたかった……だから仮面で素顔を隠し、お前の前に現れた……」

連夜君はさらに、「ふう」と息を吐いてからまた話し始めました

「まあ確かに、俺がこの世界に巻き込んだんだから、そもそも俺が高町にどうこう言える立場じゃなかったな……」

最後に苦笑いをして、連夜君は私に背を向けて、リンディさんのほうを向いていました

「艦長……俺は高町が貴方達に協力している間、貴方達に協力します……ただ、俺は管理局とは馴れ合うつもりはないので……あくまで民間の協力者ということにしておいてください」

連夜君はそれだけ言うと、まっすぐ出口の方向に向かって行きました

「待て！このアースラからの出方が分かるのか？」

クロノ君がそう言って連夜君を呼び止めます

でも、連夜君は「相棒が既に方法を調べ上げた」と言って聞きませ
んでした

その直後、連夜君の肩にお人形さんが現れた……あれは、初めて会
ったときに連夜君の肩に乗ってたお人形だと思いました

「解析完了です。いつでも帰れますよ？」

笑顔でそう言う人形さんを見て、みんなが驚いている

「に、人形が喋った……」

エイミーさんが目を輝かせながらそう言っていました

「ムウ！私は人形じゃありません！トオ！」

人形さんはむすつと脹れると、連夜君の肩から飛び降りました

すると、人形さんの体が光り輝いて、その輪郭が徐々に大きくなっ
てきて、光が晴れたときには、人形さんは大人の女の人になってま

した

「ふう……私の名はアテネです

あの姿は魔力を消費しないようにするためにしているだけですから……間違つても人形なんかじゃありません！」

最後に「い〜」と言ってアテネさんと連夜君は出口の扉を開けた

「あ……」

連夜君が行っちゃっ……

私は手を伸ばします

でも、連夜君はどんどん遠ざかって行きます

声も出したいのに、その声も出ません

そして、連夜君は扉の向こうに消えていきました

「……………ぐす」

駄目だと思っけていても、もう止まりませんでした

「連夜君……………」

名前を呼んでも、今はその声は届きません

届かなくても呼んでしまいます

『名前を呼べ……そしたらもう俺達は友達だ』

あの時の笑顔の連夜君が頭に浮かび上がります

もう、私にあの笑顔は見せてくれないのかな？

そう思うと涙は止まりません

涙はただただ流れて、止まる気配はありません

「ごめんなさい……」

ポツリとつぶやいた言葉

その瞬間、連夜君のあの哀しそうな、辛そうな笑顔が浮かんできます

胸が締め付けられて、苦しい

「ごめんなさい……ごめんなさい……連夜君……ごめんなさい」

何度謝っても、あの人はもう目の前にいません

私はまた傷つけてしまったんです

私はただただ、その場で泣き崩れるしか出来ませんでした

side out

「……………くっ！」

突然、クロノが連夜の後を追って部屋を出た

エイミーがそれを追いかけてよとしたが、リンディがそれを止めた

部屋を出て少し行ったところで、連夜とアテネは歩いていた

だが、突如その足を止めた

後ろから自分達を追ってくる人物に気づいたからだ

「ハア、ハア、ハア、ハア……………」

息を切らして立ち止まったクロノ

その姿を見ずに、連夜は口を開いた

「なんお用ですか？クロノ・ハラオン執務官……………」

一切感情の籠っていない声で連夜はそう言った

クロノはまだ肩で息をしていたが、一度咳払いして呼吸を整えて、連夜に口を開いた

「クロノで良い…口調もため口で構わない…」

「ではクロノ…………俺になんのようだ？」

振り向かずになんかそう言った連夜にクロノは少し怯んだ

とても先程の高町なのはと同年の少年には思えなかったからだ…

だが、それでもクロノは口を動かした

「君は……彼女とは友達なんだろう？ならなぜあんな言い方をする！？」

連夜は振り向かない……だが、その返答は返した

「リンディ艦長に最初会ったときに言った筈だ…口は褒められたことがないとな…

こんな性格でね、思ったことははっきり言わないと気がすまない夕イブなんだよ」

後ろ姿のためにその表情を確認することは出来ない

だが、クロノは内心連夜は自虐的に笑っているのでは？と思った

「だが、もつと言い方というものがあるだろう！？」

連夜は振り向かない

それがかえって不気味だった

「ほかの言い方？それをしたところで伝わる意味は一緒だろう……なら、ありのまま伝えたいほうが分かり易くて良い…

というより、そんなことを言うために俺を追いかけたのか？」

連夜は呆れたようにそう言った

クロノは怒りの声を出しそうになったが、それを飲み込んで連夜に問いかけた

「君は、彼女をあのスクライアの少年…ユーノと言ったか？
その子に紹介したといったな？なぜだ？なぜ彼女を巻き込む必要があった？」

その質問をしたとき、連夜の肩がわずかに動いた

アテネはそんな二人を黙って交互に見ている

どちらにも加勢する気はなさそうなので、クロノはアテネは放っておくことにした

「未来が……見えたんだよ」

「なに？」

クロノは思わず聞き返した

「完璧なものじゃない……断片的に、まるで映画の予告編のような感じで断片的にだが俺は未来を見ることが出来る……」

最初はそうだと気づいていなかった……夢の中で白い魔道士の少女が出てきてな……それが何回も同じ夢だったんだ

そして出会った、一年半前、その夢に出てきた少女そっくりの女の子とな……」

「それが、あのなのはだったと？」

クロノの問いに連夜はそうだと返した

「俺はそのころから魔法については知ってた
そして、俺はこの子と会ったのは偶然じゃないと思った
んで気づいてしまったのさ……この子は魔法なんかとはまったく関
係ない少女だったのに、ある事件に巻き込まれて魔道士の世界に無
理やり関わってしまったんだと……」

連夜はゆっくりと語りだした

クロノには背を向けたままだったが、クロノは連夜と面と向かって
話しているような感覚になっていた

「俺はそこから必死になって彼女が魔道士にならないように工作し
てきた

だが、俺が見る夢は決して変わらなかった……そして理解した……
これは変えようがない運命なんだってな
それに気づいた頃、高町に大嫌いで言われちまってな、あいつの側
に居れなくなった」

悲しい声で彼は自分の手を見ている

僕はその光景を見て思った

彼は、この年齢でいったいどれだけ戦ってきたのだろうか

どれほどの災厄、どれほどの敵から影ながら彼女を守ってきたのだ
ろう？

すると突然、彼はこちらを振り返った

そして、決意に満ちた目で己の拳を僕に向けた

「俺は一度取りこぼした……守りたかったものも何もかも……だが今の俺には力がある！守る力が、大事なものを守れる力がある！俺の大事なものがちよつとでも危険な目に遭うってんだったら、俺は迷わずこの力を使う！！」

クロノ……あんたにもあるはずだ……己の命賭けてでも守りたいもんが……」

その言葉に、僕の頭には二人の人物の顔が浮かんだ

一人は母さん、そしてもう一人は……エイミィ……

「その守りたいものを護る為なら、力を使うことも躊躇うな！俺は躊躇わない！」

たとえ世界の全部が敵になっても、俺は必ず自分の守りたいものは護る！」

最後に「偉そうに言って悪かったな……じゃ」とだけ言って、彼は再び背を向け、僕達を見守っていたアテネという女性と共に、転移ポイントまで歩いていった

『守りたいものを護る為なら、力を使うことも躊躇うな！』

彼の言葉が頭の中に響く

「守りたいものを、護るために……か」

自分の手を見て、次にデバイスを見る

それは言わば僕が持っている力だ

それを使うことを躊躇わない……

「面白い考えだ…… 大道連夜……」

既に視界からも消えた人物の名を呟いて、僕は母さん達のもとへと引き返した

S i d e o u t

第二十話（前書き）

お待たせしました第二十話

無印もよづやく終盤です

第二十話

連夜Side

「さて……………」

チラリと腕に付けられたブレスレットを見る

俺の手元には3個のジュエルシードがある

なのはの元には8個、フェイトの元には7個のジュエルシードがある

全部で21個のジュエルシードも残り3個となった

そしてその残りのジュエルシードも…………

「直に手に入るだろう…………海上の決戦でフェイトが暴走させて…………
初の協力作戦か…………」

原作での知識を思い出しながら独り言をつぶやく

「もうすぐ起きると思いますよ？先ほどフェイトさんが部屋を出て
行きました」

後ろからアテネがそんなことを報告してくれた

なるほど、お、転移反応…………なるほど、本当に直に起こりそうだな

なら…………

とアテネの方を振り返る

「アテネ、アースラに行くぞ?」

「合点です」

そう言っつてアテネは俺を抱き抱え、転移魔法の準備を始める

「座標軸固定……跳びます!」

その言葉を聞いた後か先か、どちらかは定かではない

しかし、ただ一つ確定事項なのは、無事空間跳躍に成功したと言っ
事だ

『ウー!ウー!ウー!』

無事に着いたと安心したら、突如辺りにサイレンの音が響いた

「あら〜」

大人アテネの姿のまま、彼女はしまったというような顔をしていた

「転移したのがマズかったか……」

まあ良い……さっさと行くぞ?」

俺達はそのままサイレン等を無視して奥に進んでいった

side out

リンデイスィデ

突如、アースラに侵入者を知らせるサイレンが鳴り響いた

この艦内に謎の転移反応があったのだ

直後に侵入者が現れたとして鳴り出したのがこのサイレン

このアースラは調査のためにこの管理外世界に派遣された為、まともな戦闘員は私を除けば息子のクロノだけだった

最近此方に協力者として参加してくれたのはちゃんとユーノ君をこんな状況で頼るわけにもいかず、私達は指令室で侵入者を待ち受けることになった

何故か侵入者を映すカメラはすべて機能障害を起こしていて、いったい侵入者がどう言った人物なのかも特定が出来ない

第一にこのアースラには転移ポートを使わずに転移出来ないように強力な結界が張ってあるというのに……

それを抜けて侵入してくる人物と言うことは……

「かなりの手練れね」

思わず考えた言葉が口に出たがそんな事を意識する余裕もない

既に侵入者はこの指令室と外を繋ぐ扉の外に居るといつのが分かっている

何故ならその人物が放つ馬鹿みたいな魔力が感じられるからに他ならないが……

『パシユウウウ』

扉はエイミイがしっかりと閉じておくようプログラムしておいたのに、それがいとも簡単に開いていく

「……………？」

この魔力は……………」

私の横でデバイスを構えていたクロノがそう言って構えを解いた

「クク、クロノ君!？」

「クロノ!？」

私だけじゃなく、その場にいた全員がその行動に目を丸くした

でも、クロノはそんな心配を余所に、呆れたような顔付きをしていた

「来るなら念話で伝えてくれ……………」

こちら側は臨戦態勢になってしまったぞ?」

まだ見えぬ侵入者にそう告げるクロノ

すると、扉の向こうから聞いたことのある声が聞こえてきた

「どつりで重苦しい空気だと思った
確かに勝手にそちらに転移してきたのはすまなかつたな……………ク
ロノ」

扉の向こうから現れたのは少年だった

しかもその少年は、昨日私の言葉の真意にただ一人気付いていた少年……………大道連夜君だった

side out

指令室に入った連夜は何故ここに来たのかの事情を説明した

「では、残りのジュエルシードは海鳴の海上にあると云うことなの？」

先程の戦う姿勢から一変、柔らかな表情と共に艦長席に着いたリンディ・ハラオンはそう云って連夜を見つめた

「間違いなく……………このブレスレットにある三つのジュエルシードが
そう伝えています」

連夜は腕のブレスレットを全体に見えるように掲げる

むろん連夜の言っていることはただの嘘っぱちだ

ただ原作の知識を知っているだけ…とは言い出せないのです、昨日クロノに話した『時折夢で未来を見る』と云うこれまた嘘の話を使い、フエイトの助力と救助をさせるつもりだった

昨日クロノに夢の件を話しておいたことでクロノはその話を信じ、クロノの信用＝安心としていたリンディやエイミィもこの話を信用した

「では海鳴の海上に向かいますよう

あなたの言ったとおりなら、間違いなくそこに最後のジュエルシードがあるはずよ」最後に含む言い方をしたリンディはチラツと連夜の方を見た

昨日の事で、リンディは連夜を何処となしに疑っているようだった

「か、艦長！」

そんな中、驚いたエイミィの声は辺りの空気を一気に緊迫した物へと変えた

「なっ！」

直後にモニターに映し出された映像にクロノも思わず驚きの声を上げる

今から自分達が向かおうとしていた海鳴の海上に、三つの巨大な竜巻が発生しているのだ

エイミィが矢継ぎ早に伝えた内容ではその三つの竜巻一つずつからかなりの魔力が関知されたそうだ

「あなたの言ったとおり……あそこにあったわね」

一瞬悔しそうな表情をしたリンディ

見間違いか本当にしたのか……今となつては確認する理由が見られない

それに、それを確認出来るほど、連夜は心中穏やかではなかった

その映像に映っているのは確かに三つの竜巻だ

だが、その竜巻に1人向かっていく物体が見えた

それが既にバリアジャケットをボロボロになるまで傷付いたフェイトであると彼が気付くのに時間は必要ない

既に知っていたことだから……

むろん気付いていたのは何も連夜だけではない

「あの子は！」

「フェイトちゃん!?!」

自分達と何度も戦ってきた少女のボロボロの姿に驚くのはとユーノ

そんな状態を見た彼女達が黙ってそれを見ていられる訳がなかった

「何処へ行く!?!」

と声を出したのはクロノだが、呼び掛けた相手はなのはではなかった

「……………助けに行く」

そう言ったのは大道連夜だった

「邪魔はしないでくださいね？」

邪魔するなら私が攻撃しなければいけませんので……………」

そうやって連夜の横に立ち、クロノ達に手を向けるのは大人アテネだった

なのは達はフェイトの下に向かおうとしたが連夜が呼び止められたので一時停止していた

「私達は今は一つのチームとして動いています

その中での勝手な行動は……………」

とリンディも少し嫌々ながらその言葉を言おうとした

「大道……………」

だが、突如息子のクロノが口を挟んだことで彼女は驚き口を止めた

「なんだ？」と背中を向けたまま答えた連夜

一方のアテネは額に少し汗…

彼女はこれでも神のため、下界であるこの世界での戦闘はタブーなのだ

連夜との訓練での模擬戦は何故かOKなのだが……………

先程クロノ達を攻撃すると言ったがアテネはそれが出来ないのだ
つまりは嘘っぱち

1人焦るアテネに聞こえてきたのは、少し頭を捻らせる問い掛けだ
った

「彼女は……お前の護りたいものなのか？」

真っ直ぐ連夜の背中を見たクロノはそんな事を言ってきた

これにはリンディやエイミィ、なのは達までも頭を捻らせる

しかし、連夜だけはその意味を理解したらしい

頭だけ少し後ろを向き、チラッとクロノと目を合わせて一言

「そうだ……」と

クロノはそれを聞いて少し笑みを浮かべると、「ふう」と息を吐い
て「なら……行ってこい」と告げた

「感謝する」と言っつて連夜はアテネと共に外に転移した

どうやら既に海鳴海上まで来ていたようだ

このクロノの発言に驚いたのはリンディやエイミィだ

「クロノ君!？」

「あなたなにを言って……」
とクロノを責めようとしたリンディやエイミィにクロノはしっかりとした目で答えた

「艦長、エイミィ……僕は目の前に護りたいものがあって、それを護れるだけの力があるなら、迷わずその力を使います
大道は、それをしようとしているだけです……」

と言ったクロノは最後に笑顔で言葉を付け足した

「それに、僕もまだ大人じゃありません……たまには感情に動かされても……良くないですか？」

その笑顔はここ何年かの間見たことがない、彼の子供のようないい笑顔だった

連夜 side

アースラの甲板に転移した俺達は、視線の先にある三つの竜巻を見つめた

既に体はエターナル（レッドフレア）一になっている

「あれ？アルフさんが居ませんか？」

アテネが辺りを見回す

そう言えばアルフの魔力を感じない

いつもならフェイトにべつたりの筈のアルフが居ないことは不気味ですらあった

しかし、ガタガタ考えていてもしょうがない

場所は海上、この姿では空も飛べないため、あの竜巻を止めるには一撃でマキシマムを撃ち込んで止めるしかない

だから俺はそれを速やかに実行する

『E t e r n a l ! M a x i m u m D r i v e ! ! 』

マキシマムスロットに差したエターナルメモリからエネルギーが解き放たれる

解き放たれた力は両腕に伝わり、腕に刻まれた真つ赤な炎のエンブレムから本物の炎が燃え上がる

「連夜さん、気をつけてくださいね？」

「任せろ」

後ろにいるアテネに少し視線を向けて、一気に足下の壁を蹴る

綺麗な山なりの軌跡を描き、徐々に三つの竜巻が近付いてくる

「どけテストロッサ!!」

竜巻に突っ込もうとしたフェイトに一喝

フェイトはそれに気付いて急停止、直ぐに俺を見つけた

「連夜！！」

「おおおおおお！！！」

雄叫びを上げて竜巻に突撃

両手で二つの竜巻の中心にあるジュエルシードを握り締め、その活動を停止させる

「っせい！！」

魔力が失われても竜巻が直ぐに消えるわけではない

僅かに残る竜巻の浮力を使って最後の一つへ跳躍

マキシマムスロットのスイッチを押し、再びマキシマムを発動させる

両腕に灯った炎でまたジュエルシードを握り締めようとしたが、意志があるかのように竜巻は威力を増した

「ぐっ！！」

思わず吹き飛ばされて体勢が崩れる

ならばと俺は両腕に灯ったマキシマムの炎を片腕に凝縮した

と誰かが俺の手を握ったので慌てて目を開ける（と言っても仮面を着けているので外からは見えないが）

落ちるものだから少しでも痛みを和らげようと意識を沈ませていたため、当初何が起こったか分かっていなかった

だが、直ぐにあるはずの無い浮遊感を感じて上を見る

「ふんにゅ〜」

其処には必死に俺の手を握って体を支えるのはが居た

だが、まだ幼いその体で大人の体になっている俺を支えるのは無茶に近い

事実、高度はゆっくり下がってきていた

「何してる高町！

お前まで落ちるぞ！」

そう言った俺になのはは首を横に振る

「ダメ！

もう離さない！

私はもう、絶対に連夜君を離したくないの！！！」

泣きそうになりながら俺に叫ぶ高町だが、一向に高度が上がる気配はない

むしろ徐々に落ちる速度も早くなってきている

「俺は大丈夫だ！」

この高さから落ちても死にやしない……下は海だ！

お前まで被害を被ることないんだ！」

それでもなのはが首を縦に振ることはない

下と言っても海だ

俺は泳いで行く自身もある

高町はどうかしらないが……

何にしても、いずれは高町が耐えきれなくなって一緒に落ちてしまう

それだけは避けたかったが、掴まれている俺の片手を高町は両手で
掴んでいるため離すことも出来なかった

「くそ！離せ高町！」

このままじゃお前まで！」

「いや！いやなの！！！」

最早駄々をこねる子供にも見えてきそうだが、そんな余裕が今の俺
にはない

そんな時だった

『パシッ！』

なのはが両手で掴んでいた俺の手に、もう一つの感触

「1人がダメなら、二人なら良いでしょ？」

そう言っただけ俺の手を握ったのは、フェイトだった

side out

なのはside

「1人がダメなら、二人なら良いでしょ？」

私の横でフェイトちゃんがそう言っただけ俺の手を握りました

フェイトちゃんが加わったことで、私の浮力も少しだけ戻ってきました

「お前ら……」

連夜君は何処か呆れたように頭を振りました

確かに連夜君が今ここで落ちても、連夜君は大丈夫だと思う

でもダメなの

連夜君が落ちていった瞬間、いてもたってもいられなくなって、気付けば連夜君の手を握ってた

自分でも分からないけど、この手は離しちゃダメだって思うの

だから離さない

絶対に、絶対に連夜君を助けるの！

「行くよ！」

「うんフェイトちゃん！」

二人で息を合わせて一気に連夜君と空に上がる

あっと言う間に高度は上がって、連夜君と一緒にアースラの甲板に降りました

「それじゃ……私は一緒に居れないから……」

フェイトちゃんは連夜君を降ろした後、名残惜しそうに手を離して離れていきました

でもちゃっかりジュエルシードは回収しちゃったりしてます

「おい、待てテストロッサ」

その時、連夜君がフェイトちゃんを呼び止めました

と言うより名前を知っていたのに驚きなの

「アテネ……テストロッサを多重転移で家まで届けてやってくれ
因みにあの状況を黙ってみていたお前に拒否権はない」

「ハウツ！」

ガーンって音が聞こえそうな表情をしたアテネさんは、フエイトちゃんの下まで飛んで、そのまま転移していきました

side out

「ふう……」

と言って変身を解き、ゆっくりと甲板に寝ころんだ連夜

なのははその横にちょこんと座った

「あ……あの……連夜君……」

先程まで散々連夜君と言っていたのに今は恥ずかしいようである高町なのは

彼女の心中では今日こそしっかりとお話ししようと心に決めていた

「砲撃させたの間違いだろ？」

連夜の咳きは無視しよう

何にしても、横に座っただけで何故か顔を赤らめもじもじしているなのはに対して連夜はゴロリと寝そべっている

と思われたが、突如状態だけ起こし、彼女の横に座る体勢になった

「ふえ？あの、その、えの……あううう」

と小動物のように小さくなるのは

連夜は横目でそれを見て楽しんでいたが、いつまでもそれを楽しむわけにもいかず、彼から話を切り出すことにした

「つたく……馬鹿やろうが……」

それが自分に向けられた言葉だと理解したなのは「あううう」と更に小さくなった

「無茶しやがって……」

「あうあう」

もはや小動物にしか見えないのは

そんななのはに、連夜はあるアクションを起こした

「……ありがとな」

そう言っただけ彼女の頭を撫でたのだ

「ふえ？」

最初なにをされたのか理解できなかったのは目はぱちくり

直後に何をされているのかという事を理解して顔をトマトのように赤く染める

「あ……あの……その……」

言葉を出したいが言葉が出て来ない

彼女の頭は既にオーバーヒート一歩手前だ

「あの……」……「ごめんなさい！
あううう」

そして肝心な所でかんでしまうと言っお約束

俯いた彼女だが、今ので何かが吹っ切れたのか、ゆっくり立ち上がり、横にいる連夜を見つめる

「ごめんなさい！」

そして猛烈な速度で頭を下げた

今度は連夜が目をぱちくり

彼に至っては謝ることはしても、謝られる覚えはこれっぽっちもなかった

「なんのこと……」

と口を挟む前になのははまた「ごめんなさい」と頭を下げた

連夜は首を傾げながら立ち上がり、肩にそつと手を置いた

「頭を上げてくれ高町……俺にはお前に謝ってもらっ理由なんて無いんだが……」

本心でそう言った連夜

一方のなのはそれを首を横に振ることで否定した

「私は連夜君を傷つけちゃった

ずっと連夜君は私を護ろうと、私の事をずっと考えてくれてたのに、私はそんな事ちっとも考えなかった」

徐々にそう言う少女の頬に伝うのは涙

彼女は泣いていたのだ

「本当にごめんね……連夜君

あたし初めて出来た友達に……何回も酷いこと言っちゃった
何回も傷つけちゃった……ごめんなさい……ごめんなさい連夜君……」

涙で震える声で、彼女は必死に言葉を紡ぎ、彼に思いを伝えた

彼はそれを黙って聞いていた

無視をしているわけでも、相槌をうつわけでもなく、彼はただ黙って少女の思いを聞いていた

「大道連夜君………こんな……こんな私だけど………もう一度友達になつてくれますか？」

最後のほうは泣いていて正確に聞き取りにくい物だったが、彼女はしっかりと自分の思いを伝えた

後は、それに目の前の少年が答えるだけだった

思いを伝えた少女は涙を止めることなく、鼻をすすりながら答えを待つ

一瞬の沈黙、少年がとった行動は、そんな彼女を抱きしめると言うものだった

「ふえ？ふえええ？」

「高町……」

驚く少女の耳元で、少年はゆっくり呟いた

「お前の思いは確かに聞いた……
だから、お前が出した問いにも俺は大真面目に答えるよ……」
そして、少年はしっかりと彼女の目を見つめた

「昨日にも言っただろ？」

俺はずっとお前の事を友達だと思ってる
だからもう一度、じゃない……これから俺達は友達だ
な？高町なのは」

そう言って少年は少女に笑いかけた

その瞬間、彼女は瞳から洪水のように涙を溢れさせ、少年の胸に飛び込んできた

「ふわああああん」

少年の胸でただ涙を流す一人の少女

少年はそんな少女を優しく抱きしめていた

そして、その二人を遠くの物陰から見守る少年が一人

ユーノ・スクライアである

「やれやれ……良かったよ」

心底安堵したような表情を見せるユーノ

「ほう……何が良かったんだ？」

と横から現れたのはクロノ・ハラオンだ

「わあ！く、クロノさん」

思わぬ登場にびっくりのユーノ

「クロノで良い。何故かは分からないが、君達に敬語で喋られると背中がかゆい」

苦笑いでそう言うクロノ

「じゃ、じゃあクロノ……どうして君が此処に？」

「いや、あの二人が気になってな

大道が出て行ったのは分かっていたから心配していなかったが、まさかあの子まで飛び出すとは思わなかったしな」

それを聞いたユーノは苦笑い

「転移ポートも誰かが勝手に起動させたみたいだし」と横目でユーノを見るクロノ

対するユーノは苦笑いから乾いた笑みに変わる

「で？何が良かったんだ？」

会話を戻そうとそう問い掛けるクロノ

ユーノは表情を元に戻し、甲板で抱き合う二人を指差した

「あの二人、僕が知り合ってからもずっとギクシャクしてたみたいで……今回その壁がようやく無くなったみたいで、本当良かったって意味だよ」

ユーノがそう言ってやれやれと頭を振ると、クロノは思わず吹き出した

「まるで親みたいだな

いやしかし、彼女もそう……と言うことが」

クロノは二人を優しい目でみていた

「そう……とはどう言うことだい？」

首を傾げるユーノ

クロノは笑みを崩さないままこう言った

「彼女もまた大道の護りたいものだと言うことだよ」と…

「なるほどね」

既に日ゆっくりと沈んでいき、二人はその夕日の光に照らされていた

その二人を遠目から見つめる二人の少年達

この四人の中で、目に見えない何か繋がったように思えた

第二十話（後書き）

いやはや、やっとなのはと和解です

次回は二人の最終決戦

連夜のその後の行動にご期待ください

では、また次回

第二十一話(前書き)

決闘の回です

無印終結までもう少し、頑張って書きます

第二十一話

連夜 side

「そうですね……」

「はい、娘さんを勝手に預かってしまい、申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げるリンディ艦長

横に座るクロノとエイミィも同じ様に頭を下げていた

「お父さんお母さん、あのね、私が自分から手伝わせてっってお願ひしたんだよ？」

だから、みんなを怒らないで………」

涙目でそう訴えるなのは

言い忘れたな

此処はなのはの実家、翠屋だ

何故此処に来ているのかというと、正式になのはを協力者として認識する為に、家族に了解をとると言う事のためだった

だから、先程艦長達が頭を下げたのは、この家の主である高町士郎さんと奥さんの桃子さんだ

まあ実質原作の話でもこの話があった話だからなんら違和感はない

ただ一つ言えるのは……………

「君とは普通の件で会うことがないね……………連夜君」

「そうですね」

俺の前に座っているのが土郎さんと恭也さんであり、二人は俺をめちゃくちゃ見ているという事だ

もちろん、俺の件もすべて話した

自分がこの世界に巻き込んだことも、俺の夢の話と織り交せてだが

……………

「お父さん……………」

なのはは何とか穏便に話を進めようと考えているようだが、どうも俺にはそれは無理なような気がしてならなかった

なんせ娘と小さなころ遊んでいた少年がいまや娘を命の危機に晒すほどのことに巻き込んだのだ

しかもそれを少年は知っていて娘に近づいたのだ

これを利用するために近づいたと考えるのは当たり前前の思考だろう

俺は当然二人には何を言われても耐える気でいたのだが……………

「すまないね……………連夜君」

士郎さんが言った言葉に耳を疑った

「君はあんなに小さなころから、この子の事を必死に考え、助けようとしてくれたんだ……」

私達はそれに気づいてやる事が出来なかった……親として恥ずかしいよ……本当にすまない」

「連夜……僕からも言わしてくれ……本当にすまない……そして、妹を守ってくれてありがとう……」

士郎さんだけじゃなく、恭也さんまでそんな事を言い出した

「いや、俺は結局何も出来なかつたんです……」

この世界に巻き込まれてしまったわけですから……お二人がそんなに頭を下げる必要なんてないんですよ」

二人は「それでも言っておきたかった」と言ってもう一度頭を下げた

「連夜君……これからも、この子を……なのはをお願いできるかしら？」

そう言っただけに笑いかけたのは桃子さんだ

「え、でわ……」

と艦長が桃子さんに聞き返す

「はい……私はこの子の意志を尊重したいですし、家族内もそういう意思で纏まります」

連夜君、さっきの答えをもらえるかしら？」

艦長にそう言った後、再び俺に視線を向けた桃子さん

気づけばみんなが俺に視線を集めていた

「分かりました……これからも、彼女は俺が護ります」

「と云うことよなのは

貴女は貴女が思うように頑張りなさい

貴方、恭也、それで良いわね？」

俺の答えに満足げな桃子さんはなのは、土郎さん、恭也さんの順番にそう言つと、なのは喜び、土郎さん達はゆっくりと頷いた

「連夜君、君なら任せられる

なのはを頼んだよ」

「連夜、妹を頼んだ」

まるで娘を嫁に出すような状態になってしまっているため、俺は慌てて二人に「今生の別れじゃないんですから……」とツッコんで見たが、それも意味なし

「れ、連夜君……」

そう言つてチヨコチヨコと俺の横に来たなのは

心なしか頬が赤いような

「ふ、ふつつか者ですが……」

そう言っぺこりと頭を下げたのはに思わず転ける

「あらあら連夜君、大事にしなきゃだめよ？」

と桃子さんと談笑しながらおもしろ半分になつた艦長

「ちょ、リンディ艦長まで……」

なのはの協力を承認してもらつたために来たのに何故こんな事にと内
心思ったが後の祭り

和やかな会談は暫く経つたのちに解散した

side out

「やれやれ……」

家に帰つた開口一番がそれだった

「なんであんな話になつたんだか……」

と呆れ口調で部屋に入っていく連夜

その時、リビングのソファで寝ているアテネを見つけた

「アテネ？今帰つたのか？」

近付いてそう言つとアテネはゆっくりと上体を起こして「そうです」

と返した

その顔にはいつも見せない疲労の色が見えた

「どうしたアテネ？」

帰りもずいぶん遅かったし、テストロッサの家で何かあったのか？」

「ああ……はい

実は……」

アテネが伝えた内容は一瞬俺の頭をフリーズさせた

「なんだと？」

すべてを聞き終え、思わず聞き返してしまった

「事実なのかそれは？」

思わず語尾が強くなる

アテネの表情は暗かった

「アテネ……！」

気付けば彼女の肩を掴んでいた

まあこんな子供がやっても迫力はないだろうが……

それより、アテネの瞳が濡れていることに気が付いた

それが無言の肯定だと気付くのに時間は必要なかった

「本当……なんだな」

プレシアが既に死ぬ寸前まで来ている

それがアテネが伝えた内容だった

彼女は神だ

だから治そうと思えば一瞬で治せたのだろう

だが、そんな彼女に現れたのは神としての制約

俺に色んな事は出来ても、それ以外では神の能力を使うことは禁じられている

人並みの治療しか出来ない中、徐々に弱っていくプレシアを見てられなかったと言うのがアテネの表情が暗いのと弱った原因だ

あの時アルフが居なかったのも、フェイトに言われてプレシアの看病をしていたかららしい

アルフにはプレシアは全てを話しており、フェイトには単なる風邪だとアルフにも言うようにしていたようだ

原作でも確かに病によって体を犯されてはいたが、まだ幾分元気なほうだった…

このまま原作通りの話を待っていたら、プレシアが持たない

「ふざけるな！」

と気付けばアテネから手を離し、壁を殴りつけていた

鈍い痛みと血が出たが、それがかえって俺を冷静にしてくれた

そくだ……待っていてられないなら、此方からアクションを起こそう

プレシアが死んでは何のために今まで努力したのか意味がない

『もう取りこぼさない……』

心でそれを呟き再認識

俺は急ぎフェイトに念話を使った

side out

『テストロッサ……聞こえるか?』

母の看病をしていたフェイトに突如念話が

声の主が連夜だと言うことは分かったが、何故この場に念話を繋ぐことが出来たのかと不思議になったが、まあ連夜ならと納得してしまっフェイトだった

『聞こえるよ連夜。どうしたの?』

『いや、実はお前達の手助けをしてやろうと思っただけ……』

そう言っただけ連夜はその内容を話し始めた

遠回しに色々と言取られないように話していたが、要約すると、ジュエルシードは既に俺を含めた全21個が全員の手持ちにある

フェイトの目的はジュエルシード全ての回収

フェイトと戦っていた白い魔導士の目的もジュエルシード全ての回収互いの実力も拮抗していた為なかなか全てを手に入れると言っただけが出来なかったため、全力全開で決闘し、勝者に持っている全てのジュエルシードを渡すと言っただけだ？

と言っただけだ

フェイトはプレシアを看病していた為少し考えていたが、プレシアの願いだろ？と言っただけ言葉が聞いたらいい

決闘の時間を聞いてきた

連夜は時間を海鳴の時刻で午後三時とし、場所は海鳴海岸と告げた

『分かったよ……じゃあまたその時間に……』

プレシアには俺が話しておくと言っただけ連夜の声聞いて念話を終了

自身の相棒バルディッシュに一度目をやり、その後自身の使い魔アルフ、そして母であるプレシアを見る

『絶対に勝つよ……フェイト……』

自分で自分を奮い立たせ、握る拳を作るフェイトだった

一方、眠っているように見えるプレシアは実は連夜と念話で会話中だったりする

『……………それで？』

私にそれを教えてどうするつもりなの？』

病がだいぶ侵攻しているのだろう

弱々しくそう言ったプレシアに連夜は必死に動揺を気取られまいと
していた

『テストロッサが破れた場合、お前の夢は絶たれるわけだ……
あのもテストロッサにジュエルシード回収を命じたって言うこと
は、まだ諦めてないんだろ？』

『……………』

無言を肯定ととった連夜は話を進める

『テストロッサが敗れた場合、管理局は間違い無くお前の下に攻め
込んでくる……』

まあお前の判断は任せる……

だがなプレシア、一言いっておくぞ？

……お前の気持ちに素直に生きるよ?』

そう言っつて連夜からの念話は切れた

ゆっくりと目を開けたプレシアの前では、自分を看病しているフェイトとアルフが居た

「お母さん……あのね……」

決意に満ちた目で口を開いたフェイト

だが、プレシアはそれを抱き締めると言う行動でそれを止めた

「連夜からすべて聞いたわ……頑張りなさいフェイト」

優しく、慈愛に満ちた声でそう言ったプレシア

フェイトは目頭が熱くなったが、今はそれを堪え、「はい!」と力強く返事をした

プレシアはそれを見て再びベッドに横たわる

フェイトはアルフに「お母さんを宜しくね」と言っつて、海鳴に向かっつていった

現在午後2時55分

海鳴海岸

対峙して立つ二人の魔導士の少女と、それを見守る二人の少年

前者はフェイト・テストロツサと高町なのは

後者はユーノ・スクライアと今回の決闘を提案、審判を買って出た
大道連夜だった

連夜が一步前に出て、二人に注意事項を説明する

「今回は本当の1対1の真剣勝負だ
よって、部外者の乱入はもちろん違反行為とし、助力をされた場合
はそのされた側は即効反則と見なし、その者の反則とする
勝ち負けは相手が負けたと思わなければ負けではない
互いに全力を尽くすこと……異論は？」

「ないよ、連夜君」

「こつちもないよ、連夜」

問い掛けた両者は即答だった

それに、まだ始まってもないのに二人の間では火花が散っていた

『絶対……負けない!!色んな意味で!!』

二人ともチラリと連夜を見て、改めて決意を固める

連夜は一度首を傾げて「まさかな…」と呟いて手を挙げる

「はじめ!」

勢い良く手を振り下ろし、開戦のGONGは鳴ったのだった

クロノside

「はじまったわね」

横の艦長席に座る母さんがポツリと呟く

僕もその視線はさっきからモニターに釘付けだ

桃色の光弾と黄色の光弾が空中でなんどもぶつかり合う

一方はなのは、もう一方はフェイト……とか言ったか…

フェイト・テストロッサ……あの大魔導士プレシア・テストロッサの娘……となっているが、既にこちらの調べでプレシアの一人娘であるアリシア・テストロッサは事故で死亡していることが分かっている

戸籍がない彼女はつまり……

「人間ですよ?クロノさん……」

何もかもを見透かしたような目で僕を見つめたのは、エイミィの横で敵の本拠地の転移座標を入力しているアテネという女性

連夜は相棒だと言っていたが、デバイスの類でも使い魔でもない……
…と言うより、今彼女は僕の心を読んだのか？

「そうですね？」

あっけらかんとそう言ったアテネ

僕の背筋に凄まじい悪寒が走った

「クロノさんが失礼なことを考えるからですよ……例え生まれはど
うであれ、彼女はれっきとした人間です

まあ、初めて聞けば確かにそう言う考えを持ってても間違いではあり
ませんがね……ここに居る全員が全員一度は考えてますから」

彼女の横に座るエイミィの肩がピクリと動き、僕の横で座っている
母さんから僅かに声が漏れた

「失礼、変に話を広げすぎました……仕事に戻ります」

そう言って再び画面と向き合い、何かを入力していくアテネ

僕は下手すれば連夜よりも彼女のほうが性質が悪いのではないのか
?と迷ってしまった

「はあ、心が読めるって言ったのに……」

アテネが小さく言った呟きは僕には聞こえなかった

『やあああ……』

モニターから聞こえた声で僕の視線はまたモニターへ

そこには先ほどよりも激戦をしているなのは達が居た

side out

『ガイン!』

互いのデバイスを振り下ろし、激突させる二人の少女

「くっ!」

『Photon Lancer……!』

フェイトのデバイス「バルディッシュ」が魔法の名を読み、主の周囲に雷の球体を数個発生させる

「こっちも!」

『Divine Shooter』

なのはのデバイス「レイジングハート」もまた主の周囲に桃色の球体を展開させる

「ファイヤ!」

狙いを澄まし、なのはに向けて雷の球体を打ち出す

「シュート!」

一方のなのはもそれと同タイミングで桃色の球体を打ち出した

フェイトの攻撃は一直線なのに対して、なのはの光球は回避するフェイトを必要に追いかける

うまく回避したなのに対して、フェイトは迫りくる光球にシールドを展開したが、相殺されてしまった

「あっ！」

そのことに驚きを隠せないフェイト

その間をなのはは見逃さず、再び展開した桃色の球体を、フェイトに向けて撃ちだした

「シュート！」

デバイスを振り、それが合図とばかりに幾重の軌跡を描いて飛んでいく光球

フェイトはバルディッシュを鎌のような形態に変形させ、それらの光球を破壊すると言う手段をとった

『バス！バス！』

迫りくる球体を一刀両断

あっという間になのはに詰め寄り、バルディッシュを振り下ろす

「くっ！」

僅かに反応が早かったなのはだったが、回避するには時間が足りず、
迫り来る雷の切っ先に手をかざした

『Round Shield』

レイジングハートが魔法を読み上げ、かざしたなのはの手を中心に
桃色の魔力の障壁が生まれた

切っ先は障壁に阻まれ直撃にはならなかったが、フェイトはそれごと
と破壊しようとバルディッシュを持つ手に力をこめる

「……………」

それに対してなのはは目を瞑り、意識を集中

直後、フェイトの後ろから桃色の球体が迫ってきていた

「なっ!」

間一髪、それに気づいたフェイトも障壁を展開して何を逃れた

だが、再び視線を戻した先には、なのはの姿はなかった

「どこに……………」と敵を探すフェイト

その敵は上から彼女に迫っていた

「はっ!」

視線を上げるとなのはがレイジングハートを構えて向かってくる

「せーい！」

叫びと共にデバイスを振り下ろす、フェイトもバルデッシュを盾にそれを受け止める

「くっ！うう……………」

「っ！」

上からの攻撃はいなされると弱いもの

うまく攻撃の威力を横に流されたなのは、その一瞬でフェイトの姿を失う

その背後で鎌を構え、どこぞの暗殺者よろしの状態でなのはに切りかかる

「あっ！」

紙一重で避けたのはだが、切っ先にリボンが掠り、少しばかり切れてしまった

一歩間違えばあぁなっていたと恐怖するなのは

だが、フェイトは息つく暇も与えない

彼女が避けた先には、数個の雷の球体が設置されていたのだ

『ファイヤ……』

冷たく、冷酷に、バルディッシュが発した単語で球体はなのに向かっていく

なのは急いでシールドを展開するがその威力に体は揺らされ、まともに回避はできなかった

「はあ、はあ、はあ、はあ………」

「はあ、はあ、はあ、はあ………」

両者一步も譲らない戦いは互いに体力を著しく消費し、現在肩で息をしているような状態

『初めて会ったときは、魔力が強いだけの素人だったのに……もう違う……早くて……強い……迷ってたら……やられる!』

その瞬間、フェイトを纏っていた空気が変わった

彼女の足元を中心に、巨大な魔方陣が広がっていく

なのはもその変化は感じ取っていた

だが、あらゆる場所に現れる黄色の魔方陣の数に、どうすればいいのか判断を決めかねていた

『Phalanx Shift』

バルディッシュが冷静に言葉を発する

その瞬間、フェイトの周囲には30は超えているほどの数の雷の光球が生成されていた

「！」

なのはがそれに気づき、レイジングハートを構えたが時既に遅し、直後に彼女は四肢を円形の物体で拘束された

「ライトニングバインド……………」

「出るか……………テストロッサの奥の手だ」

今まで冷静に状況を分析していた連夜がぼつりと呟く

その横で決闘を観戦していたユーノは慌てていた

「まずいよ！あんなの食らったらなのははひとたまりもない！」

「落ちて着けユーノ、俺達が手出しすることは許さん……………」

冷酷にすら聞こえる連夜の声に、ユーノは反論しようとするが、それを念話でなのはが仲裁する

『良いの、ユーノ君……………これは、全力全開の一騎打ちだから……………私とフェイトちゃんの勝負だから……！』

『でも…………』と言いかけたユーノを制し、連夜が口を挟んだ

『ならば、見届けさせてもらうぞ高町……………心配するな、海に落ちる

前には助けてやる』

連夜の軽口になのはは笑顔を見せた

瞬間、念話を切ってフェイトに視線を移す

一方のフェイトは胸の前で腕を組み、呪文を詠唱していた

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・フアランクスシフト。撃ち砕け、ファイアー！」

それはまさに雷

いや、形状からすれば流星と呼ぶほうが合っているかもしれない

フェイトの一声で周囲に生成されていた球体は一気になのはの許へと向かっていった

「っ！」

はたして、防御と言う手段をそこに投じる暇があったのであろうか？

なのはが居た場所は今や爆煙に飲まれ、その姿さえ見ることはできない

また、フェイトは追撃の手を休めず、尚なのはの居るであろう場所に光球を打ち続けた

「なのは！！」

ユーノが叫ぶが叫んだところで意味はない

今やなのはの姿は爆煙が晴れなければ分からない状況となっていた

「はあ、はあ、はあ、はあ……………っ！」

先ほどの一斉射撃はよほどの魔力を食ったのだろう

フェイトは立っているのも浮いているのもやっとの状態だった

だがそれでも最後を確認するまでは気を緩めるわけにはいかない

残った極小の光球を一つに集め、空いている手で握る

「はあ、はあ、はあ……………あ！」

煙が徐々に晴れる中、フェイトに見えたのは魔法陣

薄い桃色の魔方陣を展開し、なのはは其処に居た

と言っても喜べる状態ではない

彼女のバリアジャケットはかろうじて原型を留めているだけであり、
満身創痍の状態であった

「いったあゝ……………撃ち終わると、バインドても解けちゃうんだね
……………今度はこっちの……………」

そう言っただけで彼女はしっかりとデバイスを握り、先端をフェイトに向

ける……その目はまだ死んでいない

レイジングハートもそれに応えるように、先端に魔力を凝縮させ、魔法を読み上げる

『D i v i n e……………』

凝縮された魔力はやがて形となり、巨大な球体状に生成されていく

「番だよー!!」

なのはがそう言った瞬間、レイジングハートの先端に凝縮されていた魔力が臨界点に達した

『B u s t e r』

凝縮された魔力球は一筋の光線となってフェイトに放たれる

「ぐっ!うおおおおお!」

手に持っていた光球を投げつけるフェイト

だが、まるで水に溶かした砂糖のように、その光球は桃色の光線の前に消滅してしまった

「なっ!」

その光景に驚き、即座にシールドを展開したフェイト

だが、シールドにぶち当たった光線は生半可な威力ではなく、フェ

イトは其処から身動きがとれない状況となっていた

『直撃！？でも耐え切る……あの子だって…耐えたんだから!!』

そう言つて必死に耐えようとするフェイトだが、やはり威力が凄まじい

徐々にその衝撃は彼女のバリアジェットを破壊していった

「くっ！あああああああ！！」

耐え切るとは言ったものの、彼女にそれを押し殺すことなどできず、思わず苦痛の声を上げてしまう

光線が止み、シールドが消えていく

肩で息をしながら、なんとか耐え切ったと息を吐くフェイト

だが、直後に彼女は絶句する

凜とした表情で、敵であるのははレイジングハート空に掲げ、足元に巨大な魔方陣を展開していた

「受けてみて……デイバインバスターのバリエーション……」

『St arll i g g h t B r e a k e r』

レイジングハートの声とともに、周囲に漂う残留魔力が足元の魔方陣に収束されていく

「させない!……えっ!？」

それを阻もうとしたフェイトだが、いつの間にか先ほどのように、四肢をバインドで拘束され、身動きが取れなくなっていた

「……………」

足元の魔方陣に収束される魔力を見ながら、彼女はあることを思い出していた

それは、自身が始めて魔法少女として戦ったときの記憶

収束が不完全だった為に魔法が失敗し、自分が危機的状況になったときに、助けに来てくれた純白の戦士

後にそれはかつて自分が傷つけてしまった愛しい人

自分の思い人

その人が言った言葉、そして見せてくれた魔法（魔法かどうかは定かではないが……）

『白い魔導士よ……よく見ておくと良い』

収束系魔法とは、こうするものだ……』

「連夜君……まだ貴方のようにうまくは出来ないけど……私の努力の結果、よく見ていてね!」

自分を見つめる思い人に一言

聞こえる筈のない言葉を呟き、少女は敵にトドメの一撃を放とうと
していた

「これが私の全力全開……スターライトブレイカー!!」

振り下ろされたレイジングハートはその先端から魔力光を発射する

直後、それがすべての引き金となって、魔方陣から極太の魔力の濁
流が放たれた

それはあつという間にフェイトに迫り、身動きのとれないフェイト
は何の抵抗も出来ず、その光の中に消えていった

第二十一話（後書き）

次回は時の庭園に突入させようかと思っています

更新がんばります

第二十二話

『スターライトブレイカー!!』

一瞬戦場を映していたモニターが桃色一色に染まった

その光景に呆然とするアースラクルー達

「な、なんてデタラメな魔力だ……」

「フェイトちゃん……大丈夫かなあ？」

思わず敵であるフェイトの心配をしてしまうエイミィに、なのはのデタラメ度に呆れるクロノ

リンディはその表情を少し驚いた程度にしか変えていないが、内心『あれよりも魔力量がある大道君はどうなるんだろう』と考えていた

「ふふ……」

その心情を読んだアテネは一人ほくそ笑んでいた

一方、時の庭園はと言つと……

桃色の濁流に飲み込まれたフェイトの映像を見た時点で敗北を確信したプレシアは、見ていたモニターを消した

「フェイト……」

主の敗北にショックを隠せないアルフ

しかし、母であるプレシアはどこか清々しい表情をしていた

「あの子は……良くやったわ」

プレシアがぼつりと呟いた

「全力を出したんだもの……」

誰もあの子を批判できないわ……

ゴホッ！ゴホッ！」

言っている最中に咳き込んでしまうプレシア

アルフは優しくその背中をさすった

しかし、プレシアが咳をしたときにとっさに口を抑えた手

その手には血が付着していた

「プレシア！あんた……」

アルフが心配そうな顔付きになる

だが、プレシアは気にするなと顔を横に振った

「あの子の……フェイトの下に行ってあげて……そして、あの子
のことを……宜しくね」

それは実質の別れの宣言だと悟ったアルフは「何言ってるんだい！」と怒ったが、プレシアは聞かなかった

「私はこれから……あの子に嫌われるような事をするわ……」

あの子が今後、どれほど私のことを蔑んでも、貴女は決してそれに反発しないで……

私は酷い親だったと言いなさい……分かった？」

「んな事……言えるわけ無いじゃないか！！」

そりゃ最初はあんたのことを人でなしと思ったさ！

でも……今のあんたをそんなふうに思えるわけ……」

アルフは言いながら涙が溢れ、言葉がうまく繋がらなかった

プレシアはゆっくりと状態を起こし、アルフを優しく抱き締めた

「フエイトのこと……お願いね

あなたもまた、私の家族だったわ……

行ってらっしゃい……アルフ」

「っ……」

初めて、名前を呼んでもらった

初めて、母親と言うものをアルフは知った

だからこそ、彼女の目から涙はとめどなく溢れる

それこそ決壊したダムのように

降り続く雨のように

だが、彼女はその涙を拭き、しっかりとプレシアを見つめた

「分かったよ……………お母さん」

それだけを言って、アルフはフェイトの下へと向かっていった

決して振り向かない

振り向けば決意が揺らぐ

母が初めて与えてくれた約束を胸に、アルフは去っていった

「フェイトのこと……………偉そうに言えないね

そりゃ従っちゃうよ……………お母さんの頼みなら……………」

転移する瞬間、アルフは自嘲した笑みで一人呟いた

「……………グフツ!!」

アルフが部屋から出て行って暫くした瞬間、プレシアは吐血した

そこから咳が止まらない

「ゴホツ！ゴホツ！……………ふー、ふー」

ふらつく体に鞭打ちながら、プレシアはベッドから降り、ベッドに立て掛けていた杖を支えに、体を転移させた

「……………」

転移先はあの研究室

彼女の前には、特殊な液体の入ったフラスコで眠る、フェイトそっくりの幼女がいた

「アリシア……………ごめんなさいね…」

お母さん、結局なにも出来なかったわ……………

フェイトにも、貴女にも……………でも…お母さんは、じきそっちに行くわ…

待ってて……………ね」

苦しみながらも笑みを浮かべるプレシア

アリシアは何も言わない

反応もない

当然だ

彼女は死んでいるのだから……………

だが…

『お母さん……………』

だが、彼女の魂だけは現世に止まり、母であるプレシアをずっと見守ってきたのだ

その声は決して届かないと知りながら……

「フェイト……」

足下に映し出したモニターには、連夜に抱き抱えられたフェイトが映っていた

「ごめんなさい……でも……貴女の為よ……」

そう言っただけで彼女は、愛する娘に向けて時空を超えた雷を放った

時はなのはがスターライトブレイカーを撃った直後まで遡る

海を割る威力を見せた桃色の砲撃は、徐々にその威力を落とし、最終的には綺麗に消えていった

その後に残ったのは、肩で息をするなのはと、浮力を失い、そのまま海に落ちていくフェイトの姿だった

「フェイトちゃん！」

と彼女が向かうよりも早く、フェイトが落ちようとしている海に変化が起きた

海面が一瞬にして凍り付いたのだ

そして、海岸の方向から此方に向けて走ってくる一つの影

それが誰なのか？

考えるまでもなかった

「連夜君！」

分かっていたからこそ彼の名を呼ぶ

少年は返事はせず、ニヤリと笑った

状況的にはフェイトは彼がその下に来る前に落ちてしまう

ならばと少年がとった行動はスライディング

そのまま一気に滑り込み、フェイトを体で受け止めて、滑ること
その衝撃を打ち消した

「ふう〜間一髪」

そう言って抱きかかえたフェイトを見る

「うっ！うっ……………」

少しばかり声を出して、ゆっくりとその目を開く

開いた先には自分の少し気になる人の顔があった

「れ、連夜！」

途端に顔を真っ赤にするフェイト

それに気付かず、連夜は優しく笑った

「お疲れさん……テストロッサ」

その一言で急速に頭が冷却される

ほぼ同タイミングでなのはが降りてきた

何故か膨れっ面だが…

「フェイトちゃん……あたしの勝ち…で良いのかな？」

そう問いかけたなのはに、フェイトは暗い表情をしながらも、「そう……だね」と言って敗北を認めた

「恥じることはないぞテストロッサ……」

お前は全力を出して負けたんだ

その敗北は必ずお前をまた強くするだろう

だから、その敗北はしっかり覚えておくんだぞ？」

「うん……分かったよ…連夜」

優しく頷く少女に、連夜は無言で笑みを送った

すると……

「むう〜……連夜君？」

あたしだって頑張ったんだよ？」

膨れっ面のなのはがそうやってきた

「ハイハイ…お前もよくあんな技を完成させたな
良くやったぞ」

そうやって頭を撫でてやると、なのはは「エへへ」と嬉しそうに撫でられていた

ツインテールまでピヨピヨと動いている

うん、気にしない気にしない

そんな和やかな空気と言うのはいつまでも続きはしない

『連夜さん！上です！…！』

そのアテネの念話が早かったのか、それとも遅かったのか……

ともかく、その念話が聞こえた瞬間、連夜の頭上から雷が落ちてきた

「Gマナシールド…！」

頭上に手をかざして魔法の名を唱える連夜

直後、連夜のかざした手を中心に、巨大な円形の障壁が展開された

『バチイイイイ！…！』

直撃した雷は障壁越しにでも分かるほど凄まじい威力を持ち、連夜

のかざした手にはかなりの負荷が掛かっていた

「ぐっ!!」

雷が収まり、その場に膝をつく連夜

彼に抱えられていたフェイトや、近くにいたなのはは彼を真剣に心配した

「大丈夫だ……問題ない」

と言いつつ、雷を防いでいた連夜の手はガタガタと痙攣している

余っているほうの手で震える手を抑えようとするが、一向にそれは止まる気配がなかった

「フェイト!!」

「なのは!!」

そんな三人に向かって走って来たる影

一人はユーノだったが、もう一人のアルフの存在にフェイトは驚いていた

「アルフ!?なんで此処に……」

「そ、それは……」

口ごもるアルフ

訳在りだと悟った連夜はクロノに念話を繋いだ

『どうした？連夜』

『今の雷、何処から撃ってきたか分かったか？』

『ああ、直に僕達でそこを制圧する手筈だ

既に管理局本部から陸戦魔導士が数名派遣されているはずだ』

やはり、と連夜は内心思う

その後、フェイトやアルフを含めた全員をアースラに転移させてくれと交渉し、クロノはこれを承認

転移した5人は急ぎアースラブリッジに向かった

ブリッジに着いた5人の目に飛び込んできたのは、デバイスを構える陸戦魔導士達に紫の雷を放つプレシアと、その雷を食らい倒れていく魔導士達だった

『それに触らないで！！』

そして遂に、あの場所がアースラのモニターに映し出された

特殊な液体の入ったフラスコの中で眠るように居る少女

その容姿はまるで……

「フェイトちゃん？」

思わずなのはが呟いた

その瞬間、アースラクルーは一斉にフェイトの顔を見る

とうのフェイトは目を見開き絶句した様子だった

「フ…フェイト……」

アルフはフェイトに声をかけるが、本人には聞こえていないようだった

『フフフフ』

狂気のお笑いをしたプレシアがモニターに映る

誰もがこいつが今回の黒幕かとその人物の顔を見る中、連夜やアテナは他と違った感情で彼女を見ていた

それはプレシアの真意を知るためでもあった

『フェイト……其処にいるのかしら？』

この子はね、アリシア・テストロツサ……私の一人娘よ

貴女はこの子のクローン……お人形だったのよ……

貴女にある記憶も、何もかも造ったものよ！

フフフフ…貴女にジュエルシードを集めさせたのも、この子を蘇らせるため……

でも貴女は負けてしまったから、もう要らないわ

私はこのジュエルシードとアリシアと共に、アルハザードへ行くのよー!」

「狂ってる……」

誰かが呟いた

いや、誰かではなく全員がそう思ったはずだ

彼女は壊れている

もはや一切の弁解も情も立ち入る余裕はない

「わたしは……お人形……お人形……」

直後、フェイトは力なく倒れ、アルフに受け止められる

その目から光は消え、うわごとのようにぶつぶつと呟いていた

「フェイト!しっかりしておくれ!フェイト!」

呼びかけるアルフの声だけが、虚しくその場に響き渡る

『アハハハハ、アハハハハハハハハ』

狂気を孕んで笑うプレシア

当たりがプレシア討つべしと言つ空気になる中……

「ぶざけるな!」

ただ一人、全てを射殺すような目をモニターに向ける人物がいた

「プレシア……茶番はいい加減にしろ……」

大道連夜である

こちらの様子が見えているプレシアも、その声で黙り、連夜を睨み付ける

『あら、何の事かしら?』

さも不機嫌と言った様子で連夜を睨むプレシア

ブリッジに居る者達も、連夜の言葉を理解できないでいた

「それがお前の答えか？」

それが愛する娘に対する母であるお前の最後の答えか？

ふざけるのもいい加減にしろ!!」

『何を言ってるの!？』

私はあの子の事を娘なんて思ってないわ!』

自分の言ったことを全否定されたプレシアは怒った様子でそう言った

「嘘を吐け!!」

『嘘じゃないわ!!』

ブリッジ中に響き渡る声で叫んだプレシア

それに対し、連夜は一度視線を落とし、落ち着いた様子で口を開いた

「だったら……なんで泣いてんだ？」

『な、泣いてるなんて……！！』

連夜に言われ、自分の頬を触ったプレシアはその時初めて自分が泣いていることに気がついたようだった

「あんだよその顔は……その目は！その涙はなんだよ！！

……そんな顔してる奴が、本心で喋ってるなんてとても思えないけどな……」

連夜は冷静にそう言ってプレシアを見つめている

プレシアは言葉を返してこなかった

彼女が必死に抑えようとしている本当の自分が出てしまうから……

自分で自分を抑えきれなくなるから……

「俺は言ったはずだプレシア……

自分の気持ちに素直に生きると……

今のお前のどこが素直だよ……

素直どころか……自分に嘘つきまくってるじゃないか！！

大方残り少ない命の自分が居たってテストロッサは幸せにならないとか思ってたんだろうけどな……そりゃ気持ちの押し売りだ！

テストロッサの気持ちを考えやがれ！」

『黙りなさい！！』

言われたことにただ反発する子供のように叫んだプレシア

だが、既に彼女は自分を抑えることなど忘れていた

『そうよ……その通りよ！』

私の命なんてもはや風前の灯火……今こうして生きているのもやっとの状態なのよ？

そんな私と一緒に居たって……フェイトは幸せになれないわ！

この方が良いのよ……私は憎まれて死んでいくのが……』

「甘えんじゃねえ！！！」

再び連夜が一喝した

「子供にとって親つてのはどんな事よりも大事な存在なんだよ！！
例え少ししか一緒に居れなかったとしても、例え自分が造られた子供だとしても、親つてのは必要なんだよ！！

いい加減未来から逃げるな！

明日を見やがれ！プレシア・テストロッサ！！」

『……』

「……………さん」

連夜の声が響き渡り、プレシアの中にその言葉が突き刺さる

その時、連夜の後ろから一人の少女の声が聞こえた

「お母……………さん……」

居たいよ……私……私……造られた人間でも……お母さんと……
……お母さんと……一緒に居たいよ……」

涙ながらにそう語るのは、アルフの肩を借りて立ち上がったフェイトだった

「母さん……あたいにはもう無理だよ……」

我慢しなきゃと思ってたけど……」

あたいにはそんな事出来ない!!」

『フェイト……アルフ……』

娘の気持ちを知った

娘の心を知った

娘の涙を知った……」

直後、プレシアの居る時の庭園が大きく揺れた

「プレシア!!」

映像が一度乱れ、再び画面にプレシアが映った

『フフフフ……もう……遅いわ

ジュエルシードを発動させた……」

直に此処は時空断層に飲み込まれるでしょう……」

此方に向かつてるなら、早く引き返しなさい……』

そう言いながら、プレシアは自分の二人の娘に視線を向ける

そして、先程からは考えられないような、とても優しく、慈愛に満ちた表情で、二人の娘に言葉を告げた

『フェイト……アルフ……こんなお母さんでごめんなさいね……
…二人とも……幸せに行きなさい……』

直後、再び映像が乱れ、二度とそれが元に戻る事はなかった

「状況は!？」

「強力な次元震です!

このままでは本当に……うわ!」

リンデイの問い掛けに答えようとしたエイミィ

だが、その直後に時の庭園に到着したアースラも激しい揺れに襲われた

「いけませんね……本当に危険な状態です

この船も長くは居れませんよ?」

冷静に状況を報告したアテネ

そんな中、一人ブリッジから出ようとしている人物をクロノは見逃さなかった

「何処に行く気だ……大道……」

直後、全員がブリッジの扉の前に立っている連夜に視線を向ける

「大事なもんを……護りに行く」

それだけ行って、連夜は光に包まれ、転移した

転移させたのは無論アテネだった

「行かせてあげてください……
撤退するなら私だけが残りますので……」

アテネがそう言って頭を下げる

だが、そんな彼女にクロノは呆れたように行った

「誰が撤退するなんて行ったんだ？
母さん………」

そう言ってリンディの目を見つめる

リンディは優しく頷いた

「行きなさい……ただし、ちゃんと全員帰還すること……良いわね？」

「了解！

さあ………全員出撃だ！！」

アテネはそれに啞然とした

啞然としながらも、そんな彼等の優しさに、心から礼を述べたのだ
った

『シユン！』

「じ、これは！」

転移したクロノ達が目にしたのは、粉々に破壊された西洋風の鎧と武器を持った機械人形だった

恐らく傀儡兵と言う物だろうと理解したクロノ

だが、かなりの戦闘力を有するはずの傀儡兵をここまで破壊できる人物とはいったいと頭を捻らせた時、時の庭園の奥から爆発が起った

直後、空から落ちてきた傀儡兵の一部分

なるほど大道かと納得してしまうクロノだったが……

「連夜の奴……此処まで破壊しないかな？」

ユーノの一言に思わず同意してしまうクロノだった

「なのはと僕はこのまま動力炉に向かおう
動力炉を壊せば崩壊を抑えられるかもしれない」

「分かったの！」

クロノの指示になのはは元氣よく返事した

「君達は連夜の後を追い、プレシア・テストロッサの下まで向かうと良い」

最後まで説得するんだ」

「分かった」

「あいよ！」

はなからそのつもりだとやる気を出すフェイトとアルフ

「ユーノは道中で見つけた負傷兵を此処に転移させるから、君がア
ースラまで転移させてくれないか？」

「分かったよクロノ」

笑顔で頷くユーノ

作戦は決まり、各々身構えた

まずは連夜が取りこぼしたのか何体か迫り来る傀儡兵を前にする

「行くぞ！」

クロノの合図と共に、全員が各々の任務を胸に前に向かう

前にいた傀儡兵は一瞬で破壊された

連夜 side

「おおおおおお!!」

庭園内を爆進する俺に、何体もの傀儡兵が行く手を遮る

「雑魚に構う余裕はない!失せる!」

魔力など使わず、己の力だけで傀儡兵を破壊する

既にエターナルになっている俺にはそんな事など造作もないことだ

「ギギギギ……」

機械音を響かせ、こちらに飛びかかってくる傀儡兵

その数三体

「ちっ!!ファイヤーボール!!」

目の前に三つの炎の球体を生成し、それを迫り来る傀儡兵達に向け放つ

直撃した部分から大爆発を起こした傀儡兵は粉々になった

「ギギギギ!」

直後、背後からこちらに殴りかかってきた傀儡兵

今までのよりも僅かに大きなその体は、一瞬で今までの物とは別物

だと理解した

「だからどうした!!」

それでも俺は戻るなんて選択肢を入れていない

常に前進だ

殴りかかってきた傀儡兵の拳にこちらも純粋な拳を振るう

互いの拳が激突し、勝ったのは俺の拳だった

『ブチブチブチ!』

腕を裂いて突き進む拳

機械の為に痛覚を感じない傀儡兵はもう一方の腕で殴りかかる

俺はそれを回避、うまく身を振りながら、エターナルメモリをマキシマムスロットに差し込む

『E t e r n a l M a x i m u m D r i v e !』

懐に潜り込んだ俺が狙うのは奴の腹部

そこに狙いをすまし、真っ赤に燃えて轟き叫んだ俺の左拳を、アッパーの容量で振り上げた

『ドドドーン!』

その体まで浮かした傀儡兵は、そのまま天井を破って空高くまで飛びその後爆散した

「ふう……」

一息吐いて前を確認

目の前にある扉に手をかけ、ゆっくりその扉を開く……………なんて事はしない

「フレイムランス!!」

一本の炎弓矢が扉を破壊した

そして堂々と中に入っていく

「……なんで来たのよ……」

本当に意味が分からないと言った様子でそう言う女性に、俺は笑って答えてやった

「ようプレシア……………助けに来たぜ?」

s i d e o u t

第二十三話

フイットside

「はあ！」

「うら！」

アルフと協力して傀儡兵を撃退していく

と言っても殆どは連夜が破壊してくれているので、たまに遭遇するレベルだけど……

「ギギギギギ！」

特殊な機械音……傀儡兵だと理解してバルディッシュを構える

そこに現れたのは、確かに傀儡兵だったけど、大きさが今まで戦ってきたものと全然違った

まだこんな奴が残ってたなんて……

でも、立ち止まるわけにはいかない……

「どいて……私は、私達は……お母さんの下へ行くのよ……！」

「あんた邪魔だよ！邪魔すんなら……ぶっ壊すよ……！」

「ギギギギギギ！」

傀儡兵は答えない

でも、私はそれを宣戦布告と受け取った

「バルディツシュ！」

『Yes Sir!』

バルディツシュが途端に近接戦闘形態サイズフォームに変形する

「行くよ？アルフ」

「あいよ！」

そう言っただけ私達は傀儡兵に向かっていった

side out

なのはside

「くっ！思ったより防御が硬いな……」

クロノ君の言うとおり、動力炉に向かう私達の前に現れた傀儡兵とか言うロボットの攻撃が激しくて、全然動力炉にたどり着けませんでした

「しょうがない……」

なのは！僕が傀儡兵をなんとかする！

その際に君は動力炉に行くんだ！」

「そんな！」

クロノ君を置いていけないと言おうとしたけど、クロノ君は本気だった

「行くぞ……ブレイズ……キャノン！」

『Blaze Cannon』

瞬間、クロノ君のデバイスから真っ直ぐな砲撃魔法が撃たれた

傀儡兵はみんなそれに巻き込まれて爆発して……一瞬の間ができませんでした

「行け！」

クロノ君の合図で一気に加速してその場を通り抜けていく

奥に進むとまた傀儡兵がいっぱい出たけど、さっきの比じゃない

「退いて！デバインシューター！」

『Divine Shooter』

レイジングハートが光り輝いて、私の周りに四つの桃色の魔力スフィアが生まれる

「シューター！」

私はそれを一気に撃ち出し、目の前の傀儡兵達は崩れていきました
『バチバチ!』

壊れた傀儡兵の山の奥に、普通とは違う音を立てた機械が見えた
私は直ぐにそれがみんなが言っていた動力炉だって分かりました

「デイバインシューター! シュート!」

だから一気に破壊しようとデイバインシューターを撃ったけど、当
たる前にバリアみたいなもので護られてしまいました

「にははは………やっぱりそう簡単には壊させてくれないか…
レイジングハート、行ける?」

『All right my master』

私がレイジングハートに聞くと、レイジングハートはいつも通り、
元気にそう答えてくれました

「よし………なら、もう一踏ん張り頑張るよ!」

動力炉にレイジングハートを向け、私は魔力の収束を始めた

少し前にクロノ君が教えてくれた虚数空間とかがこの部屋にも所々
出来てきてる

こんな所でスターライトブレイカーは撃てないから、私の二番目に
強い砲撃魔法であれを壊すの!

「行くよ！レイジングハート！！」

『Divine Buster』

「デイベイン…バスター！！」

魔力を込めて放った砲撃

でもこれだけじゃ足りない

だから私は更にレイジングハートを強く握って、魔力を注ぎ込んだ

「フルバースト！！」そう言って叫ぶと共に、レイジングハートの先端から放たれた光線は、更に太く強力な光線となって動力炉に向かって行った

side out

『ズウウウウン！』

強力な地鳴りがした

それと同時に傀儡兵は突如機能を停止し、物言わぬ鉄クズとなり果てた

『クロノ君！なのはちゃんが動力炉の破壊に成功したよ』

エイミィからの念話に「ふう」と息を吐くクロノ

ここで傀儡兵の相手をするのは中々骨が折れたらしい

バリアジャケットが所々破れていた

「ありがとうエイミー…崩壊はどうなってる？」

その場に座り込み、少しばかりの休憩とエイミーに聞いたクロノ

エイミーは現在の状況を的確に伝えてくれた

『庭園の崩壊は艦長とアネさんが現場に出て抑えてくれてると言っても内部の虚数空間は徐々に広がってるみたいだし、長居はすべきじゃないよ』

「そうか……母さんとあのアネって人が……」

そう言っただち上がったクロノ

どうやら休憩は終わったようだ

「僕も今からプレシア・テストロッサの下に向かう
エイミー、彼女を保護したらこの場から撤退すると母さん達に伝えてくれ」

『了解！』

その声を聞いて念話を切り、クロノは一人プレシアの下へと向かった

一方、とうのプレシアの部屋に一番乗りで着いていた連夜は……

「なんで来たのよ……」

「言ったる？助けに来たってな」

プレシア・テスタロッサと対峙し、説得を試みていた

「これ以上無駄な抵抗は止めろ……早いとこ此処から出て、テスタロッサとアルフに会ってやれ」

『バチバチ！』

だが、連夜がそう言って出した手に飛んできたのは、紫色の雷だった

「私にこれ以上関わらないで……」

私は、もうあの子に会う資格なんてないのよ……」

肩で息をしながらそう言うプレシア

と立つより立っているのもしんどそうだった

「プレシア……お前……」

仮面に隠れてはいるが、連夜の表情が非常に驚いた顔だというのは簡単に想像出来た

「フフ……ほら……ね

もう……立って……いるのも……」

そう言いながら、プレシアは遂にその場に倒れた

「プレシア!!」

慌てて連夜がその体を地面に激突する前に抱きかかえた

「しっかりしろ!おい!!」

必死に体を揺さぶり、呼び掛ける連夜

「もう……目まで霞んできた……わね……

此処まで頑張ってた……けど……もう……限界ね……」

弱々しく言葉を繋ぐプレシア

連夜はそんな彼女を前に、最後の奥の手を使おうとしていた

その時

『ゴオオオオオ!!』

突如、時の庭園が激しく揺れ始めたのだ

「なんだ!いつたい何が……」

『連夜さん!!』

そんなとき、アテネから念話が入った

『大変です!私とリンディ艦長で必死に崩壊をくい止めていたのですが、もう限界です!』

直にこの庭園は崩壊します！
連夜さんも急ぎ脱出を！！』

「『連夜！』」

「大道！」

アテネが念話でそう言った直後、クロノ、アルフ、フェイト、なのは、ユーノが一斉に部屋に入ってきた

その瞬間、『ビキビキ』と音を立てて、部屋の至る所に亀裂が入り始めた

『ビキビキ！』

「あっ！」

その亀裂が入った部分の中に、アリシアの入っているポッドの下も入っていた

「ちっ！」

それに気付いた連夜が抱きかかえていたプレシアをその場に寝かせ、急ぎポッドの場所に向かった

「『お母さん！』」

直後にフェイトとアルフがプレシアの下に駆け寄る

「フェイト……アルフ……」

「母さん……例え造られた存在だとしても……私は母さんの娘です」

「アタイもだよ！」

涙で濡れた瞳で、二人の娘を見つめる母と、その母を見つめる二人の娘

ようやく親子が揃った瞬間だった

「クロノ！こいつを頼む！」

崩落ギリギリでポッドを掴み、それをクロノに投げた連夜

クロノは突然の事にも動じず、魔法を使って勢いを殺し、ユーノと二人で受け止めた

『バキバキバキバキ！！』

「え？」

次に亀裂が走ったのは、なんとプレシアの真下だった

「くっ！」

『ドーン！』

そして、気付けばフェイトとアルフはプレシアに押され、ギリギリ亀裂から免れていた

だが、その押した側のプレシアは……

「っ……！」

声にならない悲鳴を上げるフェイトとアルフ

彼女達の目の前で、プレシアは虚数空間の穴に落ちていったのだ……

……

第二十三話（後書き）

さて、次回はなぜ連夜が自身もジュエルシードを集めていたのかが分かります

物語も終盤

頑張って今月中に無印終わらします

第二十四話（前書き）

さて、無印も遂に終盤

ようやくチート主人公っぽい事をします

第二十四話

「お母さん!!」

母を助けようと虚数空間の穴に飛び込もうとしたフェイトをアルフが捕まえた

「アルフ！離して!!」

「ダメだよフェイト！戻ってこれなくなるよ!!」

そう言つて暴れるフェイトを羽交い締めにするアルフ

そのアルフも本当は生きたい衝動に駆られていた

初めて母と呼んだ女性が虚数空間に落ちたのだから、無理と分かつていても助けに行きたい……

だが、彼女はそれ以前にフェイトの使い魔なのだ

当然、フェイトの安全の方が彼女にとっては大事なことなのだ

涙を流しながら、激しい葛藤の中アルフは必死にフェイトを抑えていた

「いや!!離してアルフ!

誰か……誰か!

お母さんを助けて!!」

悲痛な少女の願いに周りの者は悔しい表情を見せながらも動きはしない

それは入っても助けられる可能性が0%だからだ

それを知っているからこそ、自分達の無力さにイラつきが募った

いや、今の言葉には語弊があった

「あいよー!!」

ただ一人、その少女の願いに答えた者がいた

その者はその身一つで虚数空間の真上に飛び上がった

「!」

誰もがその人物の行動に驚き、声を失う

まあ、最も驚いていたのはその願いを言った本人なのだが…

「連夜……」

目を見開き、驚愕の表情を浮かべるフェイト

彼女の願いに答えた人物

その者を纏っていた純白の鎧は虚数空間の影響を受け、消えてしまった

普通の少年の姿になった連夜

あっと言う間に落ちていくはずなのに、フェイトにはそれがスローモーションに感じられた

「クロノ！ユーノ！みんなを頼んだぞ！！」

そう言った少年は最後、目の前のフェイトと遠くにいるなのはに満面の笑みを見せ、虚数空間の中に消えていった

「連夜あああああ！！」

フェイトの悲鳴もはらんだ絶叫がその場に響く

「なのは！」

一方のなのはも、突然の事に意識を失ってしまった

「崩壊する！急いで撤退だ！！」

フェイトとアルフの近くまで飛び、二人を無理やり立たせる

「君達が頑なに動かなくても、僕はあいつから頼まれたからね……強引にでも君達を連れて行く！！」

クロノの言葉にアルフは我に返り、再び光を失った瞳となったフェイトを抱き抱え、ユーノを先頭に全員撤退していった

『大道……必ず帰ってくるんだぞ……』

帰ってこなければ、僕は君を一生許さない！！』

聞こえるはずのない念話と知りながらも、クロノは連夜に念話を送り、アースラに帰って行った

連夜 side

「ぐっ！なんて力だ！どんどん奥に落ちて行ってる」

入った当初は見えていた入り口も、今ではまったく見えなくなってしまうている

逆に、先に落ちたプレシアの姿は徐々に見えてきた

「プレシア！！」

必死に名前を呼ぶ

僅かだが彼女の体が動いた

どうやらまだ息があるらしい

「ぐっ！！」の……もうちよい！！」

入ってからずっと体は虚脱感に襲われている

あらゆる力が抜けていつているような感覚だ

事実変身が強制解除されてしまった

あれは俺も驚いた

メモリは今は俺の懐に入れている

「プレシア！プレシア！！」

俺の呼び掛けにプレシアはこちらに目を向けた

少しばかりの驚いた顔を見せた

「よしっ！いよっと！」

プレシアの手を掴み、彼女を抱き抱える

と言っても子供の姿では違和感ありまくりなのだが、言ってる暇はなかった

「なんで……来たのよ……」

小さくそう言っただけ俺を見るプレシア

俺はそれに嫌みなほどの笑顔で答えた

「助けに来たっていったら？」

それにな、あんたは既に俺の護りたいものの中に入ってんだよ」

「な、何を言っただけ……」

と少し反論するプレシア

まだ言い返す元気はあるってか…

「でも……もう無理よ……」

此処からは決して出られない
私達は終わりね……」

「終わらせねえよ……」

俺は彼女を抱えている体勢を止め、彼女を俺に向かい合わせた

「それは……ジュエルシード？」

プレシアは俺の片手のブレスレットに光るジュエルシードを見てそ
う言った

「そうだ……これが、俺の最後の切り札だ……
出来るか保証はない……だが、もし成功すれば、お前の体を治すこ
とも、アリシアを蘇生させることも可能だ……」

俺の言葉にプレシアは驚いていた

「だがもしダメなら二人ともお陀仏だ……
プレシア……俺に賭けてくれないか？
この可能性になー！」

「分かったわ……あなたを信じる……
こうなったら……一蓮托生よ」

最後に笑みを浮かべたプレシアを見て、俺も覚悟を決めた

「……………」

視線にあるのは三つの輝くジュエルシード

魔力がすべて停止する虚数空間に居ながらこの輝きが失われないと
言うことは、使うことが出来るというわけだ

そして、このブレスレットにこれらを封印してからずっと俺はブレ
スレットを通してこの三つに魔力を注ぎ続けた

ジュエルシード自体が持つ魔力量も既にE×レベルに到達している
だから俺は、それらの力を使って……………この世界の流れを……………
破壊する！

「ジュエルシードよ………」

俺はジュエルシードに向かって呟く

「俺に……………力を来れ!!！」

瞬間、三つのジュエルシードは眩い光を放った

俺の体からは虚脱感が消え、変わりに溢れんばかりの力が沸き上が
ってきた

『バキン!!!!』

三つのジュエルシードは碎け散る

だが、そのジュエルシードから放たれた光は俺を包み込んだ
行ける……これなら行ける！

「これは……いつたい」

その化け物クラスの魔力に目を丸くするプレシア

俺はそんな彼女を見つめ、懐からエターナルメモリを取り出した

「プレシア……これが……俺の本当の姿だ！
変身！！」

スイッチを起動させ、現れたロストドライバーに勢い良く差し込み、
スロットを左に倒す

『E t e r n a l !』

機械音と共に再び纏われていく純白の鎧

だが、その変身はいつもと違った

腕に刻まれた真っ赤な炎のエンブレムに、蒼いジュエルシードの光
が纏われていく

を連想させる目が黄色くひかり、腕のエンブレムは青い炎のエン
ブレムへと変化した

直後、俺の背中には漆黒のマントが現れた

本来腕や胸などに現れるマキシマムスロットは無いが、今の俺の姿は仮面ライダーエターナルの完全形態、エターナルブルーフレアとなっていた

「連夜…」

俺の姿に驚くプレシア

俺は彼女の手を取って、再び抱き抱える体勢になった

「悪いなプレシア…しっかり掴まっている？ともかく此処から出るぞ…」

そう言っただ俺は片手を何も無い場所に向ける

「メモリコール『F』！」

俺がそう言った瞬間、何処からか一つのメモリが現れ、俺の向けた手の中に飛んできた

しっかりとメモリを掴んでそこに刻まれた刻印を確認する

其処にはしっかりと『F』の刻印が刻まれていた

『Float！』

メモリの起動音声が流れ、俺の頭の中にその能力と使い方が流れ込んでくる

それをそのまま腰のマキシマムスロットに差し込み、フロートメモリのマキシマムを発動させた

『Float maximum drive!!』

フロートメモリ、それは使用した者に飛行能力を与え、絶対な制空権を得る能力

その証拠に、マキシマムが発動した瞬間、プレシアを抱き抱えた俺は落下が止まったのだ

「止まった？連夜あなた何を……」

「少し黙っている……舌をかむ」

足に力を入れ、空気の壁を蹴る

今まで落下していたのが嘘のように、俺の体はどんどん上へ上がっていった

そのスピードも普通の飛行魔法とは比べ物にならないくらい早く、あっと言う間に出口が見えた

「見えた！！あと少しだ！」

そのままスピードを維持しつつ、俺達は遂に虚数空間を脱出した

その脱出した出口の上で一旦停止

先にプレシアを回復させようと思った

本格的な治療は後でと考えたが、先にやってしまったほうが後が楽だ
それに、早くしなければ時空断層に巻き込まれて此処から出れなく
なる危険性もあった

「よつと…」

比較的安全な場所に着地し、プレシアを抱き抱えたまま『F』のメモ
リを抜く

抜いた瞬間メモリは霧のように消えていった

そして俺は新たなメモリを呼び出すために再び手をかざす

「メモリコール、『Z』」

直後に俺の手に飛び込んできた『Z』のメモリ

それをそのままマキシマムスロットに差し込み、発動させた

『Zone maximum drive!!』

俺の体にゾーンの力が広がる

その力をそのまま左手に収縮し、プレシアに向ける

その間は、右手と片膝を立てて大勢を整えた

「転移対象、プレシアの体内の癌細胞すべて

転移先、俺の左手の上……転移開始！」

「うぐっ！」

直後、プレシアがうめき声を上げた

彼女の体の中では彼女を犯していた毒が次々と抜けていくのだ

感じたことのない感触と、中身をいじられているような感覚に、明らかな嫌悪の表情を出していた

そして数秒後、彼女を苦しめていた癌細胞はすべて俺の左手の上に凝縮され、小さな球体のようになっていた

「はあ、はあ、はあ……それが、私を苦しめていた正体？」

荒い息を整えながら、プレシアがそう言ってきた

「そうだ……これがお前の中にいた癌細胞の全てだ
だが…それも！」

直後に『プチッ』と言う音を立てて俺は癌細胞を握りつぶした

「さて、次は弱ったお前の体力を戻してやる……ヒール？」

再びプレシアの上に左手をかざし、其処から出た暖かな光が彼女を包んだ

俺が唱えたのは白騎士物語に登場する神聖魔法の一つ

回復系の魔法なのだが、今までの俺では使えなかった

どうやらブルーフレアになった事で俺の体に掛けられていた枷も解かれたようだ

光に包まれたプレシアは次第に顔色も良くなり、健康体に戻っているのが確認できた

「凄いわ……あつと言う間に体力が……」

連夜、あなたやっぱり只の魔導士ってわけじゃないわね」

含み笑いを浮かべたプレシアを、俺は再び抱き上げた

「もう自分で飛べるわよ」と言うプレシアだったが、「体力が戻ったばかりで無理するな」と俺が言ったので静かになった

「さて、此処から出るか……ゾーン

転移対象、俺達

転移先、アースラブリッジ……転移開始!!」

そう言った直後、俺達の体は眩い光に包まれていった

side out

時の庭園から離れたアースラの艦内は、まるで葬式のように静まり返っていた

それもそのはず

全員で帰還すると約束したはずが、約一名が帰ってこないからだ

『何してる大道……早く帰ってこい！』

無駄と分かっただけでも念話を送ってしまう

むろんその返事は帰ってこない

なぜなら、彼は自分達の目の前で虚数空間に落ちていったのだから…

必ず帰ってくるまがいの事も言っていたが、このクロノ・ハラオンの経験上、虚数空間に落ちて帰ってきた魔導士など1人も居ない

例え大道連夜が圧倒的な魔力を持っていたとしても、あの場では全ての魔力が停止する

つまりは脱出不可能なのだ

分かっただけでも、受け止められない

ふと後ろの壁で膝を抱える二人の少女を見るが、相変わらずその姿に覇気はない

あんなに母を連れ戻すと意気込んでいたフェイト・テストアロツサも、彼女の手助けをしようと笑顔で言っていた高町なのはも、その顔はまるで人形のようにだった

二人を慰めようとするフェイトの使い魔のアルフと、なのはのパートナーのユーノ・スクライア

だが、二人もまた連夜に対する悲しみを慰めると言う形で紛らわしているだけなのかもしれない

そう思うクロノもまた、エイミイ他通信士達による報告を聞いて指示をとばすなどしてその感情を紛らわしているだけだった

艦長であるリンディ・ハラオンも「みんなは最善を尽くした」と褒め称えたが、艦長席に座るその表情は優れない

そんな中、じつと画面を見つめるアテネ

彼女は連夜の計画すべてを知っている

虚数空間に落ちたと聞いたときは正直耳を疑ったが、それでも彼の思惑通りに事が進めば、其処からの脱出も容易と考えていた

だが、それはあくまで全てが上手くいったらの場合であり、確率は五分五分だった

内心彼女も心配していたのだ

『連夜さん……』

その時、崩壊する時の庭園から僅かながらの転移反応を感知した

計器を確認しても反応は確認されていない

つまり、彼女だけが感じた反応

そして次の瞬間、彼女の感じたものが確かなものだったと言う確信に変わった

「……………ふう」

一瞬ブリッジ全体を眩い光が満たし、直後にその光は消えていったそして、光が治まった場所には、プレシアを抱き抱えた純白の仮面の戦士が立っていたのだ

「……………」

ブリッジに居た全員が目を疑った

幻を見ているのではないか？と思っている者まで居た

それは、彼等が知っている純白の戦士の姿とは所々違う部分があったからでもあるが……………何にしても、抱き抱えられたプレシア・テスタロッサを見る限り、不可能と言われていた虚数空間から脱出してきたのだと言うことが一番信じられなかった

「……………連夜？」

「連夜……………君？」

人形のように無表情になっていた少女達が、その顔を上げ、視線の先にいるその戦士に問い掛ける

プレシアを下ろし、戦士は優しく答えた

「約束は守った……ただいま……みんな」

そこから聞こえたのはあの変身時の愛しの人の声

それはあの少年の変身した際の声だった

「……………！」

直後、ブリッジから溢れんばかりの歓声があがった

抱き合うもの、泣き崩れるもの、安堵したように息を吐くもの、ガツポーズをとるもの………そして…

「「連夜（くん）——！」」

帰ってきた愛しの人の胸に飛び込むものがいた

「バカ！バカバカバカ！連夜君のばかあ………」

高町なのはは連夜の胸を叩き

「良かった……良かったよ連夜………」

抱き締めている人物の存在を確認するかのようになり、顔を埋めるフェイト・テストロッサだった

「フェイト………」

その中、彼女に向かって声をかける一人の女性………プレシア・テストロッサが居た

「……………お母さん!!」

「フェイト!!」

涙を溢れさせて抱き合う親子

もう決して離さないと言わんばかりに抱き合う姿に、リンディ・ハラオンは心から感動の涙を流した

『良かった……………本当に良かったわ……………』

かつて事故から最愛の人であり、家族の一員であった人物を亡くしているリンディは、フェイトとプレシアが離れ離れになるような事がなくて本当に良かったと思っていた

「……………行かなくて良いのかい？」

横で泣ぐんでいるアルフに優しく問いかけたユーノ

「あたいは……………後でゆっくり甘えるさ……………」

今は、フェイトにたっぷり甘えさしてあげなきゃ」

使い魔と主人は精神的な所で繋がっている

今のアルフにはフェイトの幸せな感情が大量に押し寄せていたのだ

「そうか……………分かったよ」

そう言って納得したように笑ったユーノ

彼もまたパートナーと友である人物が別れるような事にならなくて良かったと思っていた

「クロノ、アリシアは何処にいる？」

連夜が発したその言葉で再び空気は静まり返った

「……何も触らずに医務室に安置している……」

だが、素人の僕の目から見ても、彼女はもう……」

「分かった……今すぐ向かおう」

変身を解除せず、連夜はそう言って医務室に向かおうとしていた

クロノがそれを慌てて引き止める

「まで大道！！いったい君は何をするつもりだ！？」

その声に足を止め、ゆっくりとクロノに顔を向ける

そして、彼はさも当たり前のようにこう言った

「時間がない……今から、アリシア・テストロッサの蘇生を始める」

その言葉は、その場にいた全ての人を驚かせた……

第二十四話（後書き）

さて次回はアリシア蘇生と無印編の最終回になります

第二十五話（前書き）

今回はなかなか長くなりました

アリシア蘇生は自分なりに考えた結果です

では……始まります

第二十五話

連夜の言った一言

アリシア・テスタロッサの蘇生と言う言葉には、誰もが耳を疑った当初それを目的としていたプレシアですらその言葉には驚いていたしかも、あの虚数空間から無事に帰ってきた連夜なら、平気でやっでのけそうなのでそれがまた恐ろしかった

そこで、執務官クロノ・ハラオンは考えた

『彼にこれから先のことをさせて良いのか』と言うことだ

死者蘇生とは明らかに自然の理を根底から否定するような一大事だそれを可能としてしまえば、世の中にとんでもない影響を及ぼしてしまうのではないか？
それがクロノの考えだった

ならば、今連夜を止めるのは自分の役目ではないかとデバイスを構える

「ああそうだ……」

と言ってくるりと振り返った連夜に慌ててクロノはデバイスを引っ込める

連夜はそれに気付かなかつたのか気付いているのか…そのままリンデイの方に顔を向けていた

「艦長……この艦の動力は魔力と通常のエネルギーの二つで動いているんですよ？」

何故急にそんな事をと誰もが思ったし、聞かれたリンデイ・ハラオンも首を傾げたが、特に怪しむ様子もなく「そうよ」と言った

「なら……結構です」

その瞬間、クロノの目には連夜が不気味な笑みを浮かべたように見えた

「大道！」

何かしでかすとクロノが動いた時には既に遅かった

連夜は腰のドライバーに挿しているエターナルメモリを抜き、それを腰の横のマキシマムスロットに挿して、マキシマムを発動させた

『E t e r n a l M a x i m u m D r i v e ! ! 』

瞬間、クロノを含むアースラに居た全魔導士の体に強力な電流が走った

「ぐあああああ！」

突然のことに誰もが苦痛の声をあげる

だが、連夜は今まで幾度となく今の技を行ってきたがこんなことは一度もなかった

理解できない内容に誰もが連夜を見る

その連夜は、苦痛で倒れたクロノの前に立ち、ゆっくりと告げた

「これが俺の本当の力……エターナルレクイエムだ」

「レクイエム……だと!？」顔を歪ませながらも連夜を見るクロノ

その時連夜はクロノにあることを言った

「何か気付かないのか」と

最初は頭を悩ませたクロノだが、直ぐにそれに気付くことが出来た

「リンカーコアが……停止している……」

「御名答だ……」

よく見れば倒れているのはクロノだけではない

リンディやなのは、フェイト、プレシア、アルフなど魔法を使える者は全員倒れていた

「エターナルレクイエムとは、発動した瞬間俺以外の魔導士のリンカーコアを全て停止させる能力だ……」

以前のレッドフレアでは拳に纏わせるレベルでしか出来なかったが……このブルーフレアなら広範囲にそれが可能だ……

と言っても、これでもまだ不完全だ

アースラ全体にしか範囲を広げられなかったからな…」

サラリととんでもないことを言つてのける連夜

魔導士ではない通信士が慌てて状況を解析する

すぐにその答えが帰ってきた

「大変です！本鑑の魔力動力炉が停止しています！

これでは通常のエネルギー動力炉しか駆動していないため、アースラは半分の出力しか…」

そこまで聞いてクロノは連夜を睨み付ける

「大道！」

魔法を使おうとしても、デバイスは発動せず、自分の中から魔力を感じない

魔法を使ったり練り上げたりを自身の呼吸のように行える魔導士にとっては、これは本当に恐怖だった

痺れ自体は徐々に退いていったが、それでも立ち上がる気力が起きなかった

それは、魔力を失い、普通の人間と同じ状況になってしまったことに、若干絶望しているからかもしれない

「俺の邪魔をするなクロノ……」

そう言つて連夜はマキシマムスロットからエターナルメモリを抜き、それをまたベルトに戻した

直後、アースラの魔力動力炉が突然復活し、クロノ達にも魔力が戻ってきた

「これは…」

驚きながらゆっくりと立ち上がるクロノ達

「誰が永遠にそうなると言つた？」

この技は俺がマキシマムを解除すれば自然に解ける……」

そう言つて連夜は再び医務室に向かう扉に歩いていった

「今のは警告だ…次はないぞ？」

邪魔しないなら……付いて来い…あただし、男は来るな……」

その言葉にはクロノだけでなく、ユーノも「何故だ」と怒った

連夜は少し躊躇っていたが、やがて溜め息を吐いてこういった

「お前ら見たいのか？ 幼女の裸……」

あれから医務室に安置されていたアリシアの入ったフラスコを演習場まで持ってきた連夜

同伴者は他になのは、フェイト、プレシア、アルフ、リンディ、エ

イミイの6人だった

「さて……ではこれからアリシア・テストロッサの蘇生を始めるが……」

「その前に……」と言って今やすっかり健康体となったプレシアに連夜は顔を向けた

「プレシア……お前に一つ許可をとっておかなくてはいけない……」

プレシアは連夜の言葉に頭を傾げた

周りの者も今更なんの許可がいるのかと思っていた

「アリシアは……普通の人としては蘇生出来ない……
彼女にはユニゾンデバイスとして蘇生させるつもりだが……構わな
いか？」

「なっ……！」

言葉の意味を知っているリンディ、プレシア、エイミイは絶句

なのは、フェイト、アルフも、意味は分からないがデバイスと言う
単語に反応していた

「ユ……ユニゾンデバイス……」

その言葉に一気に顔色を悪くするプレシア

そこへなのはがもったいぶりながら手を挙げた

「あ……あの……ユニゾンデバイスって…何ですか？」

「ああ、なのはちゃん達は分かんないか……ユニゾンデバイスって言うのはね、なのはちゃん達が持つてるデバイスとはまた別のデバイスの事だね……」

そう言うって説明を始めたエイミー

曰わく魔法の術式には現在2種類に分けられており、主流となるのはなのは達も使っているミッドチルダ式であり、この術式のデバイスとしてインテリジェントデバイスとストレージデバイスの2種類があること

一方、最近数が減少したが、デバイスを実際に武器として扱い、カトリッジと言う自分の魔力を凝縮した物をデバイスに装填して使用することで、爆発的にその魔力を増加させて戦うのをベルカ式と呼ぶ

ベルカ式を使う者は己を騎士と呼び、デバイスも先述の通り武器として使うことからアームドデバイスと呼ばれる物と、先程のユニゾンデバイスがある

このユニゾンデバイスは使用者と一心同体になる能力を持っており、外見は人に酷似し、実際に言葉を話したり食事をしたり、自身で魔法を使うことも出来るらしい

だがその特異性故に個体数が少なく、今では殆ど見ることはなくなっただけらしい

以上がエイミイの解説だった

「見事な解説感謝するよエイミイ」

連夜は手を叩いてエイミイを賞賛した

「つまり、このアリシアちゃんをユニゾンデバイスにするってことは……アリシアちゃんは……人じゃなくなっちゃってこと？」

なのはがゆっくり連夜に聞いた

辺りが沈黙に包まれる中、連夜は「蒼穹の通りだ」とはっきり言った

「連夜！」

さすがにこれにはフェイトも怒ったのか、鋭い目で連夜をにらんでいる

横のアルフも同じだった

「……言い方が悪かったが、彼女は人でなくなるが人と一見しても区別は付かないぞ？」

同じように言葉を喋り、笑い、泣き、物を食べ、しっかりと生きていると言える」

「そう言う事じゃないよ！」

と言ったのはアルフだ

連夜は少し咳をしてから、こう説明した

「お前ら……俺が普通のユニゾンデバイスとして蘇生させると思ってるならそれは勘違いだぞ？」

アリシアは確かにユニゾンデバイスとして蘇るが、ちゃんと人並みの寿命と言つのを持っている

少し特異なだけで、彼女は人として生き、人として死んでいけるんだ」

その言葉を聞いた瞬間、今まで暗い表情で考え込んでいたプレシアの表情が明るくなった

「それじゃあ……あの子は人として生きていけるのね？」

ちゃんと……人としての幸せを得られるのね？」

涙目でそう問いかけるプレシアに連夜は黙って頷く

それを見たプレシアは顔を抑えて座り込んでしまった

「死者をそのまま蘇らせるってのは色々制約があつて面倒なんだ……だが、ユニゾンデバイスで蘇らせるって言う言い訳があれば……案外色んな制約無視出来るんだ……」

だから、成長して、好きな人が出来れば結婚して、子供も創れる……ちゃんと幸せな人生を送れるさ……」

プレシアにそう言ったあと、連夜は演習場の上の方を見上げた

『お前も……それで文句ないかい？』

連夜がそう言った視線の先には、半透明なアリシアが宙に浮いていた

俗に言う幽霊と言う奴である

『ありがとう……お母さんも助けてくれて……私まで……本当にありがとね』

涙目で頭を下げるアリシア

仮面越しではあるが、連夜は笑顔でそれに答えた

「さてプレシア……お前からの答えを聞こうか？」

連夜がそう言うと、プレシアは涙を拭いながら言葉をつないだ

「よろしくお願いします」と…

「了解した…」

そう言ったゆっくりとアリシアの肉体が入ったフラスコに近付いていく

その横に立った連夜は、まずそのフラスコからアリシアを出した

特殊な液体に使っていたアリシアを抱き上げ、エイミーに頼んで持ってきてもらったタオルの下に寝かせる

そして、彼は腰の後ろに手を回し、そこからダガーナイフ状の武装『エターナルエッジ』を掴んだ

「メモリコール…『W』」

左手でエターナルエッジを掴み、右手を宙にかざす

すると、そのメモリもまたどこからともなく現れ、かざした右手に飛んできた

それを掴み、エターナルエッジに装備されたマキシマムスロットにメモリを差し込んだ

『Weapon Maximum drive!!』

差し込んだメモリはウエポン

マキシマムが発動し、エターナルエッジが青く輝いた

「ウエポンチェンジ…天生牙」

連夜がそう言った瞬間、エターナルエッジは形を変え、犬夜叉に登場する天生牙になった

「……………」

天生牙を握り締め、横たわるアリシアをじっと見つめる連夜

今の彼には、天生牙の能力でアリシアに纏わりつく妖魔達の姿が見えていた

無言でアリシアに近寄り、天生牙を構える

アリシアに纏わりつく妖魔達の数は数匹程

それらがその事に気付いた時には既に遅く、連夜は天生牙を一振りしてその妖魔達を切り裂いた

『ギヤアアアア！』

断末魔を残して消えていった妖魔達

本来ならばこれでアリシア復活と言う所なのだが、彼女の場合、魂が肉体を長く離れすぎたために、その肉体に戻れなくなっているのだ
連夜が彼女をユニゾンデバイスとして蘇生させるのはそのための対策とも言えた

「さてと……」

天生牙をもとのエターナルエッジに戻し、ウエポンメモリを抜いた
連夜

メモリはまた霧のように消えてなくなっていた

「上手くいってくれよ……」

そう呟くと、連夜は横たわるアリシアの腹部に手を当てた

直後、アリシアを中心に四方向に伸びる赤い光の筋が現れた

その光はある程度の長さまで伸びると、そのまま円形を描き始めた
四方向に伸びた光から更に枝分かれし、全ての光が繋がると、そこには円形の巨大な魔法陣ができあがっていた

「これは！なんて強力な魔力なの！？」

魔法陣が発する赤い光はまるで血のようであり、不気味なものだった。連夜はいまだにアリシアの腹部から手を離さず、魔力を送り込んでいるようだった。

『ゴゴゴゴゴゴ…！』

魔法陣は更に光を増し、連夜とアリシアの姿を見るのも辛くなってきた。

「連夜（くん）ー！」

彼の名を呼ぶフェイトとなのはだが、呼ばれた連夜は此方を振り向かない。

『ゴゴゴゴゴゴ！』

直後、まるで爆発が起きたのではないかと思えるほど強力な光を魔法陣が発し、演習場は一瞬その赤い光で満たされた。

「キャ！」

「アリシアー！！」

様々な声が飛びながら、光は徐々に終息していった……

「連夜くんー！！」

光が収まり、視力が回復してきた彼女達の前に飛び込んできたのは、黒衣のマントなどを失い、何故かレッドフレアの姿へと戻っている連夜と、いまだ眠っているアリシアの姿だった

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……ぐっ！」

その連夜もまるで激しい運動したように息が乱れ、苦しそうだった

「連夜さん！」

誰よりも先に彼に駆け寄ったのはアテネだった

だが、連夜は「来るな！」と言って誰かが近寄るのを拒んだ

「これで最後なんだ……もう少しなんだ……」

連夜は息を整えながら、ふらきながらもゆっくり立ち上がった

そして左手を胸に当て、最後の呪文の詠唱を始めた

「我……大道連夜の名において……死者蘇生の最後の儀式を敢行する
アリシア・テストロッサの魂よ……汝の新たな肉体にその魂を宿し
たまえ……」

そう言って連夜は胸に当てた手を演習場の天井に挙げた

すると、天井が突如光り輝き、まるで日輪の日差しのような暖かな光が降り注いできた

「神聖魔法……リザレクション……」

彼が最後の呪文を唱えた瞬間、光輝いた天井から一つの光の球体が降りてきた

それはそのままアリシアの体の上まで降りていくと、その手前で急停止した

その光の球体は、そのままずっとその場で停止していた

一方の連夜も、その球体をじっと見つめていた

彼にはその球体が球体として見えていないからだ

『どうした？不安か？』

そうやって問いかける彼の前には、横たわるアリシアの体と、その上で静止する球体……ではなく、アリシアの魂がいた

『不安だよ……あたし、ちゃんとみんなに受け入れてもらえるかどうか……』

そうやって少し視線を落とすアリシア

だが、連夜はそんな彼女に優しく語り掛けた

『心配しなくても……誰もがお前を受け入れてくれるさ……
少なからず、俺はお前を受け入れる』

その言葉を聞いたアリシアは、『ぷっ』と吹き出した

『フェイトが貴男に心を開いちゃうのも分かる気がするわ……フフ
…ありがとうね』

最後にそう言って、アリシアの魂は笑顔で彼女の肉体の中に入って
いった

「ん……」

そして、永い眠りから、アリシア・テスタロッサと言う眠り姫は目
覚めた

「アリシア!!」

涙を流して生き返った娘を抱きしめるプレシア

リンディやエイミィは本当にアリシアが蘇った事に驚いていたが、
その驚きよりも涙を流すプレシアの姿を見て、良かったと涙をこぼ
していた

「……………」

目の前でお互いの存在を確かめ合うアリシアとプレシア

そんな二人を見ながら、連夜は変身を解こうとベルトに触れた

「!」

だが、次に彼が立っていたのは真っ暗な闇の世界だった

「どこだ？此処は……」

そう言って辺りを見渡す連夜の耳に、此方に近付いてくる足音が聞こえた

「！」

慌てて体を半歩後ろに下げた連夜

彼がさつきまで立っていた場所には、鋭利なナイフとそれを握る腕があった

「こいつー！」

直ぐにその腕を持って一本背負い

上手く決まった筈なのに、連夜が投げた相手は空中で一回転し、綺麗に着地した

そして、その後ろ姿を見た瞬間、連夜は「そんな……」と声を漏らした

その後ろ姿にあったのは黒衣のマント

そして先程の短剣にあの腕……連夜は必死にその考えを頭の隅にやりながら、じつとその者を凝視する

『バサッ！』とマントを翻して立ち上がったその人物の姿は、間違いなく仮面ライダーエターナルブルーフレアだった

しかも連夜が変身した姿と違い、全26個のマキシマムスロットが

体に装着されている事から、真のエターナルブルーフレアと言えた

「おれ？」

思わずそう言った連夜

だが、返ってきた言葉は彼とはまったく違うものだった

「おれだと？ふざけるなよ？」

貴様が俺なわけがないだろう……まだこの力を扱えてもいないお前が……」

そう言つて連夜を指差すエターナル

明らかにその声は連夜の変身時の声なのだが、なにか違和感があった

447

「良いか？今回はたまたまジュエルシールドの力を使って俺をコントロール出来ただけだ……次はない……」

俺が貴様を認めるまで、二度とブルーフレアにはなれないと思えよ？」

その言葉を聞いて、連夜はその人物が誰か分かったようだった

「待つてくれ！あんた……まさか……」

少年の連夜は必死にエターナルに手を伸ばすが、徐々に視界はぼやけていき、エターナルもその背中がどんどん遠くなっていった

「あ……っ……」

そして、彼の意識は再び闇に包まれた…

連夜 side

「…ちゃん……………にい……………」

誰かが自分を呼んでいる

誰かは分からない…でも何処かで聞いたことがあるような……………優しい声…

「ちゃん……………お兄ちゃん！」

ああそうか……………この声、俺の死んだ妹の声だ…

幻聴……………か

まあしかし、なんで今になって……………

「しっかりして！……………ちゃん！……………ちゃん……………連夜くん！！！」

一瞬でまったく違う声になった事に驚きながら、俺は意識を取り戻した

「……………知らない天井だ……………」

いちようお約束を交えながら、俺は現在の状況を確認する

見上げた天井から察するに、ここはアースラの医務室だろう……

そして、先程から片手に重い感覚がるから……

「連夜……君？」

やっぱり……なのはが涙目で俺を見ていた

「よお……高町……」

優しく、ゆっくり安心できるように頭を撫でる

「うう……連夜くん……突然倒れちゃうから……心配したんだから……」

涙目+上目遣いで言われたら、俺が謝るしかないな

「そうか……すまん」

「ううん……目が覚めたから良い……」

なのはは嬉しそうに泣き笑いをしていた

すると、医務室の扉が開き、誰かが入ってきた

「連夜！目が覚めたの！？」

勢い良く入ってきたのはフェイトだった

だが……なるほど……

「よお…フェイト…いや、お前アリシアだな？」

俺がそう言つと、彼女は非常に驚いたようだった

「凄い……よく分かつたね連夜」

見破られて若干悔しそうにしながらも、嬉しそうなアリシア

そして、遅れてプレシア、フェイト、アルフ、ユーノ、クロノが入ってきた

「もうアリシア、まだそんなにはしゃいじゃだめじゃない」

「そつだよ…まだおとなしくしてなきゃ」

アリシアを注意するフェイトとプレシア

確か関係的にはアリシアの方が姉になるのだが、こつ見ると立場が逆なような気がするな

「もう大丈夫だよ」

連夜がしつかり生き返らせてくれたから、あたし超元気だもん」

そう言つて元気に跳ねて見せるアリシア

俺は内心アリシアってこんなキャラだったか？と頭を捻つたが、こんななんだつたと納得することにした

あ、いちよう姉としての体面が立つように、蘇生させた段階で肉体年齢はフェイトと同じ状態にしておいた

だから、並んで立つとぱつと見では本当に見分けがつかない

何にしても、無事世界の破壊の第一段階は無事終了か……

「盛り上がっているところすまないが……今後の処置について話しておきたいんだが……良いか？」

そうやって空気を一気に変えたのはクロノだった

「この子達に罪はないわ……裁かれるなら……私だけで充分よ」

クロノの前に立って自分に指を指すプレシア

それにはフェイトやアルフ、もちろんアリシアも大反対した

「お母さんだけが裁かれる必要ない
私達も同罪だ」が三人の言い分だった

結果プレシアを含めて四人が口論に発展する

「おいお前ら！

………まだクロノは何も言っていないぞ？」

その言葉に冷静さを取り戻す四人

そのまま黙ってクロノを見つめた

「ゴホン………良いかい？」

今回の件、もとはジュエルシードをめぐる事件と報じられるだろ

うが、その重要参考人である君達四人は………無罪放免、お咎めなしと言う結論になった」

「……はっ?」「……」

クロノの言葉には俺以外の全員が聞き返していた

「お咎めなしと言ったんだ

そもそも今回の主犯とされているプレシア・テストロッサは元管理局の研究員だった事からジュエルシードの危険性を知っており、善意でそれを回収していただけ

娘のフェイト・テストロッサと使い魔のアルフはその母に従っただけだ

管理局員に攻撃をしたのだから、許可無く自分の領内に入ってきた事への正当防衛だ

まあジュエルシードが暴走して時空断層が発生したのは少々の罪にはなるかもしれないが、娘のフェイト・テストロッサを管理局の囑託魔導士とする事で無罪に持ち込めるだろう」

クロノはしてやったり顔でこちらを見た

聞けば聞くほど真実を知っている者からすれば馬鹿らしく、嘘だらけの内容だが、聞けば聞くほどこれを報告と言う形で聞くならばこれほど完璧な報告書はないと言えた

「本当に……こんな事をして良いの?」と驚きの表情で問うプレシア

それに対してクロノは無言で頷いた

直後、四人の親子は泣きながら抱き合った

あれから数日が経ち、俺達はフェイト達との別れの地に来ていた

「あの……友達になってほしいんだ……ダメ……かな？」

おどおどしながらもなのはにそう言うフェイト

それを遠目から見守る俺とアリシアとアルフ

「うん！もちろん良いよ

じゃあ……名前を呼んで？私はなのは……高町なのはだよ。フェイトちゃん」

「わ……分かった……な……なのは！」

顔を真っ赤にしてなのはの名を呼んだフェイト

なのはは優しく微笑みながら、彼女もまたフェイトの名をもう一度呼んだ

「よろしくね。フェイトちゃん」

「なのは」

「フェイトちゃん」

「なのは」

そう言ってどちらともなく二人はお互いを抱き締める

フェイトに友達が出来たことに喜びを隠せないアルフは二人の名前を呼びながら、二人に抱き付いた

「ふふ…良かった

フェイトに二人目の友達が出来た」

本当に姉のような優しい目でフェイトを見つめるアリシア

そして、彼女は直ぐにこちらを向いた

「言っとくけど、あたしはフェイトみたいに奥手じゃないから、ガンガンアプローチするからね？」

しばらく会えなくなるから、会ったら覚悟しなさいよ？連夜」

そう言って「べー」と舌を出して笑ったアリシア

俺はその内容を理解すると同時に、「なっ！」と動揺してしまった

「あらあら……連夜さんは渡しませんから」

そう言って俺の肩に現れたのは、懐かしい人形モードのアテネだった

「連夜、また会うまでにどっちを取るか決めときなさいよ！」

そう言って手を振りながら、アリシアはゆっくりと降下してくるアースラに向かって駆けていった

フェイトとアルフもアースラに向かっていく

三人が乗り込み、アースラは再び浮上し、直ぐに転移した
こうして無印編は無事終了したのだった

〈同時刻 八神家〉

「我ら、闇の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、闇の王、八神はやての名の下に……」

そして、新たな闇が今胎動を始める……

無印編 完

第二十五話（後書き）

と言っわけで無事無印編完です

いや長かった

直ぐにA's編は書くつもりです

お楽しみください

第一話（前書き）

今回は序章なんで短いです

ともかくA・S編の始まりです

第一話

朝と言うのは何事に対しても清く美しく爽やかなものだ

毎日、とはいかないものの、殆どの人が窓から差し込む朝日に照らされ、その光を体に一身に受けることで穏やかな朝を迎える

それは此処、海鳴市でも同じ事

ジュエルシードの事件で一時は戦いの舞台となったものの、今では安らかな平和な時間が流れている……

「ブレイズキャノン!!」

『ドガン!!』

………前言撤回

約一名、穏やかな朝を迎えていない人物が居た

「ハア、ハア、ハア……起きろ大道!

お前に仕事を持ってきたんだ!早く起きろ!」

そう言ってクロノは目の前で寝る男、大道連夜に掴み掛かろうとするが、彼の周囲にあるバリアがそれを阻んだ

事実、先程のブレイズキャノンは部屋で小規模の爆発がしただけで、そのバリアには傷一つついていない

「起きろ大道！起きるんだ！」

今度は更に魔力を収束させ、より強力な一撃を放とうとするクロノだが、そんな状況でも連夜は起きなかった

「それは無言の攻撃許可と受け取った！
ブレイズキャノン！！！」

再び放たれた水色の光弾

しかし、今度は突如バリアが消失し、連夜に直撃しそうになった

「リフレクト……」

一瞬連夜の声が聞こえた気がした

次の瞬間、クロノのに向かって先程のブレイズキャノンが飛んできていたのだ

「なっ！」

防御が間に合わず、回避も不可能と感じてクロノ

だが、不意に彼の前に一人の人物が立ちふさがった

「マナシールド」

『バチイイイイン』

クロノの前に現れた人物は連夜のパートナーであるアテネ

彼女がクロノを護ったのだ

「連夜さん！いくら十分の一に弱めていても、当たったら痛いんですよ？」

そう言っただけで連夜が寝ていた方向を見つめるアテネ

クロノ達も同じ方向を向くと、其処には頭を掻きながらベッドから立ち上がる連夜の姿があった

「まったく朝から騒がしいなあクロノ」

露骨に気だるい感を出す連夜

どうやらもう少し寝たかったようだ

「モーニングコールなら頼んでないぞ？

それにアテネもアテネだ

なんでこいつを家に上げたんだよ？」

連夜の家は連夜とアテネ以外は本人達の同伴がない限りこの部屋で転移する事が出来ない

そのためクロノが此処にいるという事は、ごく丁寧に玄関から入ってきたと言っただけだ

「いやあ、ユーノさんが一緒にいらっしやって……

お土産のお菓子について……」

舌をペロツと出して「テヘッ」と言ったアテネ

「そうか……お菓子の土産ならしゃあないな……なんて言うと思
ったか！」

笑いながらアテネに脳天チヨップを食らわした連夜は、そのままク
ロノに向き直った

「で？なんの用？」

ふんぞり返って話す連夜に再びブレイズキャノンを撃ちたくなった
クロノだが、そこは我慢

落ち着いた様子で話し出した

「実は最近管理外世界や無人世界で、其処に住む魔力の高い野生動
物が襲われたりしているんだ
動物の種類はバラバラで共通性は単に魔力が強いと言うことだけ……
しかも、全部が全部、リンカーコアの魔力が空の状態で見見された
んだ」

其処まで聞いて連夜は犯人は誰で、何が目的なのかは理解した

まあまだ言うてはダメな時期なので敢えて言わないが……

「俺はパス」

そう言うて連夜はヒラヒラと手を振った

「何故だ!？」

もちろんクロノはそれに噛みついた

「言つたる?俺は自分の大事なもん以外にこの力を使うつもりはない……」

何回かお前とは任務もしたが、それは俺の大事なもんがその任務で関与していたからだ……

今回はまだ管理外世界や無人世界で起きてんだろ?

そいつらがこの世界に関与してきたら手伝つてやるよ」

「君はそれでも管理局の魔導士か!？」

すでに怒りの臨界点を超えているであろうクロノは連夜に怒鳴った

連夜はやれやれと頭を振った

「何度も言わせんな……俺は高町やお前の民間協力者であつて、管理局の魔導士なんかになつた覚えはない」

「大道!!!」

とうとう限界だ

クロノが連夜に殴りかかつていった

「ちよつとちよつと落ち着いて!これ以上人の家で暴れちゃまずいよクロノ!」

そう言つてクロノを羽交い締めに行っているのはユーノだ

「止めるなユーノ！僕は我慢の限界だ！」

ユーノの静止を振り切ろうと暴れるクロノ

それを必死に止めるユーノ

一方の連夜は目の前の光景に頭を痛めていた

「はあく、いい加減察してくれよクロノ……お前もその大事なものの中に入ってんだ……そのお前の協力を断る意味を考えてくれよ……」

その言葉を聞いて、幾らか冷静さを取り戻したのか、クロノは暴れるのをやめた

「どう言う意味だ？」

その目は真っ直ぐ連夜を見つめている

無論ユーノも同じだ

連夜は「ふう」と息を吐くと、「こう言った

「直にその犯人たちはこの海鳴に現れ、事件を起こす」と

「また此処なのか……」

そうつぶやいたクロノに連夜は調査の足しにと思ってあることを教えることにした

「クロノ……冷静に考えるよ？この事件は過去に一度あった筈だ……お前がまだ小さい時にな……」

「なんだと？過去に似たような事件……！！」

そこまで言っつて、クロノはどうやら連夜の言いたいことが理解できたようだった

直後、彼の目から怒りの炎が燃え始めていた

「大道……もし……もしお前の言っていることが本当だとしたら……」

拳を握り締め、『ギリギリ』と音が鳴る

「間違いないさ……今回の事件は、間違いなく闇の書が絡んでる」

これはまだ序章

後に闇の書事件と呼ばれたこの事件はこうして始まったのだった

第二話（前書き）

ふう〜

なんとか年内にもう一本上げれましたorz

お待ちくださった皆さまお待たせしました

第二話

連夜 side

『闇の書……大道……この件、必ず僕達でケリを付けよう……』

あんな怒りを隠そうともしないクロノは始めてみた

あの後あいつらは直ぐに任務に向かったし、俺も何を言えなかった

と言うより、言えるわけがないな……

「……さん……連夜さん？」

不意に声を掛けられたら俺は『ビクッ』と体を反応させ、声の主の方向に頭を向けた

「もう、どうしたんですか連夜さん……」

さっきから呼んでいたんですよ？」

そう言っただ俺を見つめているのは二十代くらいの若い女性だった

緑の小さな帽子をちょこんと頭に寄せ、クリーム色の綺麗な髪は肩まで伸びていた

「悪かったなシャマル

少し考え事をしていたんだよ」

俺がシャマルと呼んだ女性は「そうですか」と笑顔で言った

いやはや、なんとも癒される

「おい連夜！なにシヤマルと難しそうな話してんだよ！あたしも混ぜろ」

そう言つてシヤマルの上に乗ってきたのは赤いまるで絵本に出てくる魔女のような学校をした少女

お気に入りの赤いとんがり帽子がよく似合っている

「何も難しい話はしてねえよ

つかヴィータは子供だからなあ

難しい話でもわかんねえだろうな」

俺がヴィータと呼んだ少女はそれを聞くと「あたしは子供じゃねえ！」と言つたから

「じゃあヴィータ、かけ算の七の段を言つて見な」言つてやつた

案の定、ヴィータは直ぐに困つた顔になり、次第に顔が赤くなると共に、頭からも煙が出始めた

「うわあああはやてええええ！

連夜がいじめろ」

そう言つてヴィータが泣きついた女性はこの家の主であり、俺の親友である八神はやてだ

「あゝよしよし

連夜君もあんま虐めんといたってな」

苦笑いながらも決して嫌ではないようで、母のようによしよしとヴィータをあやすはやて

まるで本当の親子のようだった

「すみません主はやて
大道もすまんな……」

そう言つて俺とはやてに頭を下げるのはピンク色の髪をポニーテールにした西洋の騎士の格好をしている女性だった

「気にすんなシグナム
俺は気にしない」

「かまへんよ。あたしはみんなの親代わりみたいなもんやし、みんな家族やさかいな」

俺にシグナムと呼ばれた女性はそれを聞いて少しばかり笑顔を見せてその場に座った

まあともかく、先に泣かしちまったヴィータを泣きやますか

「ほれほれヴィータ
いい加減泣きやめよ
可愛い顔が台無しだぞ？」

そう言つて俺が頭を撫でてやると、ヴィータはきまって泣きやむ

まあ顔がより赤くはなるが……

「ば、バカやろう……みんなの前でそんな……うう……」

そう言っただけ照れるヴィータ

その瞬間俺に向けられる冷たい視線

それは間違いなくシグナム、シャルル、はやてから放たれていた

「あの……その……大道は……ヴィータのような小さな女性のほうが……」

「あらあら……でしたら私は……」

「うちはおもつきりストライクゾーンやな

ほら、うちに飛び込んでおいで」

各々あらぬ妄想や考えを持ち始める三人

それに俺はため息を吐きながら、いつもこの場を収める魔法の言葉を言うことにした

「いやいや、俺はヴィータやシャルル、シグナムにはやてもみんな大好きだぜ？」（友人として）「」

その瞬間、全員が顔を赤らめて下を向いてしまう

「ま、まったく……大道はいつもそうやって……」

「まあ、連夜さんったら……」

「あうう……」

「はう……連夜くん大胆やわあ……」

何でこうなるんだよ……

思わず『orz』の体勢をとってしまう俺

会った当初なんてみんなギスギスしてたじゃない

「はやての友人でもあたしは信じねえぞ」

とかヴィータ言ってたじゃない

シグナムなんか明らかに敵意剥き出しだったじゃない

『まあ……夜道後ろから誰かに刺されないようにな』

念話で俺にそう忠告してくれたのは銀髪で青い服を来た褐色の肌の男性だった

『ザフィーラ、だったらお前からもなんか言ってくれよ……』

俺がザフィーラと呼んだ男性は少し考えたようだが、ある結論に至ったのか答えを掲示してくれた

『我関せず……』

『お前らは揃いも揃ってバカばかりかああい!!』

と思わず突っ込んだ俺を誰も責められないはずだ……

さて、原作を知っている皆さんならもうお分かりだろう

此処は八神はやての住む八神家であり、先程俺が喋っていた人物達は、この家の主のはやてと、闇の書の守護騎士達だ

クロノ達よりも前に、リンカーコアから魔力を奪われるなどの事件が合ったことを知った俺は、まさかと思いい八神家に行ってみただとすると、やはり守護騎士達が闇の書から現れて、蒐集をしていると言った状況だったのだ

其処からは俺もちよいちよい蒐集には協力している

目下の目標は闇の書を完成させ、リインフォースを呼び出さないと
な……

「だが、そのために何か犠牲にしなきゃいけないってんなら、俺はそんな理平気でぶち壊す……」

ふと呟いた言葉

その言葉は周囲の騒がしさによってかき消されていく

思わず口に出てしまった

気をつけるとしよ……

「お、もうこんな時間か……」

ふと時計を見ると昼の三時前だった

あいつとの約束も三時だ

慌てた俺は急いで立ち上がった

「悪いな、ちよいと用事があるから俺帰るわ」

そう言つて顔の前で「ごめん」と手を合わせる

周囲からは「え〜」とか「もう少しゆっくりしていけば」などと声が上がったが、それらもはやての一言で消沈した

「はいはい、連夜くんも忙しいんやから、みんなわがまま言つたらあかんぞ？」

みんなはやての言葉には素直に従う

それからはやては俺の方を向いた

「またな連夜くん

また明日……やで？」

その瞳の中には内心行つてほしくないと言う感情も見れたが、俺はそれを敢えて無視した

「悪いな八神…また明日…ヴォルケンスもまたな！」

そう言うてはやてとヴォルケンスー（守護騎士達）に別れを告げて、俺は約束の場所に向かった

side out

『カンカンカンカン……』太陽が徐々に西に傾き始めた午後三時頃、海鳴の公園に一人の少女がいた

その前では空き缶が桃色の光球によってお手玉のように宙に上げられていた

「よっ、ほっ、ほっ、ほっ」

その少女、高町なのはは一人魔法の訓練をしていた

『ガッ……』

しかし、魔法で精製した光球を器用に操ると言うのは非常に技術と集中力を有するもので、先程まで上げられていた空き缶は光球に当たらず、虚しく大地に缶が転がる音が響いた

『カラン、カランカラン……』

「はぁ…また失敗だ」

「いやいや、良くできたんじゃないか？」

そう言うて後ろから彼女に拍手を送るのは、今日彼女がこの公園で

待ち合わせをしていた少年、大道連夜だった

「連夜くん！」

待っていた人物が現れたことに喜びながら、連夜に駆けていくのは

「すまんな高町、少し遅れちゃった」

そう言って謝りながらなのは頭を撫でる連夜

「うっん、大丈夫なの」

笑顔でそう言うのはと同時に、彼女のツインテールがピョピョピョ
コと動く

それはまるで生きているようだった

「そうか。ところで、今やってたのはデイベインシューターだったか？その制御訓練をしていたのか？」

「うん！そうなの！」

でもやっぱりイマイチ上手くいかないの……」

そう言いながらしょんぼりするなのは

それに連動してツインテールもシュンと垂れ下がった

本当になんなんだこの髪は……

「最初に比べりゃだいぶ上手くなったよ

てかユーノに聞いたぞ？

お前暇さえあればずっと魔法の訓練してるそうじゃねえか……
ユーノの奴呆れてたぞ？」

痛いところをつかれたと言った顔のなのは

「で、でも……」

「でもじゃない」

なのはの意見を一蹴した連夜

なのは「あうう」としょんぼりしてしまった

「訓練をするのは良いが、まだちゃんと成長しきってない体で必要以上の負荷を掛けてちゃダメだろう？」

連夜がそう言っても、まだ「でも……」と言っなのは

連夜は少しため息を吐きながら「あのなあ……」と言葉を続けた

「お前、ユーノやクロノからなんで俺が高町を魔導士に推薦したのか聞いたか？」

「う……うん」となのは

連夜はそれを確認した瞬間、左手に力を込めた

「だったらさあ……いまだに俺はお前が大怪我する夢を見るんだよ……その原因がお前のその無茶な訓練だったのが分からないかな！

？」

なかなか怒りを込めながら、連夜はなのはの頭を左手で掴んでいた

「いたたたた！

痛い！痛いよ連夜くん！」

涙目でパタパタと手を上下に振るなのは

連夜は般若のような顔になっていた

それから数分後、ようやく解放されたなのはは頭を押さえながら「あうう…」と言いながらしゃがんでいた

「これに懲りたら無茶な訓練は止める……

お前がそこまで力を欲するのに何かしら理由はあるんだろうが……何も急ぐ必要はない……」

そう言いながら連夜はしゃがみ込むなのはの頭を優しく撫でた

「それによ…お前がもし危険な状況になっても……俺がお前を護つてやるから…心配すんな」

連夜の笑顔で伝えられた言葉に「はううう……」と顔を赤らめるなのは

「じゃ、じゃあさ連夜くん……」

「ん？」となのはの問い掛けに答える連夜

彼女の頭を撫でていた片手は依然彼女の頭の上だ

「あたしと一緒に訓練を……」

そう言いかけてなのは自身に危機的状況が迫っているという事を察した

目の前で優しい笑顔の連夜の表情が般若に変わるまで残り五秒……

「高町さん？お前は人の話を聞いてんのかあ！？あゝあゝ！？」

「あうあう……痛い！痛いよ連夜くん！」

そして五秒後、般若の表情と化した連夜がなのはの頭を掴んでいるという少し前と似た構造が出来上がった……

「ったく！」

それから数分後、再びなのはは頭を押さえてしゃがんでいた

「ダメだよ……あたしも、連夜くんと一緒に戦いたい！今は無理でも、いつか連夜くんの隣で戦っていたいの！」

涙目だが、自分の思いを伝えるのは

連夜は少し面喰らって反応出来なかった

「連夜くんがああの中へ落ちていったとき、あたし凄く心配したんだよ？」

もし連夜くんが帰ってこなかったらどうしようって思ったんだよ！？
連夜くんは無茶しすぎだよ！

あたしやフェイトちゃん達には無理するなって言って、連夜くんが
一番無理してるよ！

連夜くんがいなかったら……あたしは……！！」

その続きを言う前に、なのはは連夜に押し倒された

しかもそれが抱き締めるような大勢になっているため、あらぬ勘違
いまでしてしまいそうになる

「れ、連夜くん？」

顔を真つ赤にしながらも、真横にいる連夜の頭に視線向けるなのは

直後、自分の視線の上を魔力の弓矢が二本通り過ぎた

「後ろから狙撃とは……やってくれんじやないか」

ゆっくりと連夜が顔を上げ、その頭を後ろに向ける

なのはもゆっくり体を起こすと、空からゆっくりと降りてくる、二
人の仮面の人物が現れた

「ほお……やはり噂は本当だったか……」

「君は我々の計画には邪魔な存在だな……」

二人の仮面の男はどこぞの勇者王そっくりの声でそう言った

男達が話す人物とは間違いなく連夜のことだというのは察しがついた

「ふん……八神のどこから俺を監視してたか？」

悪いが……あいつらには出だしさせねえぞ」

構える連夜の横で、なのはは対局にいる仮面の男達と連夜を見ていた

「れ、連夜くん……これはいったい……」

状況が読み込めないなのはは、変な汗をかいていた

「高町……分かり易く言うと……そいつらは……敵だ」

そう言つて懐から取り出したのはエターナルメモリ

起動スイッチを押し、機械音が鳴った

「て、敵！？だったら……私も戦うの！」

そう言つてなのはも、首からぶら下げていた待機モードのレイジン
グハートを握り締めた

「なんだそれは？」

「君のデバイスか？」

どうやら仮面の男は連夜のことは何も知らないらしい

連夜はその事に少し安堵すると共に、腰に現れたロストドライバー
に勢い良くメモリを突き刺した

「お前ら……敵と戦うのなら、敵の情報は調べておくもんだぞ？俺みたいなやからは特にな！」

「その通りなの！」

なのは手に握られたレイジングハートが光り輝き、二人は変身を始めた

「変身！」

「レイジングハート、セットアップ！」

連夜がメモリスロットを横に倒し、なのはが呪文を唱える

二人の体は眩い光に包まれて、その変身は完了した

「なっ！もう1人の魔導士はともかく……貴様いったい何者！？」

仮面の男達が連夜の姿に驚いている

無理もない

背丈は少年くらいだったはずの姿が、突然成人の大人くらいにまで成長したのだ

初めて見た人物が驚かないわけがない

「高町なのは……レイジングハート！行きます……！」

「俺の名は仮面ライダーエターナル……
さあ、地獄にたたき落としてやる！」

二人はそう言っつて仮面の男達に向かっていった

なのは side

「シュート！」

私の周囲に精製したデバインシューターを仮面の人に放つ

「当たるか！」

でも、仮面の人はそれを尽く避けてきます

「君のような年齢の魔導士でここまで誘導制御系射撃魔法を制御できるのはたいした者だ……」

そう言いながらも、仮面の人は私の攻撃を回避して、私に向かって攻撃を放ってきます

「くっ！レイジングハート！」

『Round Shield』

直後、私が自分の前に手をかざすと、魔法陣を利用した円形の障壁が私を守った

『Divine Shooter』

「シュート!!」

レイジングハートを振り、再びデイバインシューターを放つ私。それでも、仮面の人は意図も簡単にそれを回避しました

「だがな、所詮ここまでだ。遠隔操作がいかに出ていようと、この程度の速さならば軌道さえ分かれば避けることなど造作も無い」

私はその言葉を聞いて、少し表情が緩んだのが分かりました

速度があれば、避けられない……

『マスター、特訓の成果を見せましょう』

「うん!レイジングハート」

レイジングハートを握り締め、しっかりと前に居る仮面の人を見る

「デイバインシューター!……シュート!!」

私が放ったデイバインシューターは、様々な軌跡を描きながら、仮面の人に向かった行った

「どれだけ撃とうと無駄な物は無駄だ!」

そう言ってまた仮面の人が回避しようとした瞬間、私は仮面の人が油断したところを見逃しませんでした

「アクセセル！」

その一言で、仮面の人に向かっていった光球達の速度が一気に加速し、まず一発が仮面の人に直撃しました

「なっ！」

直撃したことに驚いているのを、間髪いれずに次々と光球が当たっていきました

私は爆煙で仮面の人が見えなくなった瞬間、魔力をレイジングハートの先端に集め始めました

「ハア、ハア、ハア……！！！」

仮面の人煙の中から現れたけど、私の準備はもう完璧でした

「行くよ！ダイバイイイイイイン………バスター！」

瞬間、レイジングハートから収束された魔力が解放され、ピンク色の魔力の砲撃が仮面の人に向かっていきました

「ぐっ！うわあああああ！」

仮面の人はもちろん間に合わず、ダイバインバスターは仮面の人を飲み込んでいきました

side out

連夜side

『ドガアアアーン!』

少し離れた所から聞こえた爆音

それがなのはの勝利の音だと理解するのは簡単な物だった

「バカな……我々がこうも劣勢に立たされるとは……」

俺の前に居る仮面の男もそれなりにボロボロだ

まあこちらが手を抜いているからまだ決着がついていないだけで、
いつでも勝負は決められた

「くそつ！貴様ら規格外過ぎるぞ！」

負け犬の遠吠えにしか聞こえないその言葉に俺は笑みを漏らす

と言っても彼方からは俺が被った仮面で見えないがな

「退くなら見逃してやる……。相方を連れてさっさと逃げろ」

今後の計画にもこいつらは必要だ

それに、今こいつらを逃がせば間違いなくこいつらの主人に俺のこ
とを教えるはずだ

そうすれば、彼方から俺にコンタクトを取ってくるかもしれない……

「に、逃げろだと!？」

貴様が見逃す保証がどこにある!？」

明らかな動揺をみせる仮面の男

確かにこいつの言い分はもっともだが……

「勘違いするなよ？」

俺は今お前を塵にする事だつて出来るんだぞ？」

そう言つて片手を空に向けて作り出したのは直径1mはある炎の球体

それを見た仮面の男は思わず「ひっ」と悲鳴をもらした

「どうした?これが最終勧告だぞ化け猫ども……リーゼロッテ、リ

ーゼアリア……お前がどつちかは知らんが、ともかく退くならば退
け……

返事はYESしか受け付けない」

禍々しいまでの殺気を発しながら俺はそう言った

やつは俺が正体を知っていた事に驚いていた

かなり慌ててもいた

だが、やつから帰ってきたのは「例え正体を知られていたとしても、
我々は負けない」と言う言葉だった

つまりは『NO』と言う答えだ

「良かろう……なら……消えてなくなれ……」

自分でも引くほど殺意のこもった声でそう呟くと、先程から空に向けていた俺の手を仮面の男に振り下ろした

当然、その手の上に浮かんでいた炎の球体も、勢いよく仮面の男に向かっていった

「イフリートブレス……」

その魔法を唱えた瞬間、炎の球体は炎の閃光となって飛んでいった

「うわあああああ！」

その素早さに確実に直撃すると思われたが、もう1人の仮面の男がその男を助け出し、ギリギリで回避し、転移した

「ちっ！逃がしたか……」

舌打ちをする俺に慌てて近付いてきたのはなのはだった

「ごめん連夜くん……逃がしちゃった」

しゅんと下を向くと共に彼女の頭のツインテールも下がった

頭と直結してるんだらうこの髪は……そう思う事にしよう

「気にすんな高町……お前はよくやった」

お世辞でも何でもなく、素直になのはを誉めた

「えへへ…ありがとう。連夜くん」

顔を赤らめてそう言った彼女だったが嫌ではなさそうだった

『本格的にA・S編が始まったか……』

俺は内心そう思いながら、夕焼けとなった空を見上げていた

第二話（後書き）

いやはや……なんともな展開ですな（泣）

この後をどうしようorz

年内の更新は今日がラストです

と言っても大晦日に更新して最後もくそもないのですが（笑）

来年も頑張って行きたいと思います

来年完結……出来るかなあ（泣）

頑張りましたよう（笑）

応援よろしいお願いします

第三話（前書き）

新年明けましておめでとございませう

2012年も応援よろしくお願いいたします

第三話

「やあ！」

「おおらー！」

結界が張られ、完全に二人きりの空間となったあるビルの屋上

そこで二人の魔導士が激突していた

一人は天使のような白いバリアジャケットに身を包んだツインテールの少女

もう一人はおとぎ話に出てくる魔女のような衣装に、不釣り合いな上に巨大なハンマーを持っていた

「シュート！」

ツインテールの少女の名は高町なのは

つい最近めでたく管理局の魔導士となった少女だ

「当たるかよ！オラーー！！」

一方の少女は闇の書の守護騎士の一人『紅の鉄騎 鉄槌の騎士ヴィータ』である

彼女達が何故戦っているのかはこの際あまり説明しないでおこう

敢えてするとするならば、なのはに向けて『謎の魔力反応があったから調査して来てほしい』とアースラから告げられたのだ

其処でその場所に急行したら、ヴィータが強襲してきたと言っわけだ

「あなたはいつたい誰!？」

「いつたい何が目的なの!？」

ヴィータの攻撃に防戦一方のなのははそう言っって質問を投げかける

「へっ!今から蒐集されるって奴にいちいち答えてられっかよ!」

そう言っって蒐集と言う単語だけ告げて、一気に自身の相棒であるアイゼンを振りかぶるヴィータ

「シールド…」

「おせえ!」

なのはがシールドをギリギリ展開できた直後、ヴィータによって振り下ろされたハンマーはシールドを粉碎

なのはをビルの屋上へ叩き落とした

「へへっどんなもんだい!」

勝利を確信したヴィータは勝者の笑みでなのはが落下し、煙を上げている場所を見下ろす

だが、魃の最後っ屁と言っ言葉があるように、追い込まれた相手と

いづのは予想だにしない反撃を仕掛けてくる可能性があるのを彼女は忘れている

その実、ヴィータの後ろから、真っ直ぐ迫っている桃色の光球が迫っていたのだ

「んなもんが分かってねえわけねえだろ!!」

そう言って一文字にアイゼンを振るったヴィータ

当然迫ってきていた光球は消し飛ばされたと思いきや

当たる瞬間直角に降下し、ヴィータの真後ろに回り込んだのだ

「しまっ……」

彼女が体勢を整えるよりも早く、光球はヴィータに直撃した

「ちっ！なるゝ……」

そう煙が晴れた場所を見下ろす

ヴィータ自身に其処までダメージはなかったが、見下ろした場所では不敵に笑うのははしてやったりと言う顔だった

「てんめえ……?」

そう言ってアイゼンを構えようとしたヴィータがある違和感に気付いた

「……ない」

彼女が先程まで頭に被っていたとんがり帽子が無くなっていたのだ
慌てて辺りを見渡す

恐らく先程光球が直撃した衝撃で帽子が飛んだのだろう

探し物は直ぐに見つかった

そう遠くないところで落下していた

「待て！」

慌てて取りに行こうと向かった瞬間、彼女の目の前を桃色の光球が
通過する

「なっ！」

驚きながら撃つた相手を確認

こちらにデバイスを向けているのはだと言うことは間違いなかった
そして、再び帽子の位置に視線を戻すと、其処にはもう帽子の姿は
なかった

「……………て……………てめえ！！」

その瞬間彼女に沸き上がってきたのは紛れもない殺意と怒り

「アイゼン！」

『了解…』

アイゼンがまるで銃弾を装填するような音を発し、その体から空になったカートリッジを射出する

その瞬間、彼女の魔力が何倍にも跳ね上がった

「なっ！なんなの！？」

突然の事に驚きを隠せないのは

一方のヴィータは真っ直ぐなのはを睨みつけていた

「絶対に許さねえ……………ぶっ潰してやる！！」

その言葉を体现するように、彼女の相棒アイゼンはその体を二倍近くにまで巨大化させた

「ラケーテン……………ハンマー！！」

叫びながらのはに向けて降下

そのまま彼女に向けて、ヴィータはアイゼンを振り下ろした

「ぐっ！！うううう！！」

自身の魔力を全部防御に使ったシールドを展開するのは

だが、奇跡的に破られてはいないものの、ヒビが入り出したことから崩壊は間近だった

「ぐっっ!! あああああ!!」

悲鳴を上げるのは

ますますシールドに来る重圧は強くなる

もう無理だ……そう思って諦めかけたとき、一筋の雷がヴィータの真上から降り注いだ

「ちっ!」

直撃することなく、ヴィータはその雷を回避する

痛みと重圧から解放され、半ば意識朦朧としながらも前を見る

そんな彼女の前に現れたのは、彼女の親友である金髪の少女の後ろ姿だった

「ふ……フェイト……ちゃん?」

呟いた言葉に、目の前の少女は振り向かない

振り向かないかわりに、目の前の少女は怒りに満ちた目でヴィータを見ていた

「ユーノ……なのはをお願い……アリシア……ごめんね、もう一回お願い」

「分かった！」と返事が聞こえると共に、なのはに駆け寄るひとりの少年とフェイトに近寄るフェイトそっくりの少女

名をユーノ・スクライアとアリシア・テストロッサ

「ユーノ………君？」

虚ろな目でユーノを見つめるのは

ユーノは必死になのはに治癒魔法を掛けていた

「なのは！今治療してるから、もう大丈夫だからね！」

懸命になのはに話し掛けるユーノ

その言葉通り、徐々にだがなのはの意識は鮮明になっていき、傷口も塞がりつつあった

「なのはがあんな風に追い込まれる相手よ………油断しちゃダメよフェイト」

「分かってるよアリシア………お願いね」

そう言って瓜二つの姉妹はお互いに手を取った

「ユニゾン・イン！」

そして次の瞬間、フェイトとアリシアが光り輝き、二人は一心同体になった

ユニゾン……つまりはユニゾンデバイスとして蘇ったアリシアと、融合適性が非常に高いフェイトだからこそ出来る離れ業

つまりは融合なのだが、それによってフェイトはなのはを凌駕出来る程の強大な魔力と力を得た

更に、その意識と精神まで融合することで、フェイトの弱い部分アリシアがカバーし、アリシアの弱い部分をフェイトがカバーするという方法も出来るようになった

「ゆ、融合騎だと!?!
なんでお前らがそんなもん……」

驚くヴィータをよそに、フェイトは自分達の相棒バルディッシュを握り締める

「行くよ!バルディッシュ」

『了解ですマスター』

バルディッシュは返答と共にその姿を鎌へと変え、それを確認したフェイトはあつと言う間にヴィータの懐に入り込んだ

「なっ!」

「やあああ!」

勢い良くバルディッシュを真一文字に振る

ギリギリで回避したヴィータは空へと上がった

だが、フェイトは予想していたかのように周囲に三つの光球を作り出し、ヴィータに向けてはなった

「フォトンランサー！」

なのはのように幾重にも方向を変えることは出来ないが、その分速さは確かなもので、慌てて上に飛んだ直後のヴィータではそれに反応するのは不可能だった

『ヒュン！』

だが間一髪、ヴィータに向かっていたフォトンランサーは何者かによって両断された

爆煙を切り裂き現れたのは、ヴィータ達ヴォルケンリッターの隊長でもある『烈火の将 剣の騎士シグナム』だった

「し、シグナム！」

彼女の登場に驚くヴィータ

一方のシグナムは、自身の愛刀レヴァンテンを構え、眼下のフェイトを見ていた

「ヴィータ、カートリッジを使ったな？」

予備があるとは言え無駄に使うなどあれほど言っただろ…
相手が使わざるを得ないような相手だとは思えないが？」

視線を変えず、ヴィータにそう言ったシグナム

痛いところを付かれたヴィータは「うっ……」と声を漏らした

「で、でもよおシグナム……あいつがはやてから貰った帽子を……」

そう言いかけた瞬間自分の目の前に赤いトンガリ帽子が現れた

それは間違いなく自分の帽子であり、自分が拾いに行こうとした物だった

「さっき拾っておきましたよ？」

今度は、落としちゃダメですよ？」

そう言って笑顔でヴィータに微笑むのは、『風の癒し手 湖の騎士 シヤマル』である

「シヤマルウウウ！」

ありがとう〜」

嬉しそうにシヤマルに抱き付くヴィータ

その姿は本当に年相応の子供のように感じてしまう

「敵が来るぞ……気を引き締めろ」

そのシヤマルを乗せているのは美しい蒼色をした狼

その正体は、『蒼き狼 盾の守護獣ザフィーラ』だった

「ザフィーラの言つとおりだ……シャマル、ヴィータを連れて下がっている

私とザフィーラで奴らを片付ける

その間に……」

「分かっていますよシグナム

湖の騎士にお任せあれ」

そう言つて笑うシャマル

シグナムもその微笑みに癒やされ、程良い緊張状態になったようだ
その時と同時に、シグナム達の前にフェイトがゆっくりと上がってきた

「私は、管理局の魔導士、フェイト・アリシア・テストロッサです
あなた達の目的を教えてください」

凜とした表情でそう言つたフェイト

アリシアがユニゾンしているおかげかなのか、いつもの彼女のよう
などこかオドオドした感じは無くなっていた

「私は烈火の将シグナム……悪いが目的は告げられない……
お前達が管理局ならば尚更な……」

そう言つて睨み付けるシグナムの眼光にも、フェイトは恐れること
はない

「そうですか……出来れば話し合いで進めたかったです、仕方

ありません！」

再びバルディッシュを構えたフェイト

それに無言で応えるシグナムもまたレヴァンテンを構えた

「手を出すな……彼女くらいは私一人でも何とかなる」

余裕：と言えばそうなのだろうが、かと言って彼女はフェイトを軽く見ている訳ではない

むしろ、久しぶりの対人戦だ

騎士として、1人の武人として、それは心躍るものだった

『出来れば、違う形で会いたかったな……』

内心そう思いながら、シグナムはレヴァンテンでフェイトに切りかかった

「ふっ！」

ステップでそれを回避し、再び光球を生成するフェイト

「フォトンランサー！ファイヤ！」

今度は十個の光球がシグナムに向かっていく

「私に二度も同じ技が通じると思うな！」

向かってくる光球をレヴァンテンで一閃……の筈だったのだが

『シユンシユンシユン!』

なんと、光球達がレヴァンテンを避けるように散開したのだ

「なに!？」

「ハアアアアア!」

驚くシグナム

しかし、今度はフェイトがバルディッシュを振りかぶってシグナムに迫った

『ガイン!』

鏝迫り合い状態になりながら、お互いに一步も退かないフェイトとシグナム

「先程真っ直ぐしか撃てないように見えたのはわざとか？」

顔をフェイトに近付けながらそう問うシグナム

「ええそうよ。正確には前に撃ったのが私で、さっき撃ったのは私よ」

フェイトは意味不明な答え方をしたが、ユニゾンデバイスの事を知っているシグナムはその一言で全てを理解した

「なるほどな……今は融合騎か主、そのどちらかが操作してるわけか……考えたものだ

あれでは相手は真っ直ぐにしか撃てないものと誤解する」

不敵に笑うシグナム

フェイトもこの戦いが楽しいようだった

「はっ！」

少し力を強め、シグナムから距離を置くフェイト

その瞬間、シグナムに向かって先程の十個の光球が直撃した

たちどころに彼女は爆煙に飲み込まれる

だが、それをレヴァンテンで断ち切り、シグナムは姿を現した

その体は無傷であった

「あれを食らって無傷なんて……」

驚くフェイト

一方のシグナムもフェイトを出来る相手だと再認識した

『それ故に惜しいな……この戦いは……』

どこか哀しげな表情を浮かべたシグナム

だが次にはまた凜とした表情に変わり、レヴァンテンを構えた

「敵はまだやれるみたい……バルディツシュ！
私達も頑張るよ！」

『了解ですマスター』

黄色の球体が光り輝き主に返答する

再びバルディツシュを構えなおしたフェイト

一方のシグナムは、それを確認すると瞳を閉じ、レヴァンテンを鞘に収めた

「……………」

その形はまさに居合いの型

しかし、フェイトはその居合いと言うものを知らなかった

もし知っていれば、この戦いはもう少し長く続けられたかもしれない……

「やあああああ！」

シグナムに迫り、バルディツシュを振り下ろすフェイト

だが、シグナムの居合いの距離に近付いた瞬間

彼女は無数の斬激に切り刻まれた

「がつ！」

幸い非殺傷設定であったことと、自身を守るバリアジャケットのおかげで肉体に傷は付かなかったが、それでも彼女の意識を刈り取る程の痛覚は充分与えられた

「惜しい相手だった……」

出来れば、違う形でまたやり合おう………」

哀しい目でフェイトを見つめ、背を向ける

意識を無くしたフェイトがそれを聞いていたかどうかは分からないが、フェイトはそのまま真つ逆さまに落ちていった

「フェイト！」

危うく屋上に激突しそうになっていたフェイトを、彼女の使い魔アルフが受け止めた

彼女は今まで別の任で出ており、帰ってきて直ぐにこの現場に飛んできたのだ

「フェイト！アリシア！しっかり！！」

体を揺さぶるアルフ

直後、フェイトの体は光り輝き、次の瞬間にはアリシアとフェイトの二人に分離していた

「……………」

意識を失っているのだと確認したアルフは、二人を優しく屋上に降ろした

「あ……………アルフさん……………」

ユーノの治療を終えたのだろう

レイジングハートを杖代わりにしながら、なのはがアルフに近付いた

「なのは！あんたもこんなにボロボロになって……………」

この三人が戦って此処まで深手を負わせる相手

その相手に今自分が挑んでも結果は見えている

『ともかく、今はこの怪我人三人を逃がすことを考えよう』

アルフはそう思っていた

「逃がしはしない……………」

冷たくそう言ってアルフの前に降り立つシグナム

その威圧感から、アルフは少し足が固まってしまっていた

「悪いが……………貴様らは此処で……………」

と言い掛けて、シグナムは言葉を止めた

その表情は何か恐ろしい物を感じているようだった

居る……間違いないく背後に何か居る

シグナムの額には僅かだが汗まで見え始めた

殺気…彼女が感じているのは禍々しい程の殺気である

それを発している何かが自分の背後にいる

振り向くのすらシグナムは躊躇っていた

だが、そこは騎士として、ヴォルケンリッターの長として、自分は誰よりも騎士として凜としていなければならなかった

そのプライドが、彼女に振り向く勇気を与えた

意を決して振り向いたその先には、高台のような物があった

その上に、それはいた

腕を組み直立不動でシグナムを見つめるそれ…

それは全身を純白の鎧で覆われた人物だった

「貴様……何者だ？」

ゆっくり、だが真剣に、その相手に問い掛けたシグナム

そんなシグナムの問いに、仮面の人物は真っ直ぐシグナムを見ながら答えた

「俺の名はエターナル……仮面ライダーエターナルだ」

第四話（前書き）

連夜登場です

オチは考えてあるのに話を繋げるのが難しい（笑）

第四話

連夜 side

眼下に見える二人の女性、1人はアルフ、もう1人が俺の目当ての人物だ

「剣の騎士、烈火の将シグナムとお見受けする……」

直立の体勢を崩さずにシグナムに問い掛ける

俺が発する禍々しい殺気にやや臆しているものの、その目はしっかりとこちらを見ていることから、戦意までは刈り取れていないらしい

まあさすがはシグナムといった所か……

「如何にも……私はシグナムだ

貴様は……エターナル……とか言ったか？」

その口調からすると私を知っているようだが、どこかで会ったか？」

凜とした表情でそう言ったシグナム

周囲にヴィータ達ヴォルケンスも集まってきた

今なら逃がせるか……

『アルフ……ユーノ……テストロッサ達や高町を連れて逃げる
結界も破壊してある

ただし、俺の名前は口では言わないでくれ……

まだこいつらに俺を知られるわけにはいかない』

『分かったよ！連夜』

『ありがとう連夜！気をつけてね』

二人はそう言って返答し、一瞬の隙をついて轉移した

「あっ！待ちやがれ！！」

「ヴィータ！下手に動くな！」

ユーノ達を追おうとしたヴィータをシグナムが一喝した

「下手に動けば…こいつはその隙を確実に突いて来るぞ……」

シグナムのその言葉に、ヴィータも理解したのかゆっくりとシグナムの側に降り立つ

その近くにはザフィーラも居り、シャマルだけは少し離れた場所に居た

「見逃してくれた事は礼を言おう。ヴォルケンリッターの諸君…

その礼に先程の質問に答えてやる…

お前とはこれが初対面だ……だが、俺は君達の目的も、君達の正体も全て知っている……

最近頻発している魔導士襲撃事件や管理世界での生物のリンカーコアの魔力が無くなっている事などは全て君達の仕業なのだろうか？」

「「「「！！」「」」」

俺の言葉にヴォルケンスは絶句した

自分達の目的は誰にも知られてはいけなかったのに……知られてしまったのだ

「ならば……貴様を此処から生きて帰すわけにはいかない………
すまないが……死んでもらおうか………」

そう言つて彼女達は戦闘態勢に入った

実力差は間違はなくハッキリ見えていると言つのに……まあ、逃げられたらどうしようと思つていたからこれで問題はないがな

「結構だ……ならば返り討ちにするとうしよう………さあヴォルケンリッターよ………地獄にたたき落としてやる………」

俺の言葉がそのままゴングとなり、ヴォルケンリッター対俺の戦いは始まった

side out

シグナムside

「地獄にたたき落としてやる………」

その言葉を開戦の合図と受け取った私達は、エターナルと名乗ったその男に一齐に向かつていった

「でえりゃあああ!!」

「おおおおー!!」

ヴィータとザフィーラがまず先制攻撃を仕掛けた

『ガン!』

振り下ろされたハンマーと拳がエターナルに炸裂する

二人の後ろ姿で正確な確認は出来ないが、恐らく直撃のはずだ

「で?お前らはこんな程度で俺を倒せると思ったわけだ……」

エターナルの声が聞こえた

奴のその台詞から、ダメージを負っていないことが理解出来た

「離せ!」

「ぐっ!」

どうやら二人の攻撃は奴に受け止められていたらしい

必死に離脱しようとするヴィータ達だが、ヴィータ自身は相棒のアイゼンを、ザフィーラは自らの拳を握られていた

「ヴィータ!ザフィーラ!

くっ!二人を離してもらおう!!」

レヴァンティンを握り締め、エターナルにの頭上まで飛び上がり、

切りかかる

すると、奴はあっさり二人を左右に投げて開放し、向かってくる私を見つめていた

「はああああ！」

「ムン！」

奴はなんと、私のレヴァンティンの刃を両手で挟み込むようにして受け止めた

「古来よりこの日本に伝わる伝説の技……名を真剣白刃取りだ」

エターナルはそのままレヴァンティンの刃とは逆の部分を掴んで私を引き寄せ、腹部に向けて拳を放った

『ガシッ！』

「ほう……」

とっさに私はレヴァンティンから片手を離し、向かってきた奴の拳を受け止めることが出来た

奴はそれに驚きの声を漏らしていた

「さすがは闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターの長シグナムだ

……」

「当然だ……私を……私達をなめるなよ？」

奴が何か動き出す前に、片手で持っているレヴァンティンを前に突き出し、掴んでいる拳も離さない

「でりああああ！」

「おおおおお！」

その瞬間を見計らって、左右に飛ばされたヴィータ達が無防備となったエターナルに迫った

「玉碎覚悟か……」

「我々は所詮プログラム……決して朽ちることはない……死ぬのは貴様だけだ！」

死への恐怖など最初から持ち合わせていない

所詮我々はプログラムにすぎないのだ

そこに生や死などと言う概念はない

なのに……

『シグナム……』

なぜだ連夜……こんな時に、何故お前の顔が……

「悪いが……死にはしないさ……

俺も……無論貴様もだ！」

その声が私の思考を断ち切らせた

直後、奴の左右に向かってくるヴィータ達を向かい撃つように無数の炎の矢が現れた

「なっ！」

「バカな！」

その出現にヴィータ達も動きを止める

その矢達は間違いなく二人を狙っている

だが、なんて数だ

普通に目で数えられる限界を超えている

デバイスも見当たらないのに、こいつはこれほどの数を一瞬で生成したというのか？！

「貴様らに対して500本ずつ計1000本…
無数には程遠いが、お前たちは避けられるか？
試してみるかい…」

エターナルがそう言った直後にその矢は発射態勢に入ったのが分かった

今か今かと、それらは主であるこの男の言葉を待っている

「空を焼き尽くす雨となれ……サウンザンドフレアシャワー！」

直後、ヴィータ達に向かってその炎の矢は放たれた

撃った直後はまだ回避や撃ち落とそうとしている二人を確認できたが、すぐにそれも無数の矢に吞まれて見えなくなった

「ヴィータ！ザフィーラ！」

その矢が二人に当たったのか誘爆したのかは分からないが、跡形もなく矢は爆発し、煙の中の二人は見えなかった

「いつまで呆けているつもりだ？」

背後から聞こえた声

気付けば目の前にいた奴の姿が無くなっていった

そしてその声が後ろから聞こえた……と言っことは…

「ぐっ！」

上体を崩しながら後ろに向けてレヴァンティンを振る

振られたレヴァンティンの次に私が見たのはレヴァンティンを避けるようにして後ろに飛んだエターナルの姿だった

着地しエターナルが私を見上げる

気付けば最初の立ち位置が全く逆の状態となって私達は立っていた

「ハア、ハア、ハア……」

「くっ……危なかった……」

私の横に肩で息をしたヴィータとザフィーラが降りてきた

二人とも無事だったか

「シグナム、戦いが長引きすぎました

そろそろ帰らないと………」

私の後にシャマルが転移してそう言った

確かに……これ以上長引けば主はやてを不安がらせる

しかし、私は内心この男との戦いが楽しくてしょうがなかった

終わらすのも惜しいと感じるほど、私の心は歓喜に満ちていた

だが、騎士としての私の喜びよりも優先しなければいけないことが
私達にはある

その為なら私は……

「エターナル……悪いが、次の一刀で終わらせる……
貴様とはもつと別の場所で会いたかったぞ」

これは心の底から思ったことだ

決して嘘ではない

だからこそ……終わらせよう

『ガシャン！ガシャン！ガシャン！』

レヴァンティンから三発のカートリッジが排出される

あれほどヴィータには無駄に使うなど言ったばかりなのにな……人のことは言えないものだ

「行くぞ……レヴァンティン！」

『了解……』

レヴァンティンが私に答え、紅蓮の炎がその刀身を包む

私の全身の力を込めて、この切っ先で奴を斬る

「紫電一閃……！」

名を叫び、奴の頭上からレヴァンティンを振り下ろす

奴の構えから白刃取りではなさそうだ

そのまま自分の片手を突き出してきた

そして……

『ガン！』

衝撃が空気を燃やし、辺りを一瞬炎が満たした

だが……

「な……」

私のレヴァンティンは奴の突き出された片手に掴まれ、そのまま止まっていた

「まさか……これが止められるとは……」

そう言いながら、私の体から力が抜けていくのが分かった

敗北……その二文字が私に突き刺さった

私の全力を持ってしても、この男に勝つことは出来なかった

「『シグナム！』」

私の事を心配してか、ヴィータ達が此方に向かってくる

「止める！」

しかし、私は彼女達に止められと言ってしまった

これ以上の戦いは無用だと私が感じてしまったからだろう

「私達が束になって戦っても、この男には適わない……」

ヴィータ達にそう告げて、私はまだに私のレヴァンティンを掴んでいるエターナルを見た

「私達の負けだ……私の事は、煮るなり焼くなり好きにするがいい……
だが頼む…我が主とこの三人だけは、何とか…何とか助けては貰えないだろうか…」

私はそう言ってレヴァンティンを離し、奴に頭を下げた

自らの剣を手放し、敵に頭を下げるなど騎士失格の行動だろう

だが、私の大事な仲間と主を護るためならば……私はどんな屈辱にも耐える

「……………見事だ」

その中、奴が発したのはそんな言葉だった

side out

見事……エターナルはそう言ってシグナムを誉めた

その言葉にはシグナムだけでなく、後ろにいたヴィータ達も驚いていた

「護るものの為ならば……己の心すら捨てる事が出来る
それはなかなか出来ないことだ……
流石は烈火の将シグナムだ」

エターナルはシグナムを賞賛し、握っていたレヴァンティンをシグナムの目の前に突き刺した

「俺はお前達の行動理由は全て知っている…」

今日お前達の前に現れたのは、あることを確認するためだった

お前達は合格点だ……」

その瞬間、エターナルの雰囲気を変化した

禍々しいまでの殺気が無くなり、暖かな感情を抱かせるような優しいものとなった

「さあ……俺を蒐集しろ」

エターナルのその言葉に、シグナム達ヴォルケンリッターは目を丸くした

「なっ！」

「はあ！？」

「え！？」

「！」

目を丸くするヴォルケンス

当然だろう

エターナルは彼女達の行動理由を全て知っていると言っていた

彼女達の行動理由は即ち闇の書を完成させ、主である八神はやてをその呪いから解き放つこと

だが、世間一般的に見ればその闇の書復活は絶対にやってはいけない行為だ

それを知っているエターナルは、自分達を止めに来たのだとヴォルケンズは思っていた訳だ

しかし、そんな彼が言ったのは闇の書を完成させるために必要な行為『蒐集』を自分に行えと言っているのだ

蒐集は相手のリンカーコアの魔力を全て吸い出し、闇の書にそれを吸わせると言うものだ

無論それを行ったからと言って吸われた相手が死ぬわけではなく、単純にしばらく魔法が使えなくなるだけだ

ただし、蒐集した相手にもう一度蒐集を行うことは出来ないらしい

その蒐集で集めた魔力で闇の書に1ページずつ文字が書き込まれていき、全666ページが完成すると、闇の書が復活するわけだ

「本気で言っているのか？」

シグナムが疑いの表情で聞いてくる

「俺は本気だ……無論闇の書を奪おうなどとも考えてはいない」

ヴォルケンスは一旦その場で相談をした

あの男を信用するかどうかと言うことだ

最後までヴィータは反対していたが、少しでも蒐集出来るならば…
と言うことで納得した

「では、今から蒐集を行います…
気を楽しんでくださいね」

そう言ってエターナルの前にシャマルが立った

そして、闇の書を広げ、魔力を集中させる

すると、エターナルの胸から腕が突き出し、その腕に球体状の物が
握られていた

「ハハ…始めてみたリンカーコアが自分の物と言うのも変な物だ…
…」

エターナルは少し苦しそうにそう言った

「少し痛いかも知れませんが、我慢してくださいね？」

シャマルが問いかけると、エターナルは「なるべく痛くないように
してくれ」と言ったので、「善処します」とシャマルは答えた

そして、遂に蒐集が始まった

エターナルのリンカーコアから光の粒子のような物が出現し、それ

はそのままシャルマルの手にある闇の書の中に入っていく

「ぐっ！これは……なかなかの痛みだ……」

恐らく表情を歪めているであろうエターナル

しかし、それでも最初のうちはしっかりと立っていた

だが、それでも後半になるとそうも言ってもらえず、膝立ちになってしまっていた

一方の闇の書は、凄まじいスピードでページが埋まっていた

その光景にはシャルマルだけでなく、他の者も驚愕の表情だった

「ぐっ！がっ……………」

四つん這いになりながら蒐集を受けるエターナル

だが、その時に彼の体に変化が起こったのだ

「ぐっ！ああ……………」

徐々にだが、彼の純白の鎧が消えていつているのだ

そのせいで、彼の正体が明るみになってしまった

「連夜！？」

「連夜君！？」

「大道!？」

「っ!」

上からヴィータ、シャマル、シグナム、ザフィーラの順にそう言った
彼等の驚きようはかなりの物だった

シャマルは闇の書の蒐集を中断した程だ

「……………」

蒐集が中断されると同時に、胸から突き出ていた腕は引っ込み、リ
ンカーコアも体の中に入っていった

激痛から解放された連夜は、そのまま意識を失ってしまった

「……!」「……」

いの一番に飛び出したのはシグナム、ヴィータ、シャマルだった

連夜に駆け寄ろうと三人が連夜に近付いた瞬間、彼女達を遮るよう
に転移してきた人物が居た

それは、腰まで伸びた綺麗な髪と、純白のドレスを着た女性だった

その女性は連夜の前に立ち、シグナム達を睨み付けた

「近寄らないでください……………」

三人に向けそう言ったその女性の目は怒りに満ちていた

「貴様…何者だ？」

突然現れた素知らぬ女性に「近寄るな」と言われて納得するシグナム達ではない

彼女達もその女性を睨み付けた

「私の名はアテネ……彼の…連夜さんのパートナーです。ベルカの騎士達よ」

アテネ……それは連夜をこの世界に転生させ、様々な能力を与えた神の名前である

そして、この名前を名乗った彼女こそ間違いなく本人なのだが、シグナム達はそんなことなど知らない

会ったこともない女性が急に「パートナーです」と言ったのを簡単に肯定できる訳がなかった

「それを証明する物証はあるのか？」

そう言いながらレヴァンティンに手を掛けるシグナム

ヴィータも相棒であるアイゼンを構えた

「物証はありません…」

ですが、あなた方では私を止められません」

そう言ってシグナム達の目の前で、アテネは連夜を抱き上げた

「しまっ……」

言葉が出るよりも早く、彼女は連夜を抱いたまま何処かへと転移してしまった

「シャマル！」

ヴィータとシグナムがシャマルの方に振り向く

当の彼女は必死に追跡を試みているのだろう

だが、直後にその表情は曇ってしまった

「駄目です…反応が消えました」

それは即ち追跡失敗を意味した

その言葉に落胆すると同時に、シグナム達の頭に色々な考えが浮かぶ

ヴィータは「探し回ろう」と言い出した

だが、シグナムがある決断を下した

「もう時間が遅い……主はやてが心配なされる……」

その言葉に誰も反論出来ない

連夜のことは心配だが、一度状況を整理するためにも、シグナム達ははやての家に帰って行くのだった

アテネ side

二人で住んでいるマンションの部屋に転移した

そのまま抱き抱えていた連夜さんをソファーに寝かせる

「……………」

気を失ったまま彼は目覚めない

リンカーコアを調べてみると、やはり魔力が底をつきかけていた

「やはり、蒐集を自分からされたんですね……………」

頭を優しく撫でながら、その表情を伺う

出会った当初は小さかったその体も、徐々に成長しつつある

肉体的にはもう直ぐ10歳になるうとしている

「こんな状態になってまで……………蒐集を受けるなんて、あなたは本当にバカですよ……………貴男がこんなにボロボロになっていくのを、頭では理解出来ても心は理解出来ません……………」

瞳からは勝手に涙が溢れる

この人はいつもそうだ

自分を顧みない

それが自分の大切なものを護るためなら余計にだ

「あまり心配させないでくださいよ…………お兄ちゃん…」

私の言葉は今聞こえているのだろうか？

私は…いつになったらこの人に自分の真実を話せるのだろうか…

s i d e o u t

闇の書 完成まであと29ページ

第四話（後書き）

はい…第四話でした

気付けば総閲覧数やユニーク、お気に入り数が凄い数になってますね
皆さま本当にありがとうございます

さて、そこでこの後書きには質問コーナーを設置したいと思います
質問していただいたらネタバレにならない限りはその質問にお答え
させていただきます

それでは第五話 乞うご期待ください

第五話（前書き）

今回は短いです

少しばかり彼の過去を…と言つよりは回想に近いですね

それでは第五話

お楽しみください

第五話

和やかな雰囲気の中建ち並ぶ民家

その中から、一組の親子が出て来た

「さあ、早く来なさい。おいてっちゃんわよ？」

玄関で靴を必死に履いている二人の子供に冗談っぽくそう言う女性
恐らく母親であろうその女性は、自分の言葉を聞いてやや慌てている子供達を見て微笑んでいた

「お待たせ！さあ、早く乗りなさい」

そこへ一台の車が家の前で止まり、男の声が聞こえた

「ほら、お父さん来ちゃったわよ？準備出来た？」

母親が玄関を見ると、子供達はすっかり靴を履き終わっていた

「良くできました。」

ささ、車に乗りなさい
お買い物よ〜」

母親はそう言って上機嫌で車の扉を開ける

二人の子供達は我先にと中に駆け込んでいった

「ハハハ、元気が良いな
ちゃんと靴は履けたかい？」

先程、お父さんと呼ばれた男性が乗り込んできた二人の子供達にそ
う声を掛ける

「うん！お兄ちゃんが手伝ってくれたよ」

そう言ったのは横で座っている男の子よりも一回り小さな女の子

その男の子をお兄ちゃんと呼んだと言うことは、この二人は兄妹な
のだろう

「ま、まあ僕はお兄ちゃんだし…当たり前だよ父さん」

少し照れながらもそう言って胸を張る少年

その姿を見て、助手席に座った母共々父親は笑っていた

「良い子ね……は、良かったわね愛」

「うん！愛、お兄ちゃん大好きだよ」

そう言って横に座る兄に抱きつく少女

先程の会話からその少女は愛（アイ）—と言う名のようだ

「ハハハ、愛はお兄ちゃんが大好きなんだな？」

父親は笑いながらそう言った

妹は少年の顔を見て一言そう呟くと、動かなくなった

「愛！しっかりしろ愛！！」

体を揺するが愛はもう何も答えてはくれない

再び両親だったものを見る

そして再び妹を見る

自分に笑いかけてくれたあの優しい笑顔は、もう無くなってしまったんだと少年は幼いながらも実感した

「あ…ああ……うあああああああああ！！」

少年は絶叫した

目の前の地獄に、目の前の現実には、頭が狂いそうになった

心が壊れそうになった

いや、壊れた方が少年には楽だったのかも知れない

だが壊れなかった

壊れることが出来なかった

そしてそのまま少年は、自分を包む悲しみ、絶望、その全てから逃げ出すために、再び意識を手放した………

連夜 s i d e

「!!!」

目を開けた其処は、良く知るソファアーの上だった

「此処は……俺の家か……」

辺りを見渡してそれを再確認

と同時に頭に蘇るのは先程の悪夢

「死ぬ前からもう殆ど見てなかったのにな……くそ
なんで今なんだよ……」

頭を抱えながら苦悩する

いまだに鮮明に残るあの記憶

幼いながらに味わったあの事件は決して忘れる事など出来ないこと
だった

「……………忘れんなんてことか？んなこと分かってるよ」

自分と話すようにそう言う連夜

頭に手を当てながら、目はまるで前に誰がいるような目だった

「忘れるわけねえだろ……………だから今の俺があんだよ……………」

自分に言い聞かせるようにそう言う連夜

その後、キッチンの方で物音がするのを連夜は気付いた

「……………」

そして自分のリンカーコアに再び魔力が溢れるように満ち足りているのを確認し、此処まで運んだのが誰なのかと言う疑問に答えが出た

「気がつきましたか？」

そう言ってキッチンから出て来たのはアテネだった

「お前が此処まで運んでくれたのか？」

俺の前に立ったアテネにそう問いかけた

「そうですね。シグナムさん達が介抱しようとしていたので、慌ててあなたを此方に転移させたんです」

それは良かった

起きたらシグナム達が前にいたらかなり面倒だ

「礼を言う……ありがとな、アテネ」

ソファアの上に立ってアテネの頭を撫でる

アテネはそれを素直に受け止め、何処か頭を撫でられて喜んでいるようだった

そう言えば……あいつもこうして頭撫でられるの好きだったな…

そう思った瞬間、アテネの顔が一瞬愛と重なってしまった

「なっ！」

慌てて手を止め、頭を抱える

「どうしましたか？連夜さん」

アテネが心配そうに声を掛ける

「大丈夫だ……問題ない」

そう言うが、端から見れば明らかに大丈夫ではないだろう

「……………すまん…もう大丈夫だ」

何とか頭を振ってもう一度アテネの顔を見る

顔が重なることはなく、しっかり彼女の顔を見ることが出来た

「なら良いのですが……あ、晩御飯出来てますよ?」

まだ少し心配そうに言うアテネだが、俺を信じることにしたようだ
テーブルに向かって夕食が置かれているのを指差した

「頂こう…今日はカレーか?」

ゆっくり立ち上がりながらテーブルの前に立つ

案の定と言うか、其処には美味そうなカレーライスが置かれていた

「はい。ぜひ評価してくださいね
では、いただきます」

アテネが座席についてスプーンを手に取り、カレーを口に運ぶ

俺も手を合わせてからスプーンを手に取る

対面で座っている俺達は互いの表情を見ながら食事をとっていた

口にカレーを運ぶと、その独特の味わいが口の中に広がる

そしてその中にあるちょっとした辛味と甘味

その程良いバランスに思わず声を漏らす

「うん……美味しいぞアテネ」

「そうですね。ありがとうございます」

笑顔でそう言っただけ彼女はまたカレーを口に運ぶ

そんな楽しい雰囲気でも晩飯は終わっていった……………

「連夜さん……」

「ん？」

寝室でベッドの上で相変わらず俺を抱き枕のようにして眠るアテネが、不意に俺の名前を呼んだので驚いた

「もう……………自分から蒐集されようなんてしないでくださいね……………心配したんですから……」

そう言っただけ俺を抱きしめる力を強くするアテネ

俺はそんな彼女をとて愛らしく感じた

だから、いつもならやらないが、俺も彼女の背中に手を回した

「！」

「分かったよ……………無茶はするが、あんな事はもうしない……………約束だ……………アテネ」

そのままゆっくり彼女の胸に頭を傾け、俺の意識はどんどん深く沈んでいった

「はい……約束ですよ……」

そんな彼女の言葉を最後に、俺は眠りに落ちていった

s i d e
o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5068x/>

リリカルなのはThe origin 永遠の名を使う者

2012年1月14日09時50分発行